

中野北遺跡

—近鉄長野線単独立体交差事業に伴う発掘調査—

大阪府埋蔵文化財調査報告二〇二〇一三

令和3年3月

大阪府教育委員会

大阪府教育委員会

中野北遺跡

—近鉄長野線単独立体交差事業に伴う発掘調査—

大阪府教育委員会

序文

本書で報告します中野北遺跡は、富田林市に所在する粟ヶ池を取り囲む範囲に広がる旧石器時代から中世に至る複合遺跡です。

大阪府教育委員会では、主要地方道美原太子線整備事業に伴い過去三度にわたって中野北遺跡及び隣接する宮町遺跡において発掘調査をおこない、古墳、古墳時代から平安時代にかけての掘立柱建物跡や奈良時代～中世の溝跡、また中世から現代にかけての粟ヶ池の堤体等を検出しています。

今回報告します中野北遺跡は、主要地方道美原太子線整備事業に関連する近鉄長野線単独高架化事業に先立ち令和元年度に発掘調査を行ったもので、古墳時代の竪穴住居等の集落跡を中心に、縄文時代から江戸時代にかけての遺物、遺構を確認することができました。これらは、当該地域の歴史の解明に新たな知見を加える貴重な成果ということができます。

最後になりましたが、調査の実施に当たり、地元関係者ならびに大阪府都市整備部、大阪府富田林土木事務所、富田林市教育委員会の方々には多大なご協力を頂きましたことに深く感謝いたします。

令和3年3月

大阪府教育庁文化財保護課長

大野 広

例言

1. 本書は、大阪府教育委員会が大阪府都市整備部の依頼を受けて令和元年度に実施した、近鉄長野線単独立体交差事業に伴う、富田林市宮町所在の中野北遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は文化財保護課調査事業グループ主任専門員 三木 弘、同グループ副主査 木村啓章、同グループ技師 石田尚子を担当者として実施した。
3. 遺物整理は、文化財保護課調査管理グループ専門員 藤田道子、調査事業グループ副主査 木村啓章を担当者として実施した。
4. 発掘調査の調査番号は 19007 である。
5. 本書に掲載した遺構写真の撮影は発掘調査担当者が行い、遺物写真の図版 15～図版 25 は、イト一フォトに委託した。
6. 発掘調査にあたっては、空中写真測量、図化作業をジオテクノ関西株式会社に委託して実施した。
7. 年代測定については、株式会社パレオ・ラボ（パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ 伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadze・辻 康男）に委託し、その成果を第 4 章に掲載した。
8. 本書の執筆及び編集は、第 4 章を除いて文化財保護課調査事業グループ副主査 木村啓章が行った。
9. 発掘調査の出土遺物や写真・図面等の記録資料は、大阪府教育委員会で保管している。
10. 発掘調査・遺物整理にあたっては、以下の方々よりご指導・ご教示・ご協力いただきました。
大阪府都市整備部、富田林市教育委員会（順不同）
11. 発掘調査・遺物整理ならびに本書の作成に要した費用は、大阪府都市整備部が負担した。

凡例

1. 本書で用いる座標値は世界測地系（国土地理座標第VI系）に基づき、方位針は座標北を示す。水準値はT.P.値（東京湾平均海面）を用い、本文および挿図中ではT.P. +○mと表記する。
2. 遺構番号は、遺構の種類に関係なく、検出した順に付している。これは発掘調査での記録と合致する。また、掲載遺物に付した番号は通し番号で、挿図と図版の番号は一致している。
3. 土層および遺物の色調については、『新版 標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄 / 2006年度版）に拠る。
4. 遺物実測図の断面は、須恵器を黒塗り、瓦器・瓦質土器を網伏せとし、その他を白抜きとした。
5. 引用・参考文献は第4章については章末に記し、その他は巻末に一括した。

本文目次

序文	
例言	
凡例	
目次	
第1章 調査の経過と調査方法.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査の方法.....	1
第2章 地理的環境・歴史的環境と既往の調査成果.....	4
第1節 地理的環境.....	4
第2節 歴史的環境.....	4
第3章 調査成果.....	9
第1節 基本層序.....	9
第2節 第1調査区.....	10
第3節 第2調査区.....	21
第4節 第3調査区.....	27
第5節 第4調査区.....	31
第6節 第5調査区.....	38
第7節 第6調査区.....	41
第8節 第7調査区.....	49
第4章 自然科学分析.....	51
第5章 総括.....	53
引用・参考文献.....	57
観察表.....	59
抄録	

挿図目次

図 1 調査地位置図.....	1
図 2 調査区位置図.....	2
図 3 調査区区割り図.....	3
図 4 展示風景.....	3
図 5 土地条件図.....	4
図 6 中野北遺跡周辺遺跡地図.....	6
図 7 第 1 調査区北壁断面図.....	10
図 8 第 1 調査区東壁断面図北半.....	11
図 9 第 1 調査区東壁断面図南半.....	12
図 10 第 1 調査区平面図.....	13
図 11 壴穴住居 0 0 5 平・断面図.....	14
図 12 壴穴住居 0 0 5 カマド出土状況図.....	15
図 13 土坑 0 0 4 平・断面図.....	16
図 14 土坑 0 0 6 、 0 0 8 ~ 0 1 0 平・断面図.....	17
図 15 壴穴住居 0 0 5 出土遺物.....	18
図 16 第 1 調査区遺構出土遺物.....	19
図 17 第 1 調査区包含層出土遺物.....	20
図 18 第 2 調査区北壁断面図.....	21
図 19 第 2 調査区西壁断面図南半.....	22
図 20 第 2 調査区西壁断面図北半.....	23
図 21 第 2 調査区平面図.....	24
図 22 第 2 調査区溝 0 1 7 ~ 0 1 8 平・断面図.....	25
図 23 第 2 調査区出土遺物.....	26
図 24 第 3 調査区南壁断面図.....	27
図 25 第 3 調査区西壁断面図南半.....	28
図 26 第 3 調査区西壁断面図北半.....	29
図 27 第 3 調査区平面図.....	30
図 28 第 3 調査区出土遺物.....	31
図 29 第 4 調査区北壁断面図.....	31
図 30 第 4 調査区東壁断面図.....	32
図 31 第 4 調査区平面図.....	33
図 32 第 4 調査区落ち込み 0 2 9 平・断面図.....	34
図 33 第 4 調査区井戸 0 2 1 平・断面図.....	35
図 34 第 4 調査区落ち込み 0 2 9 出土遺物.....	36
図 35 第 4 調査区落ち込み 0 2 9 出土遺物.....	37
図 36 第 4 調査区井戸 0 2 2 ・ 包含層出土遺物.....	38
図 37 第 5 調査区平面図.....	39
図 38 第 5 調査区土坑 0 2 3 、 0 2 4 、 0 2 5 平・断面図及び土坑 0 2 3 出土遺物.....	40

図3 9 第6調査区西壁断面図南半.....	4 2
図4 0 第6調査区西壁断面図北半.....	4 3
図4 1 第6調査区平面図.....	4 4
図4 2 第6調査区上層遺構平・断面図.....	4 5
図4 3 第6調査区流路0 2 0平・断面図.....	4 6
図4 4 第6調査区瓦組遺構出土状況図.....	4 6
図4 5 第6調査区出土瓦.....	4 7
図4 6 第6調査区出土遺物.....	4 8
図4 7 第7調査区確認トレーニチ東壁断面図.....	4 9
図4 8 第7調査区平面図.....	5 0
図4 9 較年代測定結果.....	5 2
図5 0 粟ヶ池周辺古墳時代後期～飛鳥時代の遺跡分布.....	5 4
図5 1 粟ヶ池西岸の様相.....	5 5

表目次

表1 粟ヶ池関連近世文献.....	8
表2 基本層序対応表.....	9
表3 測定試料.....	5 1
表4 測定結果.....	5 2
表5 粟ヶ池周辺の古墳時代後期～飛鳥時代の遺構分布.....	5 4

原色図版目次

- 原色図版1 調査区全景
- 原色図版2 第1調査区竪穴住居005
- 原色図版3 第1調査区出土遺物及び第4調査区出土遺物
- 原色図版4 第4調査区出土遺物

図版目次

- 図版1 第1調査区(1)
- 図版2 第1調査区(2)
- 図版3 第1調査区(3)
- 図版4 第1調査区(4)
- 図版5 第1調査区(5)及び第2調査区(1)
- 図版6 第2調査区(2)
- 図版7 第3調査区
- 図版8 第4調査区(1)
- 図版9 第4調査区(2)
- 図版10 第4調査区(3)及び第5調査区(1)
- 図版11 第5調査区(2)及び第6調査区(1)
- 図版12 第6調査区(2)
- 図版13 第6調査区(3)
- 図版14 第6調査区(4)及び第7調査区
- 図版15 第1調査区出土遺物(1)
- 図版16 第1調査区出土遺物(2)
- 図版17 第1調査区出土遺物(3)
- 図版18 第1調査区出土遺物(4)
- 図版19 第1調査区出土遺物(5)及び第2調査区出土遺物(1)
- 図版20 第2調査区出土遺物(2)及び第3調査区出土遺物
- 図版21 第4調査区(1)
- 図版22 第4調査区(2)
- 図版23 第4調査区出土遺物(3)及び第5調査区出土遺物及び第6調査区出土遺物(1)
- 図版24 第6調査区出土遺物(2)
- 図版25 第6調査区出土遺物(3)

第1章 調査の経過と調査方法

第1節 調査にいたる経緯

中野北遺跡は富田林市中野町～宮町に所在する。東を流れる石川の中位段丘の中央部に位置し、栗ヶ池を取り囲み、その南東側に広がる弥生時代から中世にかけての遺跡である。発掘調査は、主要地方道美原太子線（栗ヶ池工区）の道路改良事業に関連する近鉄長野線単独立体交差事業に伴うものであり、大阪府都市整備部富田林土木事務所の依頼を受けて実施したものである。

今回の事業は、令和元年に開通した栗ヶ池大橋を含む一般国道（旧）170号から一般国道170号（大阪外環状線）に至る区間の道路を跨ぐ近鉄長野線の高架部分を建設するもので、路線の軌道は東側の隣接地に迂回する形で仮設的に付け替えられ、これまでの軌道部分に建設工事が進められていく形となり、この範囲南北約300mにわたる範囲において実施した。



図1 調査地位置図

第2節 調査の経過と方法

調査の経過

発掘調査の対象となった近鉄長野線の高架化予定箇所は、栗ヶ池西岸に接するこれまで鉄道が敷設されていた箇所で、全体の長さは約300m、幅約8mとなる。調査区はこの高架化予定箇所の橋脚部分を中心に設定し、既に開通した道路部分が間に挟まることや作業工程上の理由から、北から南に向かって順番に第1調査区～第7調査区に分割して調査を行った（図2）。なお第6調査区、第7調査区については、掘削深度が想定より深くなり、湧水があったこと、また鉄道に隣接する箇所であることから、近鉄軌道エンジニアリング共同企業体との協議の上安全面を最大限に考慮し、遺構・遺物の出土が希薄であったため、可能なところまでの掘削にとどめ、部分的に下層の確認掘りを行ったところで、調査を断念せざるを得なかった。

令和元年7月1日より調査掘削を開始し、第1、2、3調査区、第6、7調査区、第4、5調査区の順番に、令和2年1月31日まで調査を行った。面積は、第1調査区364m²、第2調査区289m²、第3調査区350m²、第4調査区278m²、第5調査区281m²、第6調査区284m²、第7調査区80m²の合計1927m²

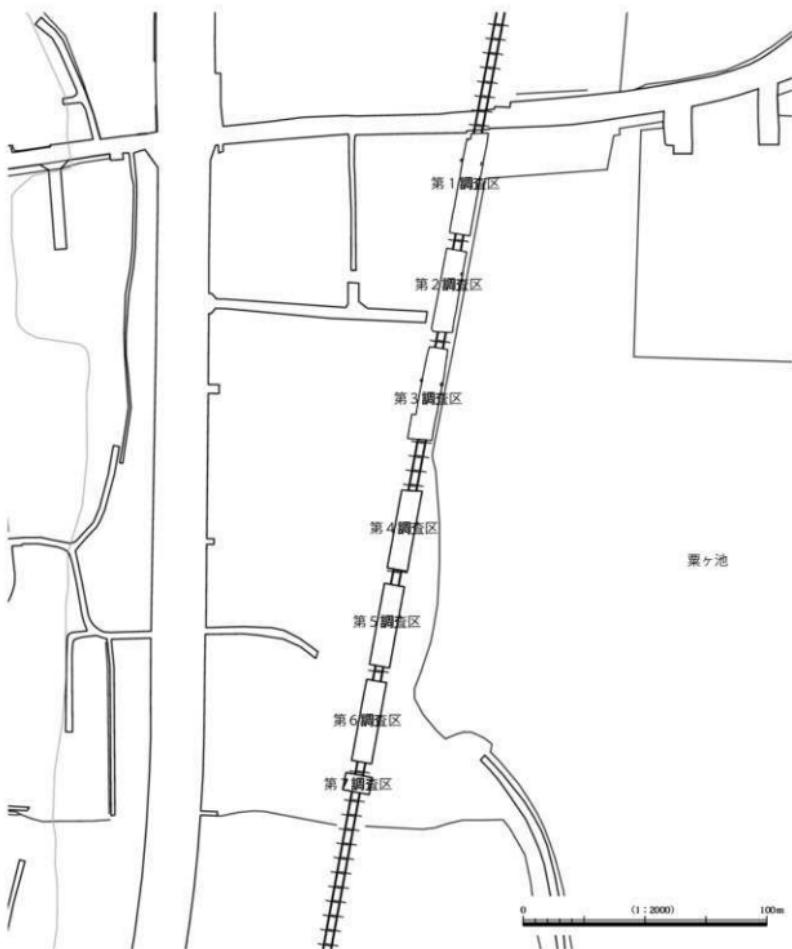


図2 調査区位置図

となる。

調査区は南北方向に長く設定されていることから世界測地系に基づく座標に基づいたグリッド設定をせず、図3のとおり調査区北端から南北方向に10m間隔の地区設定をした。

遺物の取り上げはグリッドに基づき行い、遺構番号は、調査区を分割したものの、基本的に連続的であることから全ての地区での通し番号として3桁の番号を付した。

掘削に際しては、整地土、近代の鉄道盛土、近代耕作土をバックホウで掘削し、その下層については

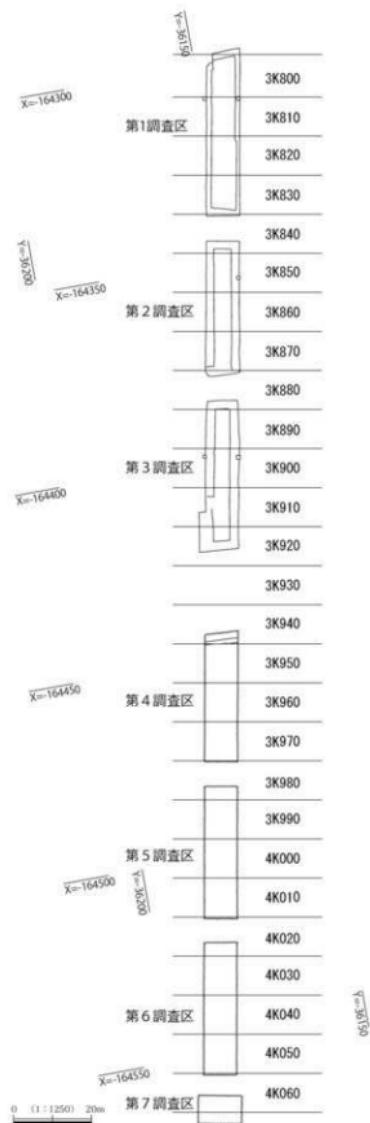


図3 調査区区割り図



図4 展示風景

人力で掘削し、遺構検出・遺構掘削を行った。遺構掘削に際しては、半裁または地層観察用の駐を残すことによって地層断面の観察、写真撮影、断面図の作成を行った。

検出した遺構面の実測について、遺構全体図は図化作業の効率化をはかるために、5回にわたってラフテレンクレーンによる空中写真測量を実施した。個々の遺構、遺物出土状況等の実測については、調査区周辺に配した4級基準点をもとに、必要に応じ20分の1、10分の1の縮尺で個別に実測図を作成した。また、調査区の上層断面図は、原則として20分の1の縮尺で作成し、東京湾平均海面水 (T.P.) を基準とした。

撮影には、6×7cm判フィルムカメラ及びデジタルカメラ (APS-C センサー) を使用した。特に6×7cm判は、白黒フィルムで撮影し、遺構検出面の全景や重要な遺構の撮影に使用した。

なお調査成果については、令和2年2月5日～3月27日の期間に富田林市中央公民館において、『中野北遺跡発掘調査の速報展示—栗ヶ池周辺の遺跡—』として富田林市教育委員会との共同開催で速報展示をおこない (図4)、今回の調査速報とともに、中野北遺跡の過去の調査成果や周辺の宮町遺跡、栗ヶ池遺跡、桜井遺跡の近年の調査成果についても併せて紹介した。

第2章 地理的・歴史的環境と既往の調査成果

第1節 地理的環境

富田林市は、大阪府の南東に位置し、市域中央には大和川水系の石川が流れ、西には羽曳野丘陵が広がり、東には金剛山地を望む。中野北遺跡は市域の北東部、富田林市宮町1丁目に所在し、現地表は各調査区でT.P. + 56.5 m前後となる。調査地の東側には南河内屈指の規模である溜池である粟ヶ池が存在している。

周辺の地形について概観する（図5）。調査地の東側には石川が北流しており、その両岸沿いに沖積地が形成される。石川の西側は沖積地から10 m程度の比高差のある段丘崖が南北方向に見られ、幅1 km前後の中位段丘を形成しており、この段丘面に中野北遺跡は立地している。調査地のさらに西側には羽曳野丘陵が広がり、西に向かって約300 mは丘陵に向かってなだらかに上がっていく地形をなしでいる。

粟ヶ池大橋の橋梁部の確認調査から、この中位段丘面の中央には埋積谷が南北方向に存在しており、調査地に隣接する粟ヶ池はこの谷を堰き止めて築造されたものと考えられている。調査地は、旧地形の様相から全体的に東側に下がっていることが確認され、土地条件図の情報と併せて埋積谷の崖面にあたる部分にかかっていることが推測されている（大阪府教育委員会2011）。



図5 土地条件図（国土地理院地図を改変）

第2節 歴史的環境

周辺の歴史的環境

本調査地の東側には東高野街道が南北に走り、西側には式内社である美具久留御魂神社があり、その周辺には古くからの集落が存在する。これらの地域と重なりつつ、中位段丘面に多くの遺跡が分布している（図6）。本調査地周辺の歴史的環境について、粟ヶ池周辺のエリアを中心に時代順に概観する。

縄文時代以前はその活動痕跡は乏しい。旧石器時代は中野遺跡において国府型ナイフ、縄文時代は喜志遺跡、桜井遺跡、宮町遺跡で遺物が確認されている程度である。弥生時代は、本調査地の北に位置する喜志遺跡、南に位置する中野遺跡の二遺跡が中期の代表的な遺跡であり、サヌカイト製石器の未成品、剥片が大量に出土する石器製作の集落と考えられている。特に喜志遺跡では第Ⅲ様式古段階の方形周溝墓が見つかり、さらに隣接する喜志西遺跡も方形周溝墓が確認されている。中期以降石川西岸では集落遺跡が激減するとされているが、近年、中野北遺跡の南西部分において弥生時代後期の溝二条の遺構を検出しており、西岸においても集落が存在する可能性が指摘されている（富田林市教育委員会 2019）。

古墳時代になると、本調査地の西側、羽曳野丘陵の東縁辺部に前期古墳が展開する。既に消滅しているが、全長 60m の前方後円墳である真名井古墳、直径 24m の円墳である鍋塚古墳が著名である。美具久留御魂神社境内の裏山には宮神社裏山古墳群があり、前期としては前方後円墳 1 基、そのほか後期の円墳 3 基が確認されている。中後期以降は、石川中流域の段丘上の喜志遺跡、喜志西遺跡、桜井北遺跡、中野遺跡で埴輪が見つかることから埋没古墳の可能性が指摘されており（富田林市教育委員会 1995）、実際に中野遺跡における新堂古墳をはじめ、中野北遺跡、宮町遺跡でも発見されている。集落としては喜志西遺跡で前期の土坑、溝、ピットが確認されている程度で全体としては少ないが、後期、特に 6 世紀後半以降に遺跡数がやや増加する。宮町遺跡では掘立柱建物や溝、粟ヶ池遺跡ではピット群、中野遺跡では、掘立柱建物や 6 世紀末から 7 世紀初頭にかけての溝や焼土塊を多く含むカマド状遺構が検出されている。これらの遺跡は古代まで続いている傾向にある。

古代には本調査地南西の飛鳥時代前半に創建された新堂廃寺をはじめ、重要な遺構・遺物が各遺跡で検出されている。中野遺跡では、遺跡の北東部にある谷から飛鳥～室町時代の大量の瓦が出土しており、そのほか塔心礎や仏像の光背とされるもの、7 世紀後半統一新羅時代の土器が出土していることから、寺院跡と考えられ、「中野廃寺」と命名されている。桜井遺跡では、昭和 59 年度の調査において、大量の奈良時代の土器、須恵器等が出土し、その中に新堂廃寺跡で出土した同范型の軒丸瓦が含まれていたことから、この地と新堂廃寺跡との関係性が指摘されている（大阪府教育委員会 1985）。そのほか平成 10 年度の調査では飛鳥時代～奈良時代の土坑、溝、ピット、平成 29 年・30 年度の調査においても飛鳥時代の溝跡や奈良時代、平安時代の建物跡が見つかっている（註 1）。

中世では、東高野街道以東の桜井遺跡、そして中野北遺跡において鎌倉時代～室町時代の遺構・遺物が多数確認されている。中野遺跡では鎌倉時代～室町時代の土坑、溝、井戸、7 棟の重複する掘立柱建物群を検出しており、集落の存在が指摘されている。喜志西遺跡では中世の包含層上面に正方位の耕作溝が確認されており、宮町遺跡でも条里に沿った耕作溝が検出されていることから、粟ヶ池北西側は条里に合う耕作地が広がっていた可能性があろう。

近世以降については報告事例は多くないが、桜井遺跡で 17 世紀代の柱穴、井戸とともに大量の瓦が出土している。このほか平成 25 年に新規発見された宮町今池遺跡では江戸時代の粘土探掘坑が検出されており（註 2）、粟ヶ池の東側だけでなく、西側の様相もその実態が少しづつ分かってきている。

中野北遺跡及び宮町遺跡の既往の調査成果

今回の調査区が位置する中野北遺跡では、昭和 56 年度の大坂府教育委員会による府道美原太子線の発掘調査以降、府教育委員会及び富田林市教育委員会によって調査が行われている。遺跡範囲のうち東高野街道以東で調査が数多く行われ、主に飛鳥時代～中世にかけての遺構が見つかっている。喜志城、中野古城など楠氏にかかると考えられる中世後期の城館跡があったとされる位置に近く、これまでの特筆すべき成果として、富田林市教育委員会による調査で、15・16 世紀に埋没した幅 6m、深さ 1.5m で中世城館跡の堀と考えられる南北方向の巨大な溝が確認された。この溝の北端も確認されており、

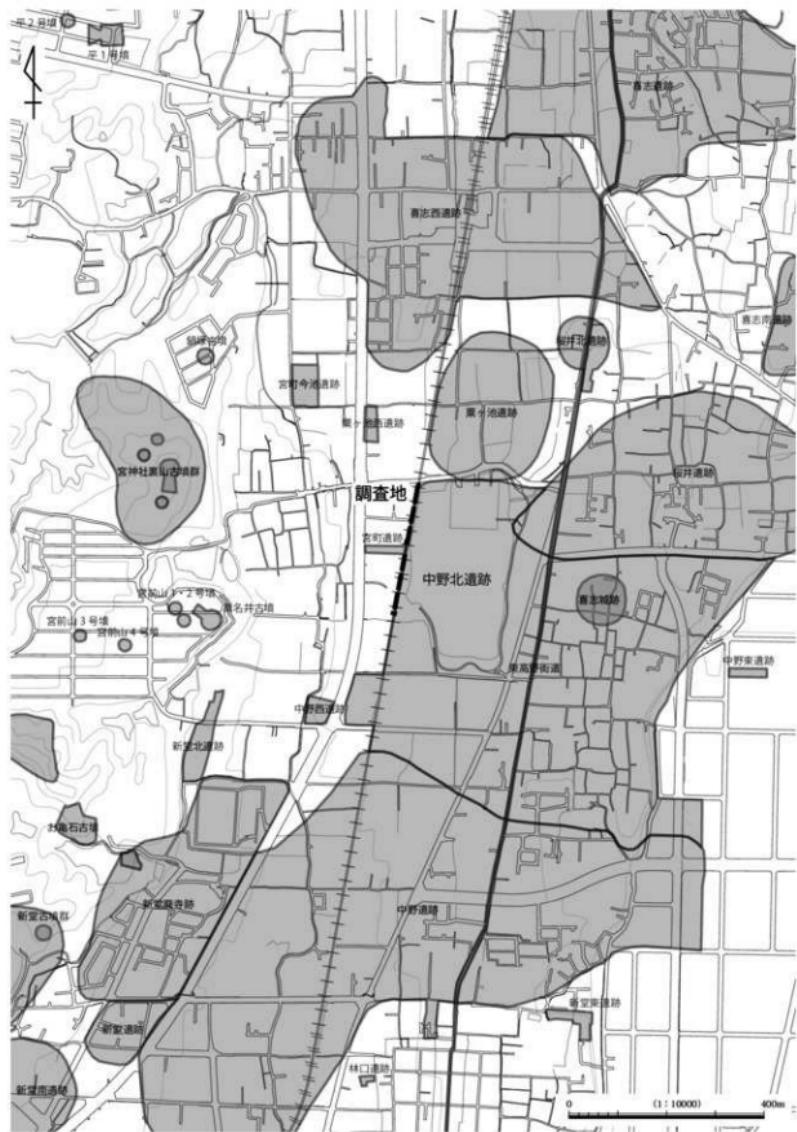


図6 中野北遺跡周辺遺跡地図

一辺 100 m 以上の城館が復元できる。そのほかこの溝の東側では、14・15 世紀の遺構が多数確認されている。また近世の遺構としては、東高野街道東側、真宗大谷派正受寺の本堂建替に伴う調査を行っており、18 世紀創建当初の様相が確認された。

近年の大坂府教育委員会の調査成果としては、平成 16 年度および平成 22 年度に粟ヶ池バイパスの道路部分、今回の調査地の第 3 調査区、第 4 調査区の粟ヶ池を挟んでちょうど対岸に位置する部分において発掘調査が行われている（大阪府教育委員会 2005, 2011）。平成 16 年度には、小石室をもつ 1 辺 4.9 m となる方墳、飛鳥時代の土坑墓、奈良時代の南北溝および中世の耕作溝などが確認された。平成 22 年度には、中世から現代にかけての粟ヶ池東岸における堤が検出され、粟ヶ池の改修の様相が確認されている。平成 22 年度調査では令和元年度に開通した粟ヶ池大橋の橋脚部分の確認調査をおこなっており、粟ヶ池築造以前の埋積谷の存在が指摘されている。

宮町遺跡は、調査地の第 3 調査区と第 4 調査区に挟まれる粟ヶ池バイパスの道路部分で調査が行われており、上層で中世の耕作溝、地表面で古墳時代中期～後期の重複した古墳、また古墳時代後期～奈良時代の柱穴・土坑・溝・落込み等が確認され、集落は墓域から居住域、そして中世には生産域に変遷した事が明らかになっている。今回の調査区はこの宮町遺跡に隣接することから、これら遺構の広がりを確認することも期待された。

粟ヶ池の歴史

中野北遺跡を考えるうえで重要な粟ヶ池についても説明しておく必要がある。粟ヶ池は石川流域最大規模で、南河内有数のため池である。面積は約 8ha、水深は 3～4 m 程度で、6箇所に堰があり北方の約 60ha の水田を灌漑している。現在、このため池は石川の上流の深溝（ふかうそ）井堰から段丘崖に沿って南北方向に深溝井路をとおり、粟ヶ池西側を抜け、美具久留御魂神社の参道を経由し、池の北西端を唯一の取水口から池の水をためている。

この粟ヶ池の存在を明記する文献史料は近世まで存在しない。その築造にかんしてはいくつかの説が存在するが、築造時期については明確になっていない。説については、『日本書紀』仁徳天皇 13 年 10 月条の「冬十月、和珥池を造る。」や『古事記』を引用し、粟ヶ池が仁徳天皇の築造した「和爾池（和珥池）」とする説（富田林市 1985）、「粟ヶ池」と「和爾池」の二つを記載し、粟ヶ池は聖武天皇の治世に築造されたとする記述（河内名所図会）、さらにはこの二つの池の間の堤防が壊れ一つの池となったとする記述がある（大阪府 1922）。

またこれまでの考古学的調査からは、周辺に条里地割が認められていること、中野北遺跡において南北方向に走る奈良時代の溝が走ること、池の南に位置する谷川遺跡において現在の深溝の前身と推定される奈良時代の灌漑水路を確認したことから、奈良時代にはこれら水利施設が整備されており、粟ヶ池の築造と関連して機能していたものと考えられている（大阪府教育委員会 2005）。また先述したとおり、現在の堤部分については、東側部分の発掘調査により中世から現代にかけて大きく 4 回にわたって改修を受けたことがわかっている。

江戸時代の粟ヶ池の様相については、明和六（1769）年の喜志村明細帳に詳しい（表 1）。明細帳によれば、池の水は喜志村と新家村の立合で利用されていたことがわかっている。明和三（1766）年の普請の記録には、年々深溝から池に土砂が流れ込み、池床が浅くなっているので、浚渫し、その土砂を利用して池の南西部分を耕作地として造成する計画を立てている。当時すでに七五〇坪は造成されており、池面積二万三千二〇〇坪のうち五二五〇坪を埋め立てるというものであった。しかし寛政十（1798）年にも同様の普請を請願しており、その際の池面積が大きく変わっていないことから、明和三年当初の計画は實際には大規模なものではなかったと推測されている（富田林市 1972）。また明細帳には堤の

表1 粟ヶ池関連近世文献

文献名	刊行(記述)年代	記述抜粋(概要)
「河内志」「五畿内志」	享保二十・二十一(1735・36)年	・和爾ノ池 在二箇志村一廣九百畝 相伝仁德天皇十三年冬十月造 ・美具久御御魂神社 嘉祥三年十二月授二從五位上一 在二箇志村和爾池西一、一名和爾神社今称下水分 ・分祠有一元二鬼天正年間告贈一
「吉志村明細帳」	明和六(1768)年	明和三(1766)年 (年々深堀跡から土砂が流れ込み、池床が浅くなったので、これを浚渫して深くし、同時に浚渫した土砂を利用して池の南西部に耕地を造成する計画。池床面積約23200坪のうち5250坪を埋め立てての計画) ①宇賀ヶ池 福池 壱ヶ所 北堤長百三拾丈間 高平均壹間五尺 敷平均六間 馬踏平均六間壹尺 同所西南三方 堤長四百拾壹間半 高平均壹間 敷平均六間五尺五寸 馬踏平均壹間五尺 右粟ヶ池明和三四年後御普請奉相御御持米拾五石六斗五升合被下置候 ②字粟ヶ池除下種 伏種長四間六尺 内法壹尺武寸四方 前貝島居建 板厚三寸 (省略) 同所西側 伏種長六間半 内法八寸四方 前貝島居建 板厚二寸 (省略) 右粟池伏種之内、四ヶ所明和三四年移置中候ニ付、伏種事頭五百七拾勿壹分六厘被下置候、一 ③字粟ヶ池と申ハ水ニ而毎年八・ナ夜後便ニ堂国郡部郡都村、波方村領ニ有之字ふかうそ井路ニ水引候、一 寛政十(1798)年 (池浚えの音詠を頼い出る。池床面積約23500坪)
「河内名所図会」	享和元(1801)年	「粟ヶ池 同村(新野村)にあり むかし 型式帝御時 墓らせ給ふとなん」 「和爾池(ワニのいけ) 吉志村とあり 広サ九百畝 日本紀伝 仁德天皇十三年冬十月造リ二和田ノ池ヲ 一築ク二城野ノツマ」 「美具久御御魂神社 吉志村和爾ノ池の西にあり 一名 和爾神社 今 下水分ノ神社と称□ 例祭八月 十五日 十一月十六日 □村六瀬村の生土神□嘉祥三年十二月授ク二從五位上ツマ」
「吉志村明細帳」	明治二(1768)年	辛明和(1769)六年の記述と同じ

規模に関する記述もあり、「溜池 壱ヶ所 北堤長百三拾丈間 高平均壹間五尺 敷平均六間 馬踏平均六間壹尺、同所西南三方 堤長四百拾壹間半 高平均壹間 敷平均六間五尺五寸 馬踏平均壹間五尺」とされている。昭和以降は、池北部の富田林市民会館建設、平成2年オアシス整備事業、そして粟ヶ池バイパス開通事業の中で改修、改変を受けている。

近代以降

調査区は近鉄長野線の現代までの鉄道軌道部分にあたることから、その点についても触れておく。明治二十九(1896)年に柏原一富田林間を結ぶための「河陽鉄道株式会社」が設立し、明治三十一年(1998)年に古市・富田林間に開通した。その後、会社の譲渡や合併を経て、昭和十九年に「近畿日本鉄道」が設立した。現在の近鉄長野線はこの河陽鉄道からの路線を引き継ぐもので、調査区内にはのかつての河陽鉄道の軌道の築堤が存在する。また昭和初期の地図等から、粟ヶ池の北西端、すなわち今回の調査区1区から2区にあたる部分には、宮ノ前駅(のちの旭丘駅)があったと考えられる。昭和六十二(1987)年の複線化に至り、おおむね今回の高架工事以前の姿になった。

註

- (1) 速報展示解説による。
- (2) その調査成果については、富田林市公式ウェブサイト文化財課ページにて紹介されている。

第3章 調査成果

第1節 基本層序

調査区全体の基本的な層序は、現代の鉄道盛土及び高架化事業本体工事に伴う盛土、旧河陽鐵道盛土、数面にわたる近代～中世の耕作土の直下が基盤層となっている（表2）。また、基盤層は褐色砂礫層～黄褐色粘質シルトからなる。今回の調査地は旧地形が起伏に富んでおり、各調査区によって基盤層の様相は異なるが、第1～第6調査区の途中までは基盤層は砂礫層が主体となり、第6調査区南側から第7調査区にかけては、黄褐色粘質シルト層が主体となる。各調査区ともにこの基盤層上面において中世以前の遺構を確認した。調査地全体の現地表はおむね T.P. + 56.5 m 前後であるが、基盤層までの深さは各調査区によって異なっている。全体の傾向として、調査区の西側から東側すなわち栗ヶ池側にむかって傾斜している。南北方向には第1調査区から第4調査区にかけて旧地形が下がっていき、第4調査区北側で最深となる。第4調査区中央から南にかけては、現地表とあまり変わらない高さまで地形が上がり第5調査区で最も高くなり、第6調査区の北側から再び下がっていく地形となる。地形の最浅部と最深部の比高差は2 m程度になる。地形の下がった所では、池の堆積と考えられる水成堆積層を第1～第3調査区及び第6調査区で確認した。この堆積は層序及び出土遺物から中世以降と考えられ、中世以降にはおむね現在と同じ範囲まで池が広がっていたことが想定される。

各調査区の基本層序については、調査区毎に番号を付したが、隣接する第1、2調査区、第3、4調査区、第6、7調査区は対応する層が同番号になるように設定している（表2）。そのほか上述したように地形の起伏に富んでおり対応関係が分かりにくい部分があるため、調査区毎に詳述する。

表2 基本層序対応表

第1調査区北	第1調査区南	第2調査区北	第2調査区南	第3調査区	第4調査区北	第4調査区南～6調査区北	第6調査区南～第7調査区
現代盛土							
1層 河陽鐵道盛土							
2層 (近代)							
4・5層 (近世)	12層 (近世)	12層 (近世)		4・5層 (近世)	4・5層 (近世)		1層 河陽鐵道盛土
6層 (近世)	13・14層 (近世)	13・14層 (近世)		6層 (近世)	6層 (近世)		2層 (近代)
(基盤層)	15・16層 (中世)	15・16層 (中世)		7・8層 (近世盛土)	7・8層 (近世盛土)		3・4層 (近代)
	17・18層 (中世)	17・18層 (中世)		12・13層 (近世以前)	12・13層 (近世以前)		5層 (近代)
	(基盤層)	23層 (中世以前)	(基盤層)		16・35層 (古墳時代)		6・7層 (近世)
※層名は各調査区層序に対応							

第2節 第1調査区

基本層序（図7～9）

第1調査区の現地表はT.P.+56.6m前後となる。基本層序は、現代盛土及び旧河陽鉄道盛土（層厚80cm）の下に、近代～河陽鉄道以前の耕作土層である2層（層厚30cm）とその床土層の3層、近世の耕作層である4層とその床土層の5層（層厚15cm）、さらに一部不明瞭な部分はあるが、同様に近世の耕作層である6層とその床土層の9層（層厚15cm）となる。調査区中央から北東部分にかけてこの6・9層の下に、深さ20cm以上の落ち込み状の地形があり、砂礫混じり青灰色のシルト～緑灰色砂礫層が堆積している。これはその層相から旧栗ヶ池の堆積層と考えられる。このうち19層は旧栗ヶ池堆積層の最上層であり、ブロックが混じっていることから、部分的に埋め立てられている可能性がある。この堆積層中からは近世の染付や瓦が出土しており、この上層の耕作土層はすべてそれ以降のものであると考えられる。

また東壁断面をみると、調査区北端から23mほどの地点には畦畔があり、この畦畔を境に南に向かって下がっていく地形となる。近世耕作土層である12層（層厚10cm）、中世の耕作土層である13層とその床土層の14層（層厚20cm）、15層とその床土層16層（層厚15cm）、17層とその床土層18層（層厚10cm）となり、第1調査区南壁付近で最深となる。12層は時代の判別できる遺物は確認できなかつたが、層の対応関係から近世以降、一方13層以下は染付などの遺物が確認できず、瓦器、瓦質土器等の遺物を中心に含むことから中世以前であると判断した。

基盤となる層は黄灰色砂礫層からなり、直上まで中世の遺物を包含する耕作土層となっており、遺構面は強く削平を受けていたが、この上面において古墳時代の遺構を検出した。

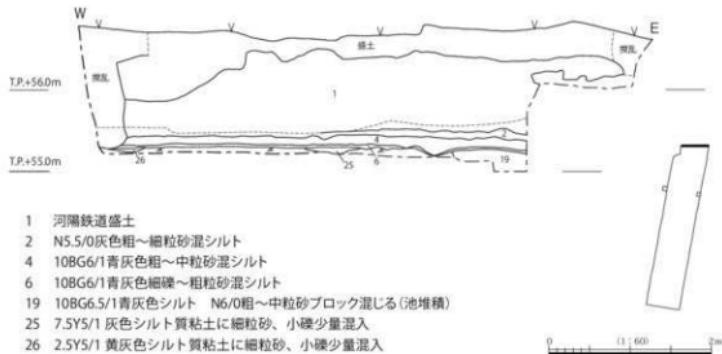


図7 第1調査区北壁断面図

検出された遺構

竪穴住居005（図11）

調査区の中央から西よりにおいて、東辺4.5mの竪穴住居を検出した。中世以降の耕作地化により調査区全体が面的に削平を受けているため深さは5～10cm程度である。全体の形については不明であるが、四辺の半分ほどには周溝が残っており、東辺中央にはカマドをもった構造となっている。カマド

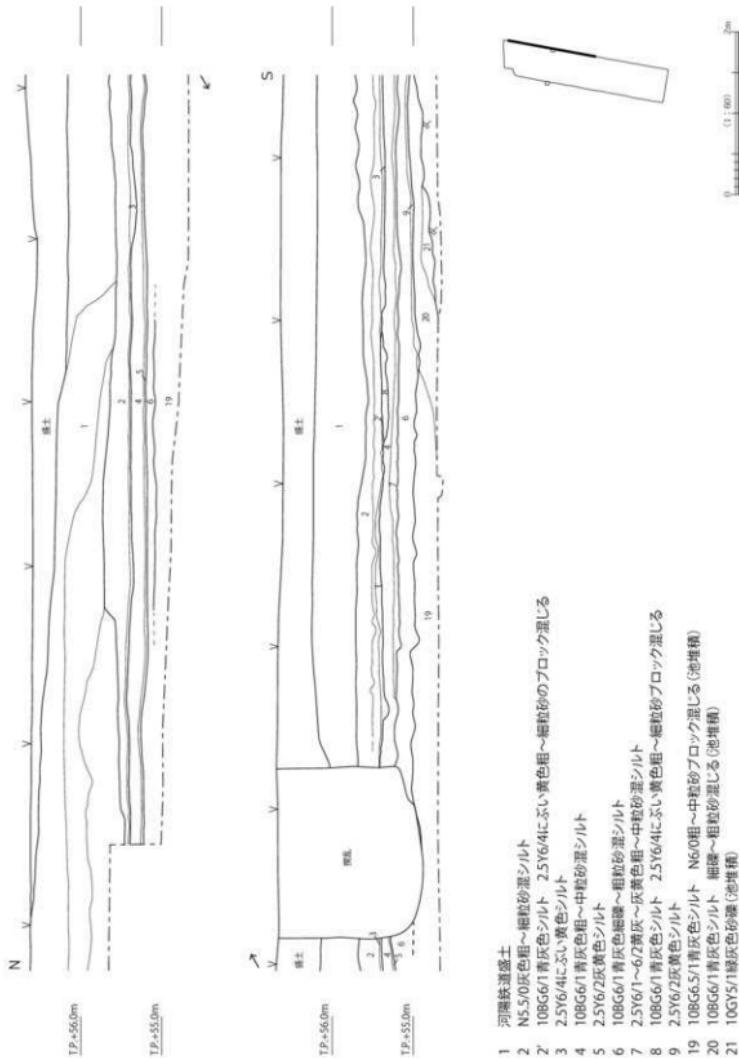


図8 第1調査区東壁断面図北半

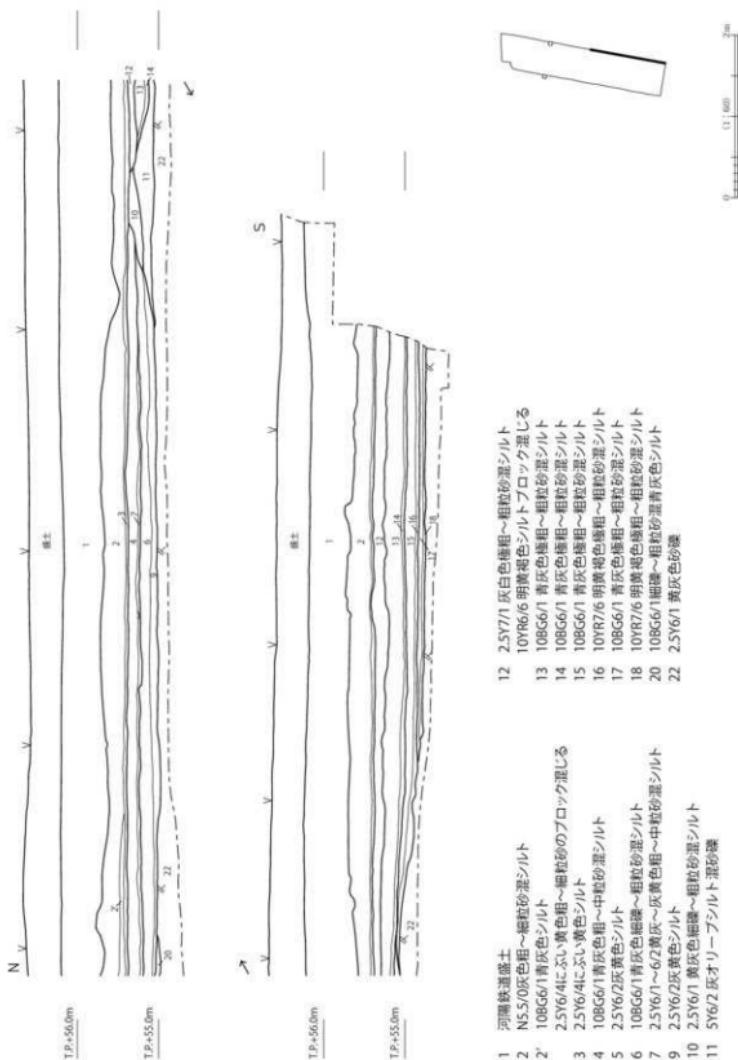


図9 第1調査区東壁断面図南半

第2節 第1調査区

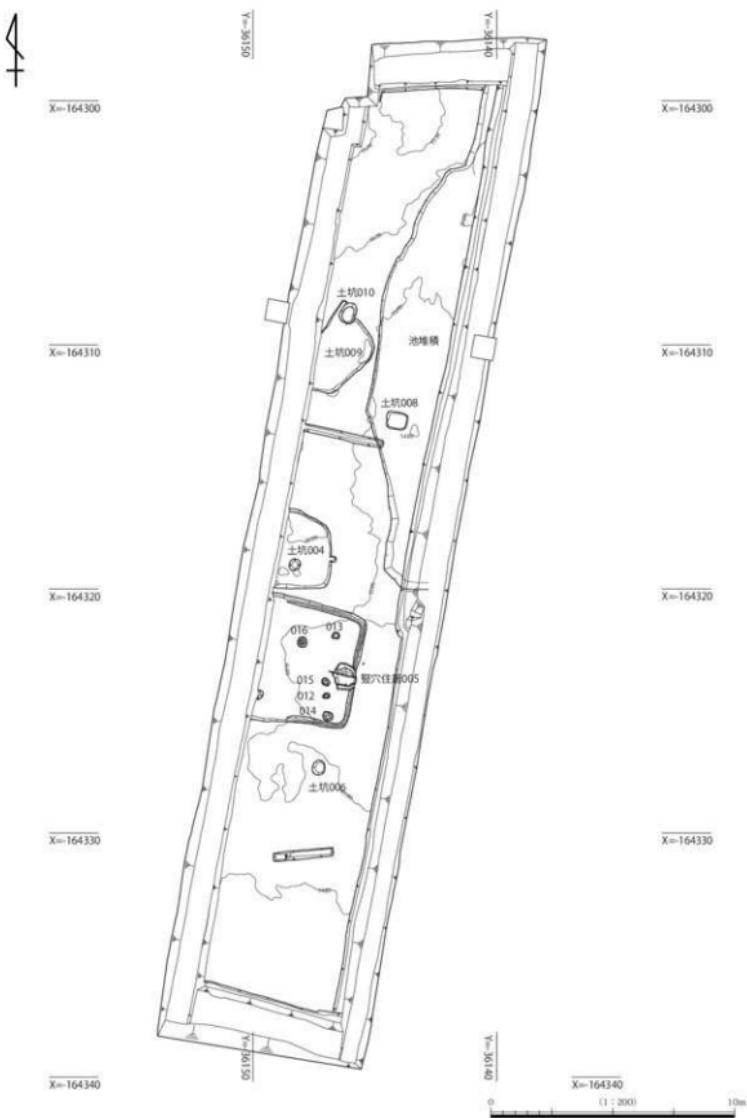


図10 第1調査区平面図

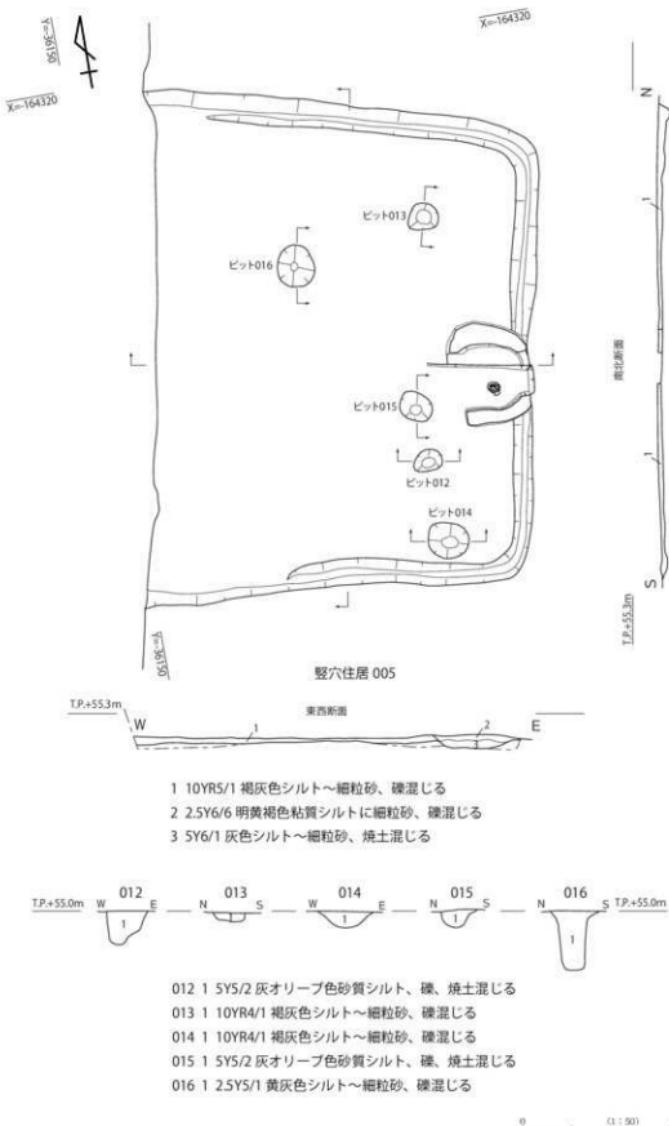


図 11 竪穴住居 005 平・断面図

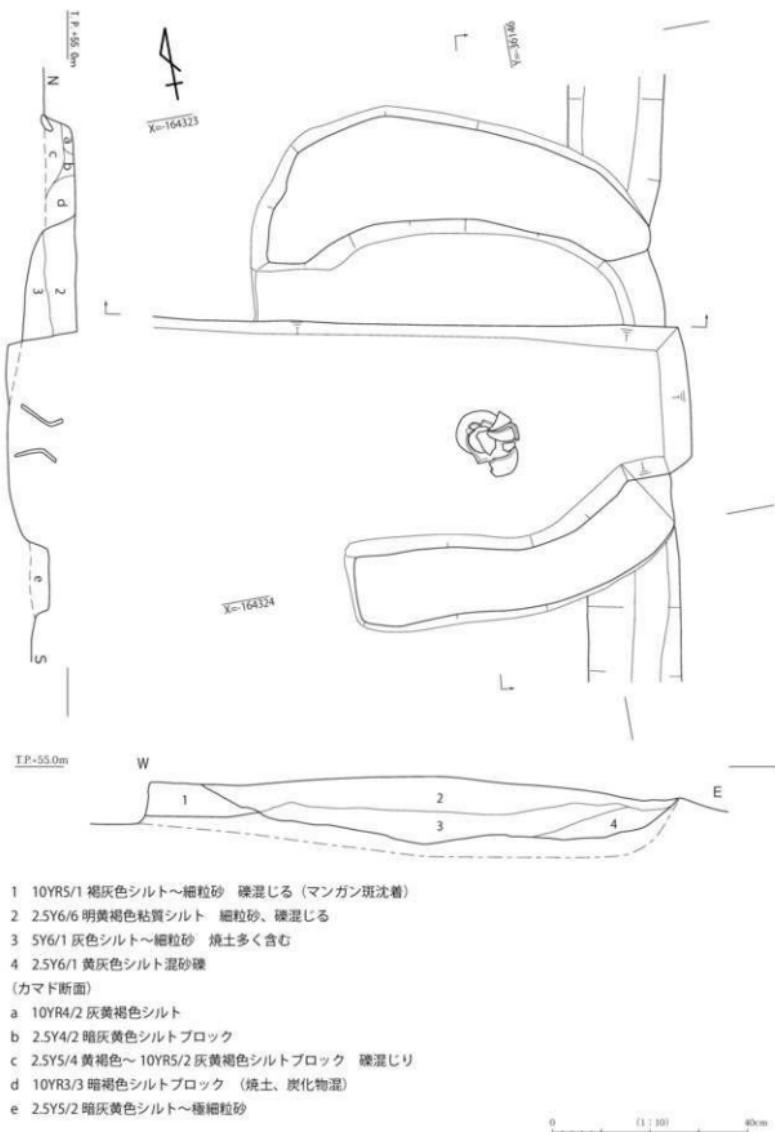


図1.2 竪穴住居005カマド出土状況図

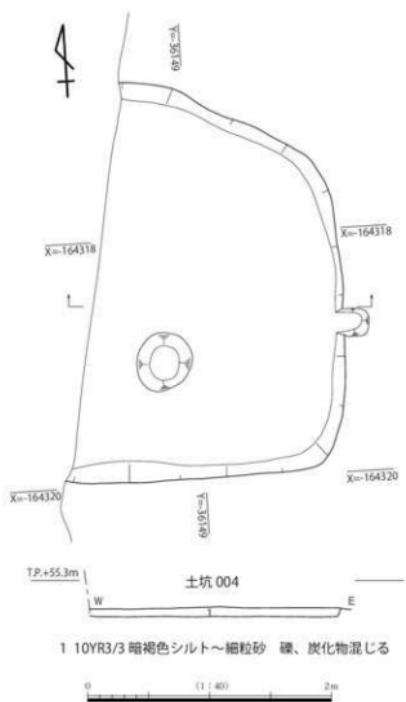


図13 土坑004・断面図

土坑006（図14）

土坑006は、直径50cm程度の円形の土坑である。そのほかの遺構同様削平をうけているため深さは10cm程度であった。遺物は出土していない。

土坑008（図14）

土坑008は、調査区の中央、旧栗ヶ池の堆積層の下において確認された。長辺80cm、短辺60cmの隅丸方形を呈している。削平を受けているため深さは5cm程度であるが、北西壁面に被熱痕があり埋土は礫、炭化物を多く含んでいた。遺物は須恵器、土師器の小片が出土しており、竪穴住居等と同時期の可能性がある。

土坑009・010（図14）

土坑009は、調査区中央から北西にあり、長軸3m、短軸2mの楕円から隅丸方形の形を呈する。削平のため深さは5~10cm程度と浅い。土坑010はこの土坑009の北西隅を掘り込んでおり、長軸80cm、短軸60cmの楕円形である。深さは10cmで部分的に焼土を含んでいる。これら遺構からは土師器、須恵器が出土しているが、いずれも小片で明確な時期比定は難しいが、おおむね竪穴住居と同様な時期と考えられる。

内中央からは土師器直口壺（図12）が逆さまにされた状態で出土した。壺の大きさや、底面まで残っている出土状況から支脚ではなく、廃棄の状態であると考えられる。なおカマドの煙道は確認できなかった。そのほか住居内の埋土からはおおむね古墳時代後期と考えられる土師器、須恵器（TK43型式）が出土している（図15）。竪穴住居内には数基のピットを検出しており、柱穴としては想定し難いものの、古墳時代と考えられる土器の小片が出土している。

カマド内側の壁面に付着していた炭化物について放射性炭素年代測定をおこなった結果、曆年較正年代で535-608calAD(92.3%)及び536-610calAD(92.9%)の値が得られ、おおむね土器の年代観と一致することが言える。測定詳細については4章において詳しく述べる。

土坑004（図13）

竪穴住居005のすぐ北側に隣接し、全体の形は不明であるが、東側の一辺が2.3mであり隅丸方形から台形のような形を呈する。削平を受けているため、深さは10cmにも満たない。遺構からは、土師器の把手付き鉢、椀、粗製高壺、須恵器の环蓋、环身が出土している。竪穴住居と概ね同時期と考えられるが、須恵器から若干新しい様相となる可能性がある。

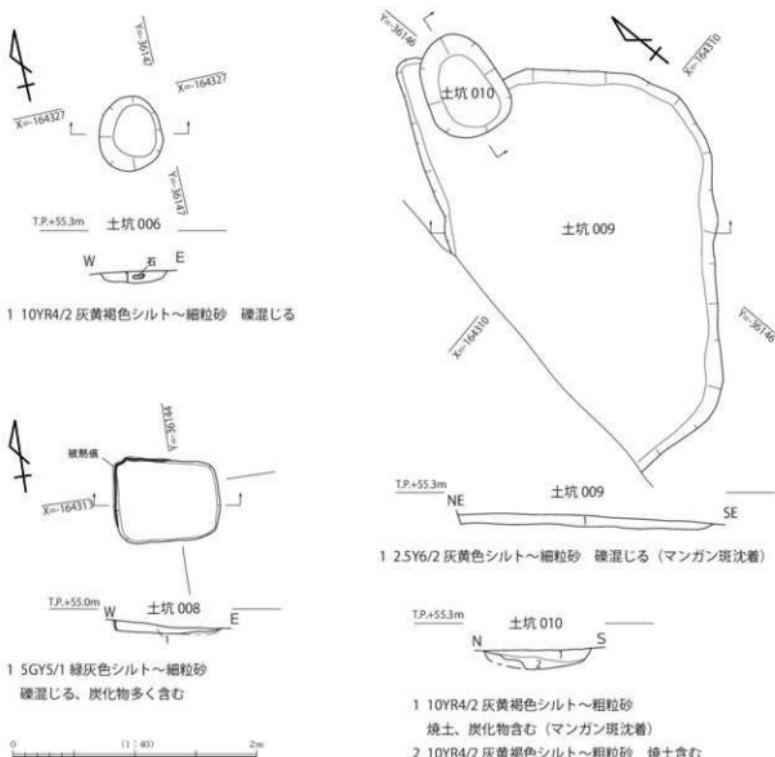


図1-4 土坑006、008～010平・断面図

その他遺構

その他に東壁断面において基盤層直上に駐畔を確認した。この駐畔は地形の変換点に近い箇所に確認され、おおむね調査区北東部分の旧栗ヶ池の堆積層の肩に沿うようにあったことが想定される。高さは20cm程度で、この旧栗ヶ池堆積層の周囲には大規模な堤体は確認できなかった。

出土遺物

豊穴住居005出土遺物 (図15)

1は土師器直口壺である。口縁部はわずかに外反し、体部は丸みを帯びた器形である。外面は磨滅している部分もあるが、横方向に磨かれている。口縁部と体部長は概ね1:1の比率となっている。2～8は土師器甕である。2の口縁部は外反し、端部でわずかに立ちあがる。内面にはわずかに刷毛目が残る。3も2と同様な器形を持つ。口縁部には縦方向のミガキが見られる。4は口縁部で、わずかに外反する。5は口縁部が欠損しているが同様な器形であると考えられる。6は小型の器形であり、口縁が外側にまっすぐ開く器形となる。口縁部はナデ調整、体部には縦方向の刷毛目を残す。7は口縁部を欠

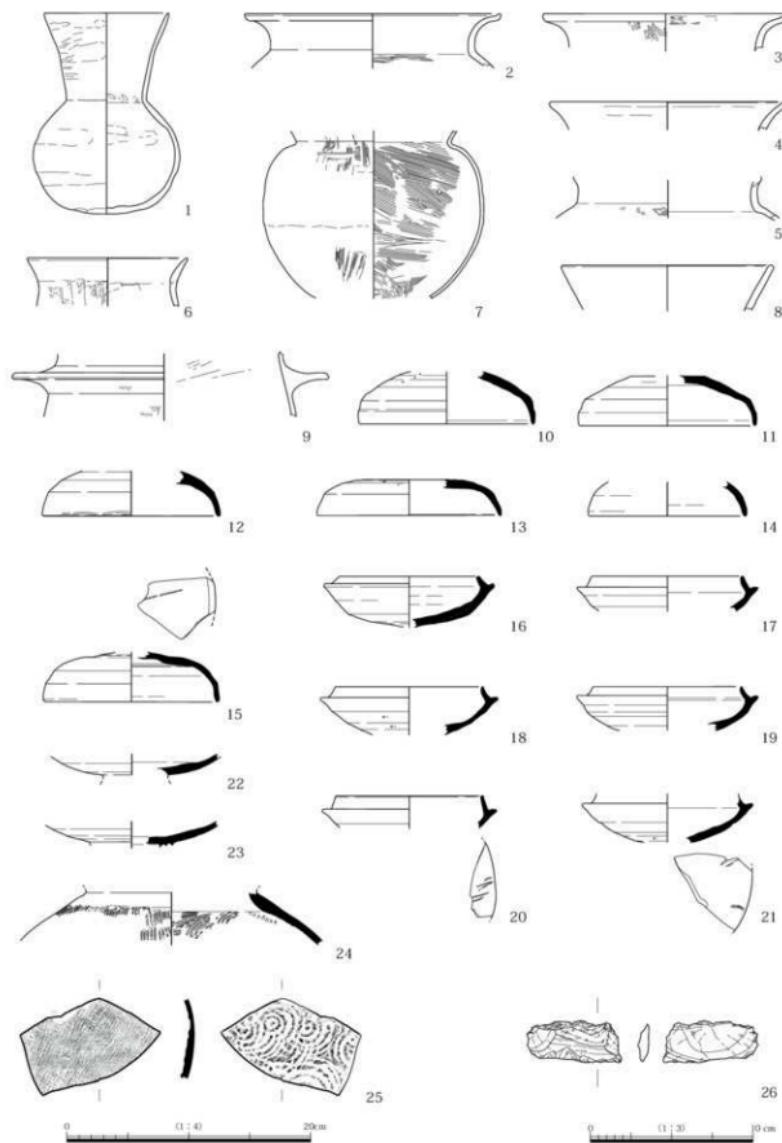


図15 竪穴住居005出土遺物

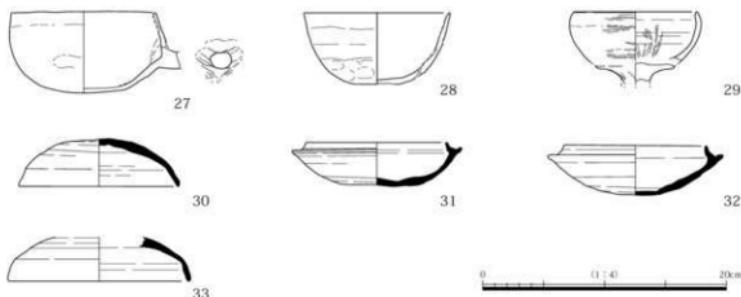


図16 第1調査区遺構出土遺物

27~32(土坑004)、33(土坑010)

損しているが、頸部で強く屈曲し、体部が丸みを帯びる器形となっている。内外目ともに刷毛目を残す。8は口縁部で、外側にまっすぐ開く器形となっている。9は土師器羽釜である。鉢部分のみが残存しているが、口縁が外側に開き、体部が膨らむ器形となると考えられる。10~15は須恵器环蓋である。天井部と口縁部に明瞭な境はなく、天井部は回転ヘラケズリ口縁部は回転ナデ調整である。10、11、15は天井部と口縁部の境がわずかに屈曲する。15は天井部に直線状のヘラ記号を施す。12~14はドーム状を呈する。16~21は須恵器环身である。すべて立ち上がりは短く、やや内傾する器形となる。底部付近は回転ヘラケズリで、体部は回転ナデ調整となる。20、21は口縁受け部の下に刻み目状のヘラ記号を施す。22・23はとともに須恵器の低脚高环の体部である。24・25は須恵器甕である。24は頸部から体部にかけての破片である。頸部付近はナデ調整であるが、体部外面は叩き調整、内面には同心円文叩きを残す。25は体部片である。外面は叩き調整後、横方向のカキ目を施す。内面には同心円文叩きを残す。須恵器はTK43型式に比定され、土師器についても直口壺や甕の形態からこれに併行するものであり、6世紀後半の所産と考えられる。

26はサヌカイト製の横長の片である。一部縁辺部に剥離をおこなっている。表面は摩滅している。竪穴住居内精査中に出土した。

土坑004出土遺物(図16)

27は土師器把手付き鉢。内傾し、丸みを帯びた器形となる。表面は摩滅が著しく調整は不明である。幅2cm程度の把手を持つが、先端は欠損している。28は土師器鉢である。粗製で、外面にはナデ調整、ユビおさえ痕が残る。わずかに外側に開く器形を呈する。29は土師器高环である。内湾する器形を呈し、内外面ミガキ調整である。30は須恵器环蓋である。天井部から口縁部にかけてなだらかな器形を呈し、両者の境は明瞭ではなく、端部は丸くすぼまる。天井部は回転ヘラケズリ、口縁部は回転ナデ調整となる。31、32は須恵器环身である。31は口縁部の立ち上がりは短く内傾し、底部は平底に近い。胴部は回転ナデ、底部は回転ヘラケズリである。32も概ね同様であるが、底部はやや丸みを帯びている。須恵器からTK43型式に比定され、6世紀後半と考えられるが、やや新しい様相となるか。

土坑010出土遺物(図16)

33は須恵器环蓋である。天井部から口縁部にかけてわずかに屈曲するが、両者の境は明瞭ではない。天井部は回転ヘラケズリ、それ以外は回転ナデ調整となる。TK43型式、6世紀後半に属する。

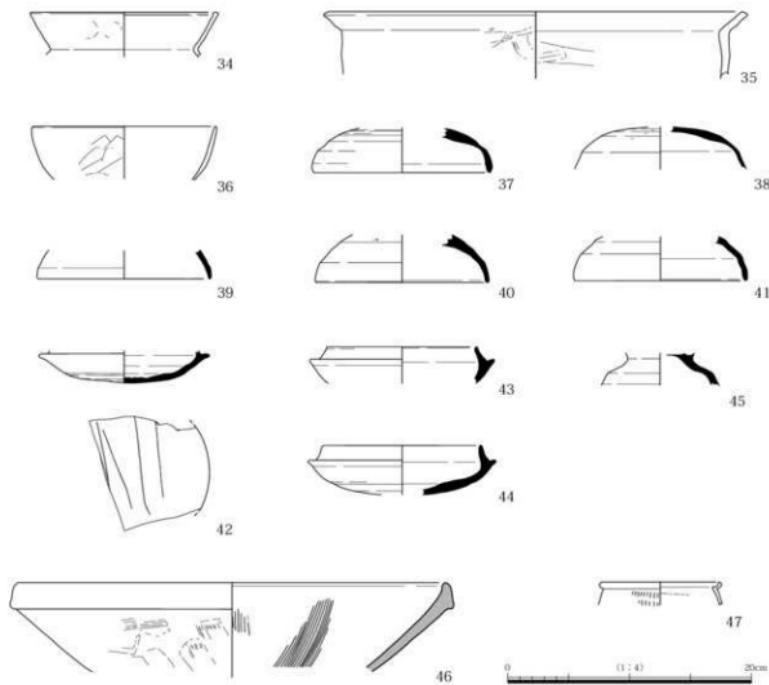


図17 第1調査区包含層出土遺物

包含層出土遺物（図17）

34は土師器甕である。口縁は外側に開く器形となっており、端部を面取により内面がわずかに段状になっている。外面にはユビおさえ痕を残す。古墳時代前期のものである。35は土師器甕である。大きく外側に開く口縁となっており、端部は面取りしている。内外面ナデ調整である。36は土師器鉢である。底部にかけて丸みを帯び、わずかに外に開く器形となっている。外面は板ナデ。37～41は須恵器壺蓋である。天井部と口縁部に明瞭な境はない。端部は丸くそぼまる。天井部は回転ヘラケズリ、口縁部は回転ナデ調整である。37は天井部と口縁部でわずかに屈曲する器形となる。38、40、41はドーム状の器形を呈する。39は口縁部付近のみの破片である。42～44は須恵器壺身である。42は口縁を欠損している。底部外面に直線が並ぶヘラ記号を施す。43、44は口縁部の立ち上がりが内傾し口縁端部は丸くそぼまる。45は須恵器低脚高壺の脚部である。須恵器については、おおむねTK43型式に比定されるものであり、各遺構と同様6世紀後半と考えられる。

46は瓦質摺鉢である。口縁部が三角形状に肥厚した器形となる。外面調整はケズリで、内面には縱方向の櫛目が施される。14世紀～15世紀初頭。47は陶器急須片である。口縁部には受け部を持て、胴部には縱方向の刻み列が巡る。近代以降河陽鉄道築造以前のものと考えられる。

第3節 第2調査区

基本層序(図18~20)

第2調査区の現地表はT.P.+56.6mとなる。基本層序は、現代盛土及び旧河陽鉄道盛土(層厚80cm)の下に、近代～河陽鉄道以前の耕作土層である2層(層厚30cm)、近世耕作土層である第12・13層(層厚30cm)、中世の耕作土層である15・16層(層厚20cm)、17・18層(層厚10cm)となり、ここまではおむね第1調査区と共通する。さらに第2調査区北半では、基盤層が深くなる地形となっており、最深部に古墳時代以降の遺物を包含する砂礫じり青灰色シルトからなる23層と砂礫混じり黒褐色シルトからなる24層がある。遺構面となる基盤層は、にぶい黄褐色極細砂からシルトが混ざる砂礫層からなり、調査区の南側に向かって30cmほど高くなっていく。この基盤層の地形の上がりにともなって、調査区北端から10m付近で23、24層はなくなり、15・16層、17・18層も層厚が薄くなっていく。

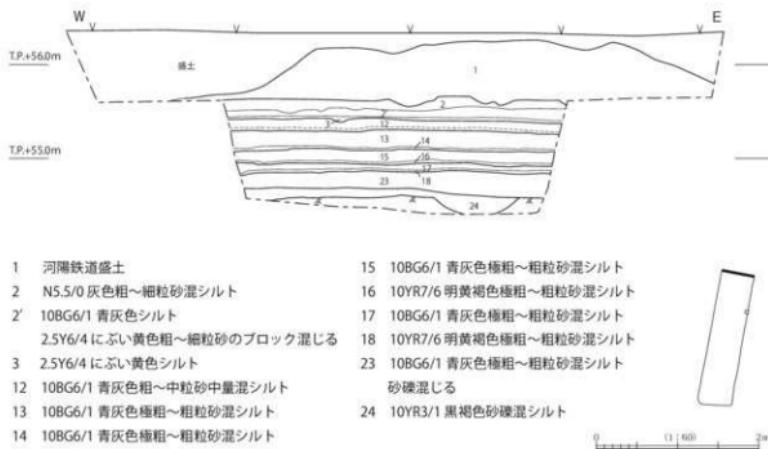


図18 第2調査区北壁断面図

検出された遺構

溝017(図22)

溝017は、幅70cm～1mの東西方向に走る溝で、深さは40cm程度になる。縄文時代～中世の遺物が出土しており、23層の下より検出されており、中世以前には機能していたものと考えられる。粗砂～礫の混じる暗灰色シルトが堆積しているが、水成堆積層は確認できなかった。

溝018(図22)

溝018は、幅30cmから1mの東西方向に走る溝で深さは20cm程度になる。東に向かってすぼまつていく形状となる。なお018からは遺物は出土しなかった。灰黄色シルトが堆積しているが、溝017同様、水成堆積層は確認できなかった。

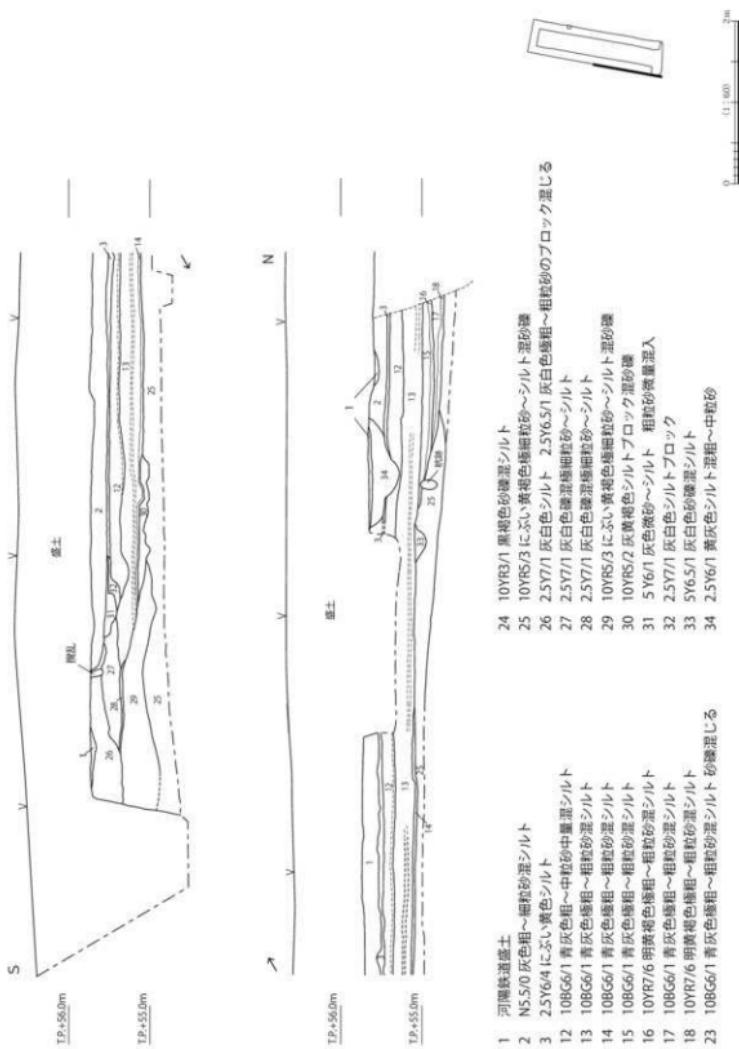


図19 第2調査区西壁断面図南半

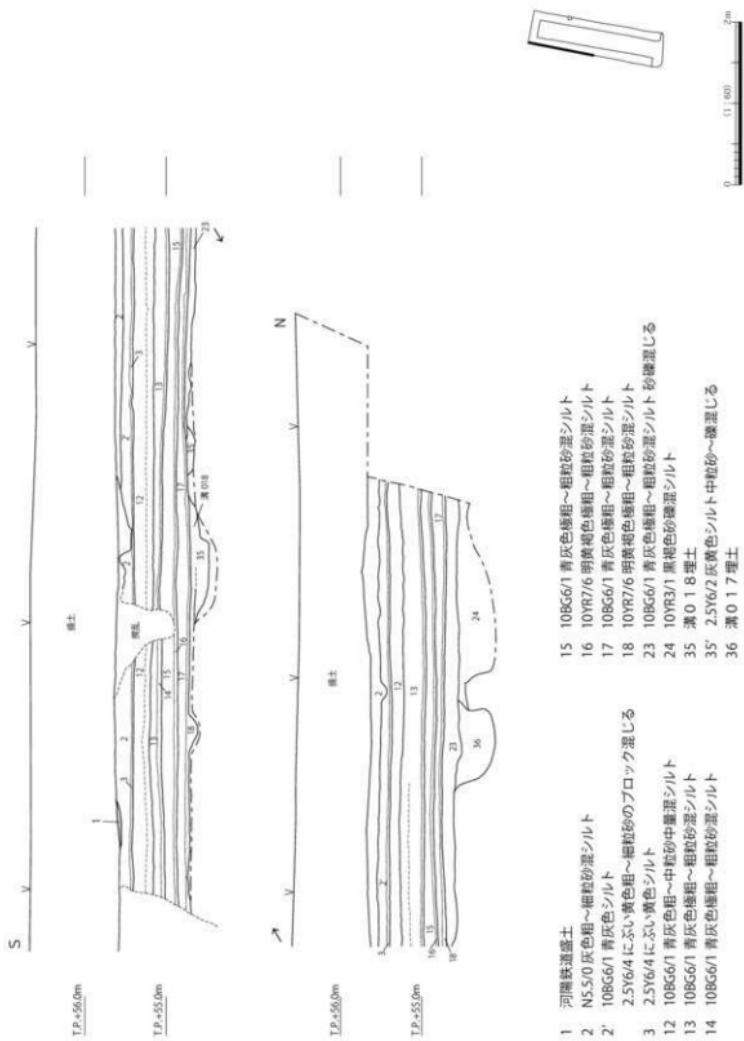


図20 第2調査区西壁断面図北半

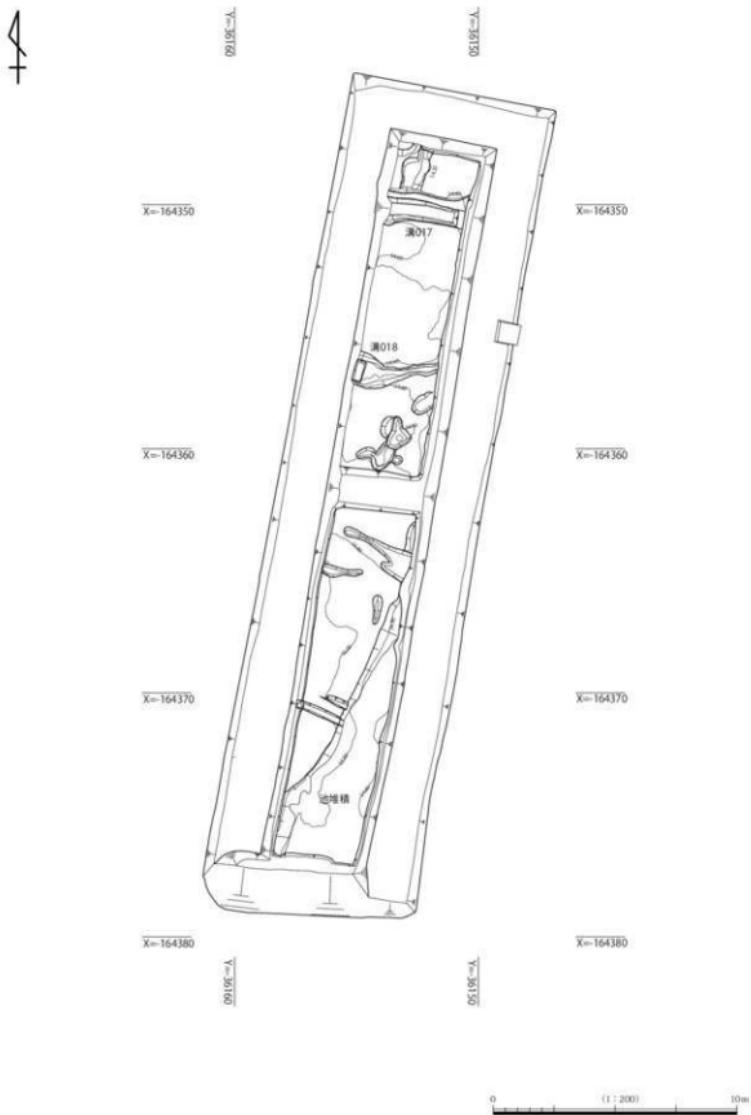


図21 第2調査区平面図

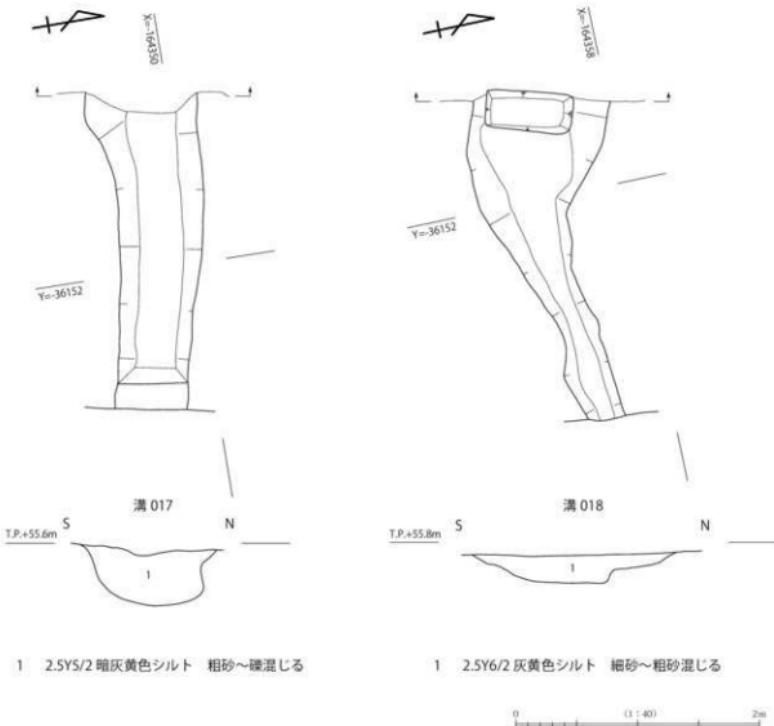


図2.2 第2調査区溝017・018平・断面図

その他遺構

調査区の南東側では、腐植片の混じる青灰色粘土～シルトの堆積を確認しており、これらはその様相から旧栗ヶ池の埋土と考えられる（図21）。この堆積層からは近世以降の瓦や染付も出土しており、中世から近世にかけて形成されたものと想定される。

また調査区の壁断面から、この旧栗ヶ池の堆積層の肩部に沿う形で畔状遺構があったことが確認された（図19）。壁断面及びその方向からの推測に過ぎないが、その高さは60cm前後、幅は基底部で1m程度であることが想定される。西壁断面から12層及び13層の耕作土層に対応して2回程度のかさ上げが考えられ、第1調査区よりもやや大きい規模のものであるが、層相もブロック土などが顕著なものではない。第1調査区同様、地形の変換点に沿って造られたものと推測され、栗ヶ池東岸で検出された堤とは規模の異なり、水田の畦畔程度の大きさと考えられる。第2調査区においても、栗ヶ池東岸において確認されたような大規模な堤体は確認できなかった。

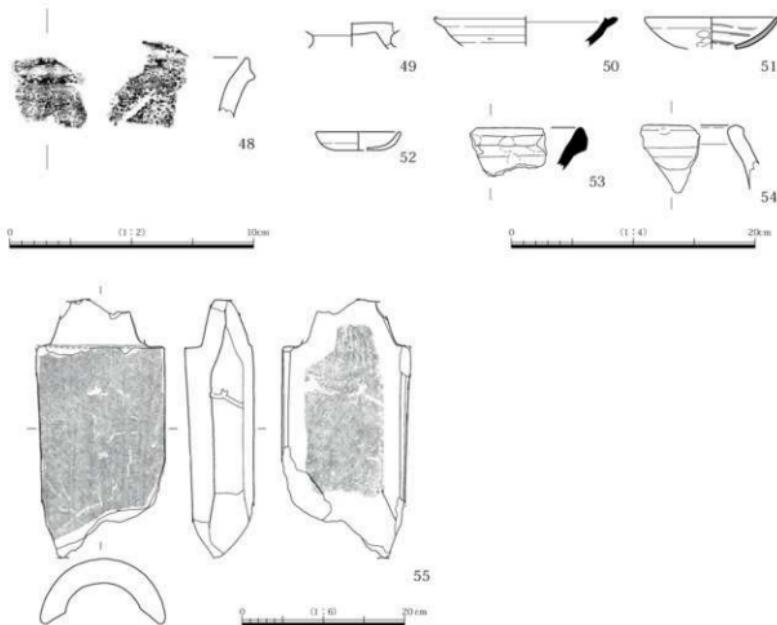


図23 第2調査区出土遺物

48・49(溝017)、それ以外は包含層

出土遺物**溝017出土遺物(図23)**

48は凸帯のつく浅鉢である。口縁部はわずかに外反し、端部はすぼまる。口縁端部より一段下がったところに一条の刻み無し凸帯がめぐる。縄文時代晩期後葉である。49は土師質土器の底部の高台である。摩滅が著しく時期比定は困難であるが、中世以降のものと考えるのが妥当であろうか。

包含層出土遺物(図23)

50は須恵器環底である。口縁立ち上がり部分は欠損している。胸部上半まで回転ヘラケズリが施される。第1調査区出土遺物と同様、6世紀代に取まるものと考えられる。51は瓦器碗である。口縁を横ナデし、底部付近にユビおさえ痕がのこる。内面は疎らにヘラミガキが施される。52は土師器皿である。口縁部が体部からわずかに湾曲し立ち上がる器形となる。14世紀代。53は須恵器質の捏鉢である。外側に開く器形となっており、口縁部が外側に肥厚している。54は土師質羽釜の口縁部である。口縁端部はわずかに外側に肥厚し、内湾する器形となる。14世紀代。55は本瓦葺丸瓦である。外面は叩目を残し、内面は布目及び紐痕を残す。古代のものと考えられる。

その他サヌカイト製の刺片が数点、本調査区より出土しているが、いずれも遺構に伴うものではなかった。

第4節 第3調査区

基本層序(図24～26)

第3調査区を境に基本層序の様相は変化する。本調査区の現地表はT.P.+56.4m前後であり、現代盛土及び旧河陽鉄道盛土は第1・2調査区よりも薄く、層厚は50cm程度である。その下には近代～河陽鉄道以前の耕作土層である2層(層厚10cm)とその床土層である3層(層厚10cm)、近世の耕作土である4層(層厚10cm)とその床土層の5層(層厚10cm)があり、その下が第2調査区と同様、腐植遺体の混じる青灰色シルトからなる旧栗ヶ池の堆積層及び7層～9層からなる盛土層となっている。調査区の南西部のわずかな部分を除き、そのほとんどが池の堆積であり、池の堆積が厚く掘削深度が深くなること、遺構検出の可能性が非常に低いことから、掘削はこの面に止めている。

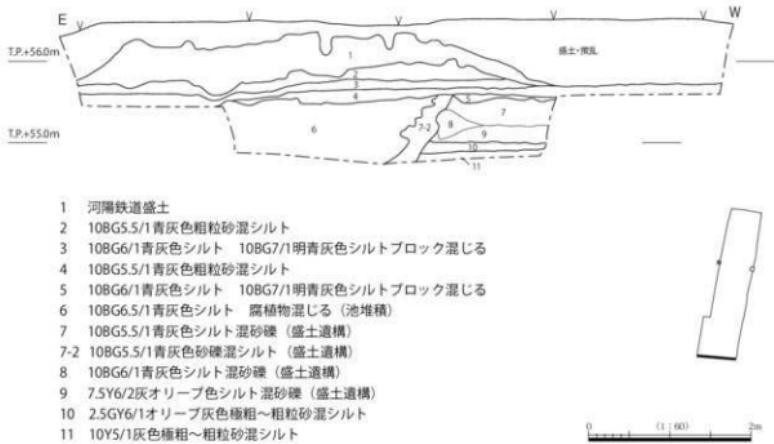


図24 第3調査区南壁断面図

検出された遺構

盛土遺構(図27)

上述したとおり、調査区の大半は旧栗ヶ池の堆積であったが、南西隅のわずかな部分に東側に砂礫層を主体とする盛土を確認した。旧栗ヶ池堆積層と盛土の境には杭列が並び、上留めをしていることが想定される。第3調査区内のわずかな部分でしか確認できずその規模については不明である。栗ヶ池東岸の調査で確認した堤に対応するものとなる可能性はあるが、断定はできない。破片のみで明確な時期比定は難しいが、堤体から近世の陶磁器片、池の堆積層から近世の染付片が出土している。

出土遺物(図28)

56は土師器甕である。口縁部は外反し、胴部は丸い器形となる。口縁部はナデ調整、頸部から胴部にかけては縦方向の刷毛目が残り、内面は板ナデとなっている。口縁端部は沈線状にわずかな段がめぐる。57は土師皿である。口縁部が直線的に立ち上がり、ナデにより底部と口縁の境が稜をもつ。14世紀代。58は染付碗である。口縁は内湾し、体部に崩れた円文をもつ。19世紀代。

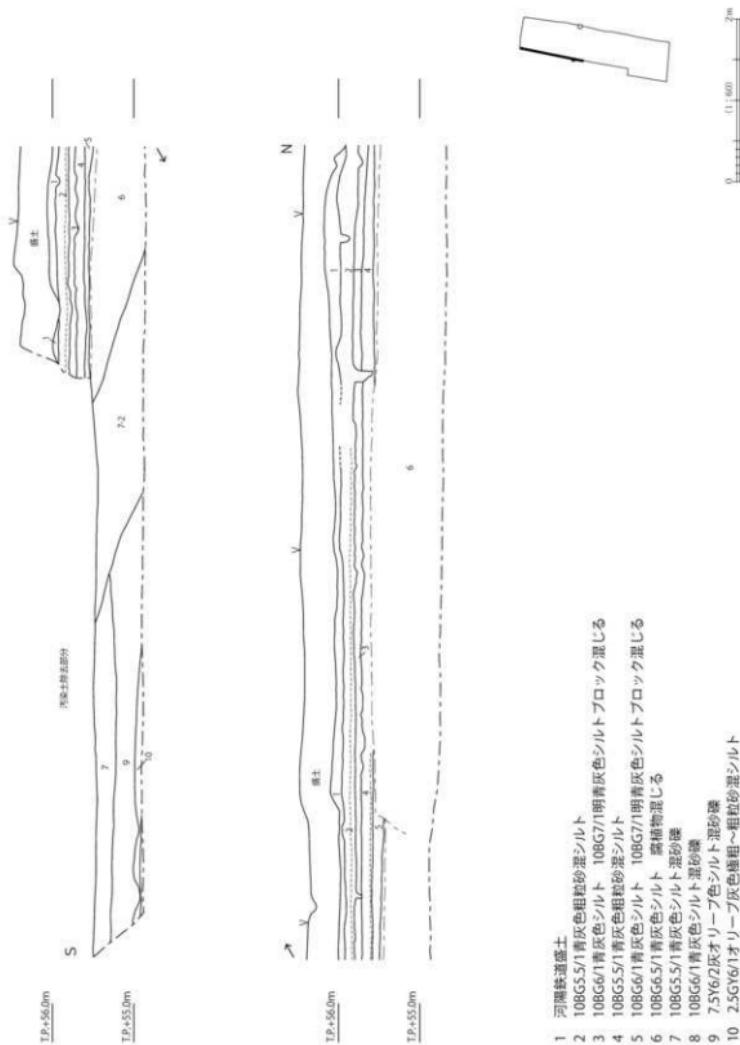


図25 第3調査区西壁断面図南半

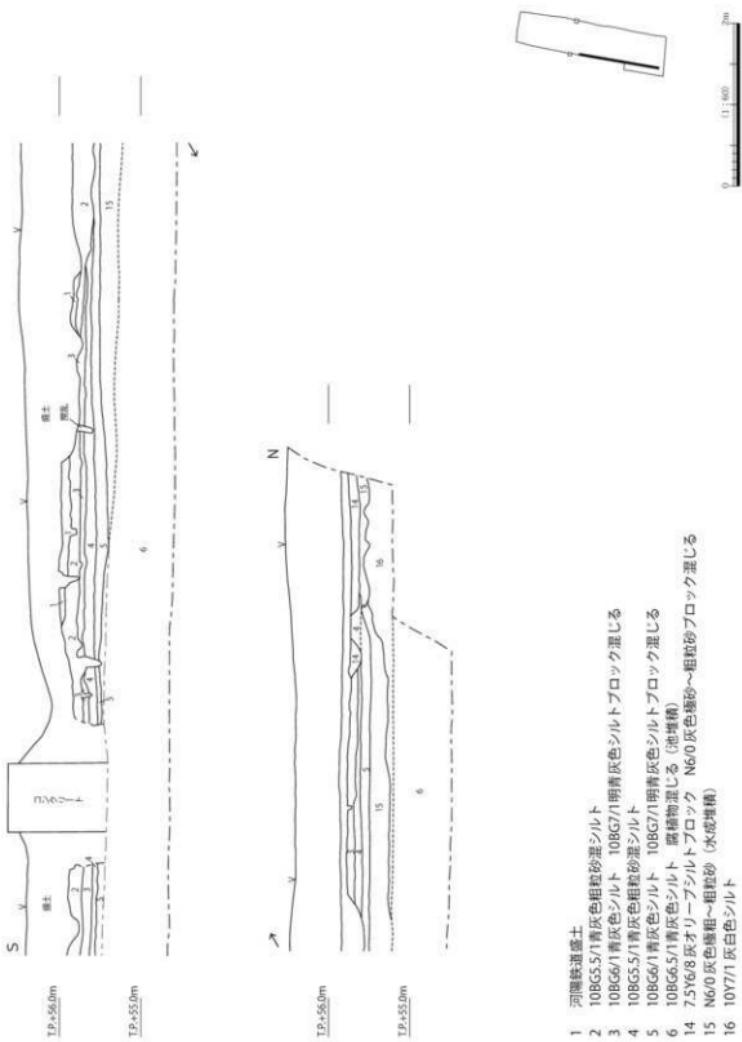


図26 第3調査区西壁断面図北半

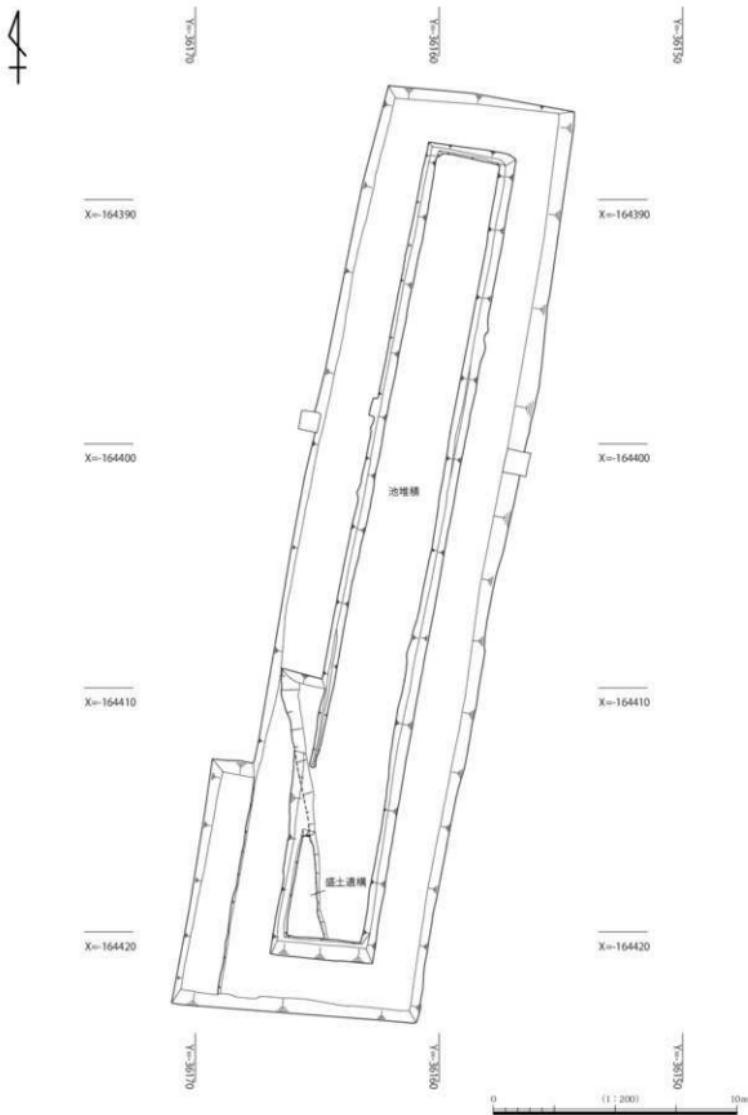


図27 第3調査区平面図

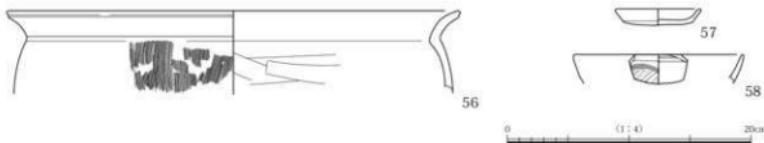


図28 第3調査区出土遺物

第5節 第4調査区

基本層序（図29、30）

第4調査区は北半において旧地形が北東に向かって落ち込んでいく地形となっており、全調査区の中でも最も深くなる箇所となっている。調査区北半の第1～5層については第3調査区西・南壁に対応するが、南側に向かって旧地形が上がっていく地形となっており、南半では基盤層は現地表から約20cm程度になる。この様相は第5調査区へと続いている。

本調査区の現地表はT.P.+56.4～56.5m前後であり、現代盛土及び旧河陽鉄道盛土（層厚80cm）、

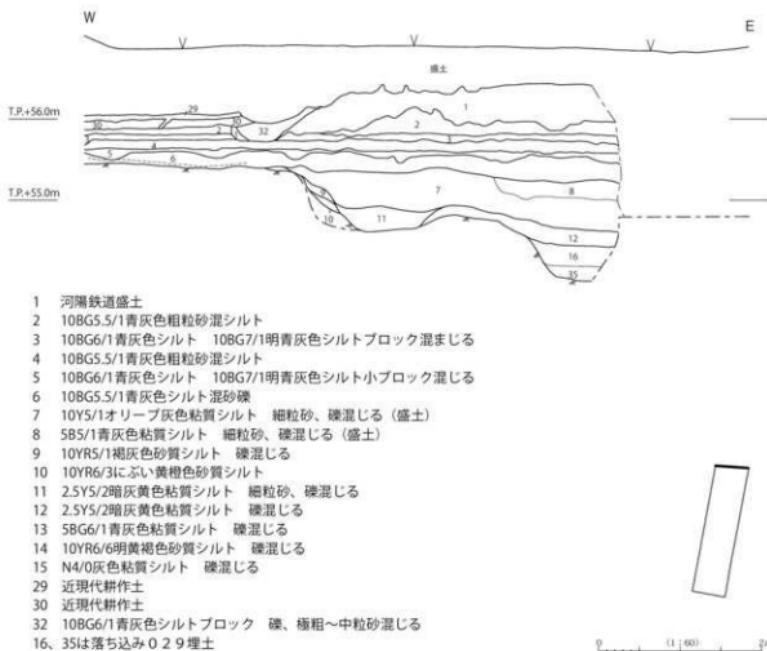


図29 第4調査区北壁断面図

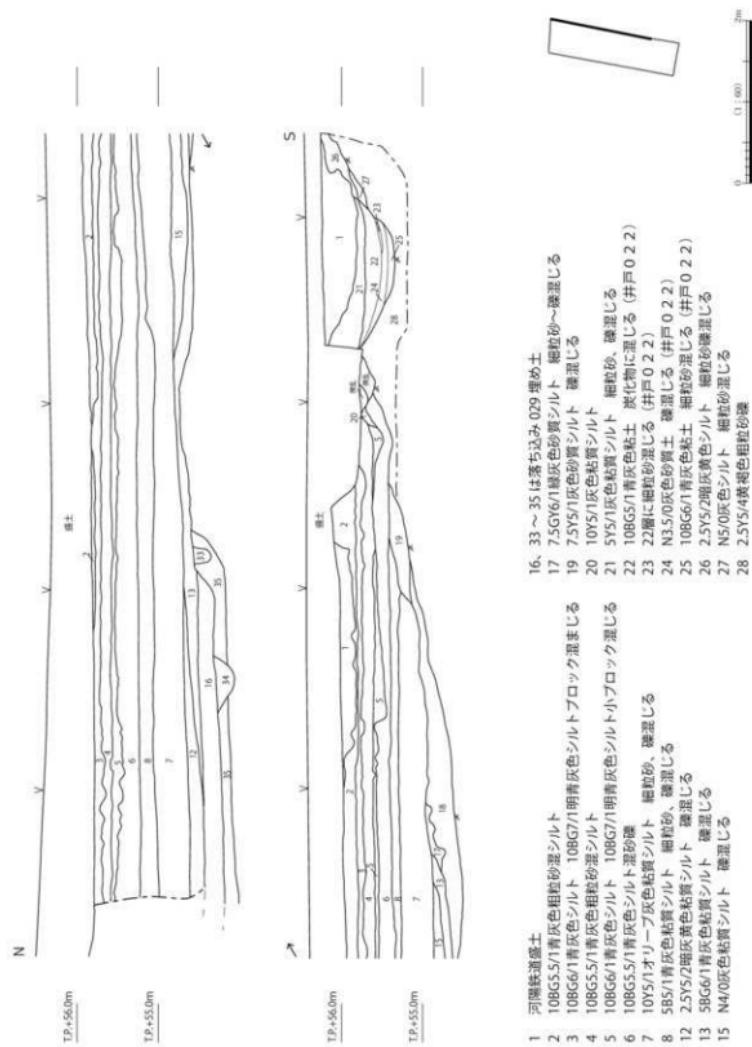


図30 第4調査区東壁断面図

第5節 第4調査区

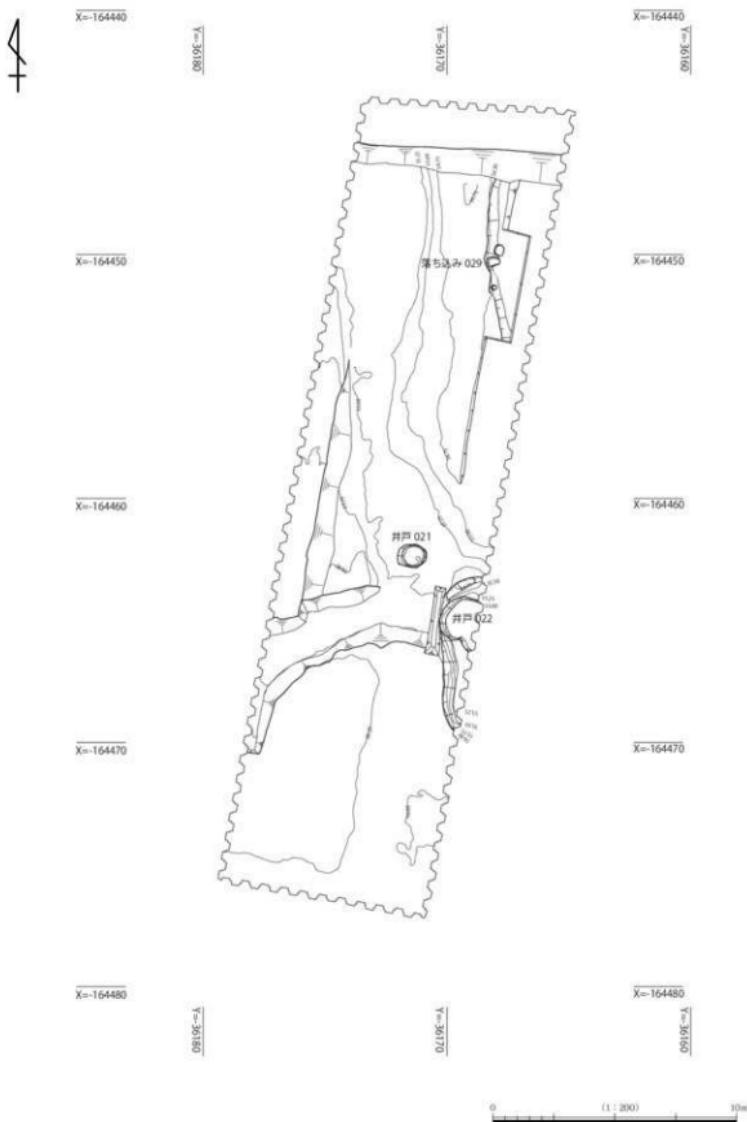


図31 第4調査区平面図

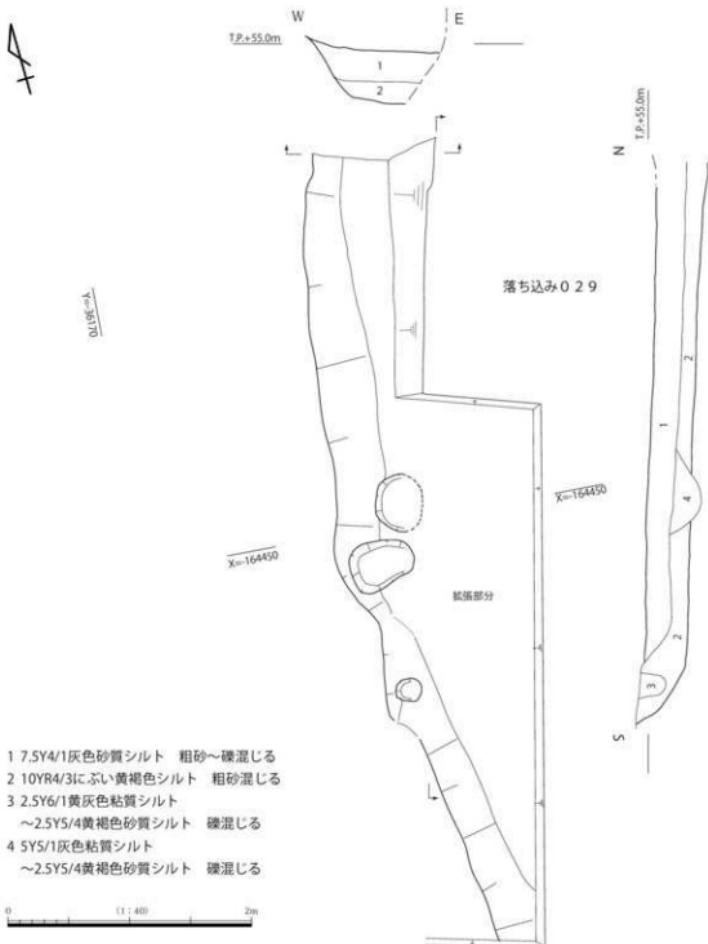


図3.2 第4調査区落ち込み0.29平・断面図

その下には近代～河陽鉄道以前の耕作土層である2層とその床上層である3層（層厚20cm）、近世の耕作土である4層とその床上層の5層（層厚20cm）があり、3区にはみられなかった青灰色シルト混砂礫層（6層）となる。その下は明黄褐色シルト混じり砂礫層からなる基盤層となる。この上面が遺構面と考えられるが、調査区の北東では地形が落ち込んでおり、3区に対応する砂礫混じり青灰色粘質シルトの7層、砂礫混じりオーリーブ灰色粘質シルトの8層が堆積している。これは第3調査区で確認した池岸の盛土層と同様のものと考えられる。さらにその下に12層～18層が落ち込みの肩部から順に堆

積するが、比較的淘汰され、漸移的に層相が変化することから自然に堆積したものと考えられる。これらの層の下で、落ち込みはもう一段下がり、この内に堆積した砂礫混じり砂混じりにぶい黄褐色シルト層から古墳時代後期の遺物が多く出土した。また地形の上がった調査区中央部分では、近世以降の素掘りの井戸2基を検出した。

検出された遺構

落ち込み029(図32)

調査区北東隅において2段にわたって崖状に落ち込んだ地形となっている(図31)。その2段目の落ち込み、すなわち調査区の最深部において古墳時代の遺物が集中して出土した。これらの遺物は、廃棄されたものと考えられる。深さは一段目の落ち込みの平坦面から30cm程度となる。

井戸021・022(図31、33)

地形の落ち込みの縁辺部において2基の井戸を検出した。井戸021は調査区中央部で検出した素掘りの井戸である。直径は90cmで、基盤層である砂礫層を掘り抜いている。壁面にはオリーブ灰色シルトが張り付くように堆積していた。2m以上の掘削をおこなっても底は確認できなかつたが、安全性を考慮したため、やむを得ず掘削を断念した。井戸022は調査区中央の東壁際ににおいて検出した素掘りの井戸である。直径は1.8mで、021同様砂礫層を掘り抜いている。青灰色粘土が堆積し、所々に炭化物片が混じっている。わずかではあるが出土した遺物から、これらの井戸は近世以降近代以前に機能していたものと考えられる。

出土遺物

落ち込み029(図34・35)

59は土師器鉢である。内湾する器形で、外面は横方向の板ナデにより調整される。60・61は土師器高環である。60は高环の环部である。内面は縱方向にミガキが施される。61は高环の脚部である。62・63は土師器羽釜である。62は口縁部欠損しているが、頸部の形よりくの字状に屈折する口縁をもつていると考えられる。63は羽釜の鍔部分である。内外面に成形時のユビおさえ痕が顕著に残る。64・65は須恵器环蓋である。天井部から口縁部にかけての境は明瞭ではなく、丸みを帯びた形状となる。66～72は須恵器环身である。すべて立ち上がりは短く内傾し、端部は丸くすぼまる。体部上部は回転ナデ、下部は回転ヘラケズリが施される。70は底部外面に直線状のヘラ記号をもつ。73は須恵器低脚高环である。环部は、その他一緒に出土した环身と同様な器形である。脚部には2方向に穿孔がある。74・75は須恵器甕である。74は中型の甕であり、口縁部は欠損している。外面は叩き、内面は同心円叩きを残す。75はやや大型の甕で、口縁部が肥厚しわざかに外側に開く器形となる。外面は叩き後、横方向のカキ目を施す。内面は、同心円叩きを施す。76は移動式カマドである。円錐形を呈し、底部

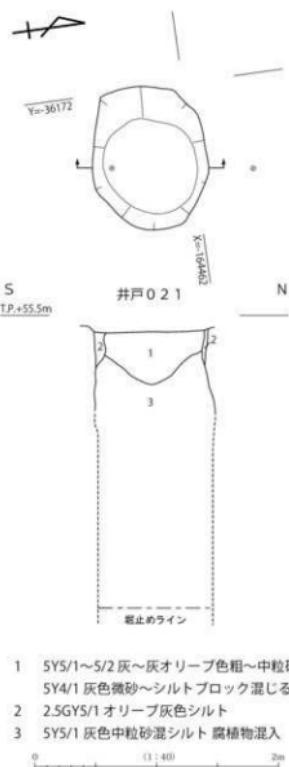


図33 第4調査区井戸021平・断面図

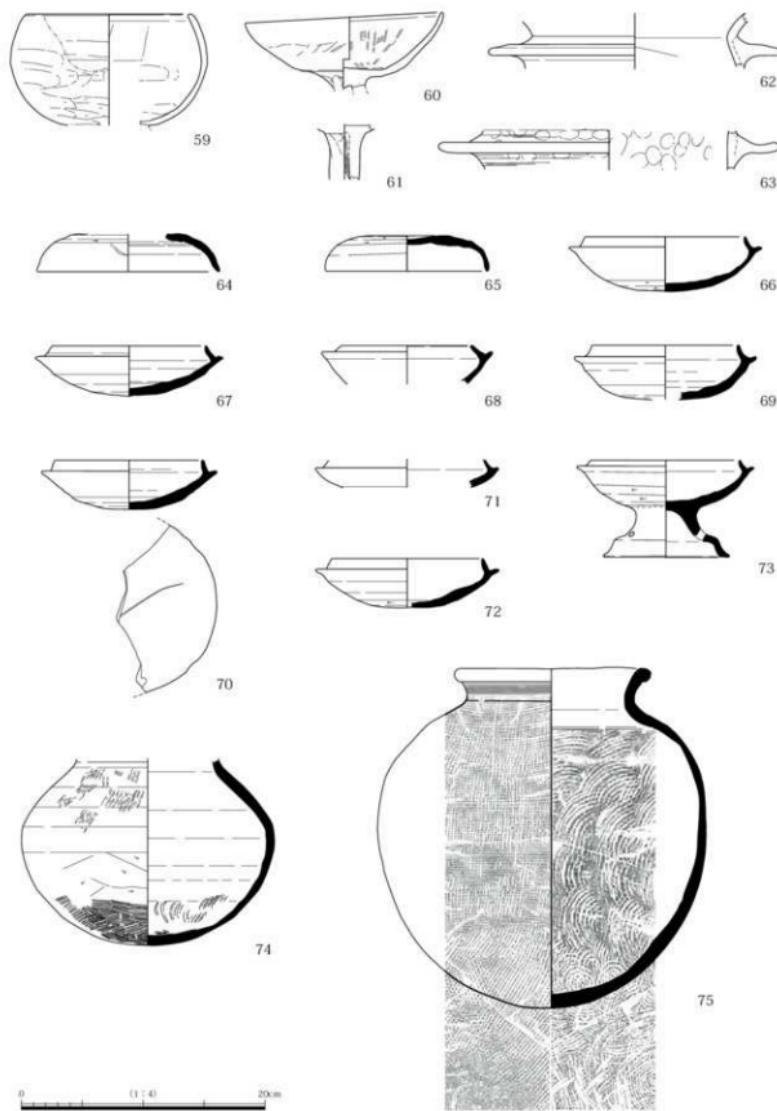
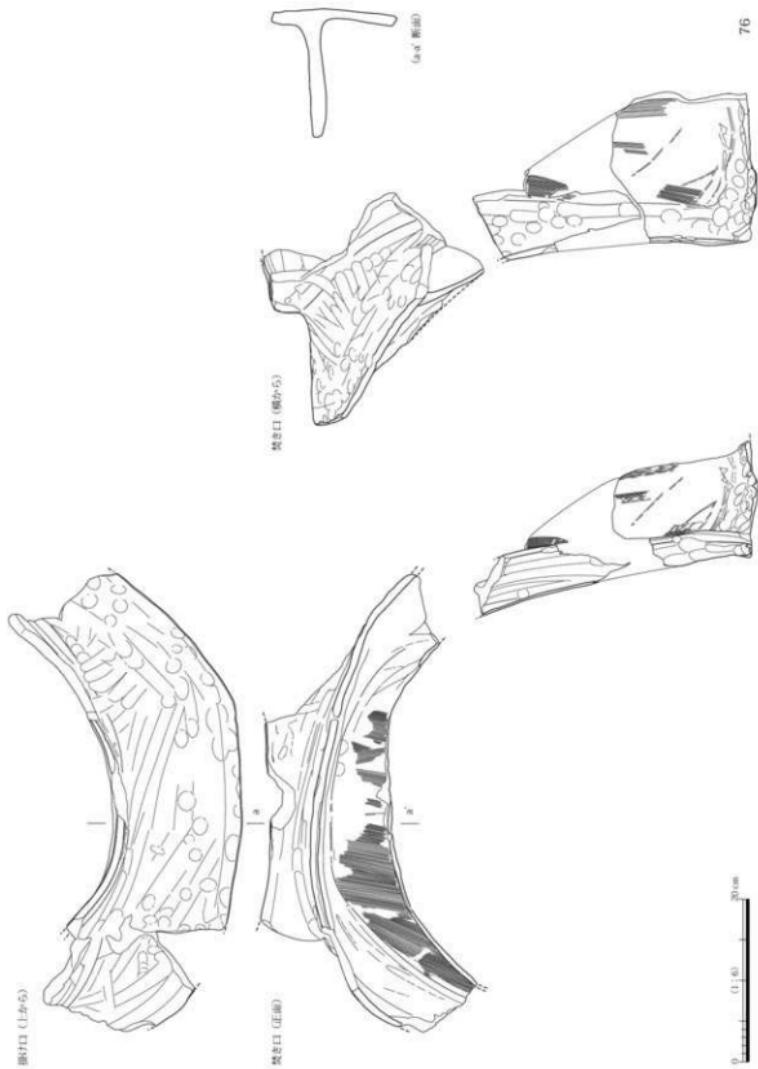


図3-4 第4調査区落ち込み0-2-9出土遺物

図35 第4調査区落ち込み0.29出土遺物



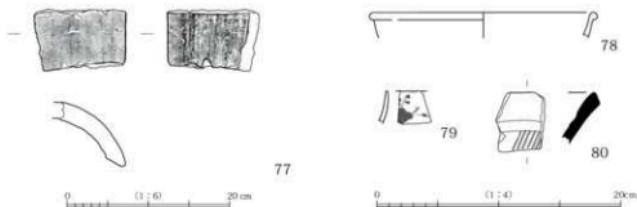


図36 第4調査区井戸022・包含層出土遺物

77～79（井戸022）、80（包含層）

には外側に突出する脚部を有する。付け底であり、焚き口周辺には縦方向のハケ目を残す。底および脚部周辺にはユビおさえ痕が良く残り、調整は不十分である。出土した須恵器はTK43型式に比定され、土師器等もこれに伴うものであることから6世紀後半と考えられ、第1調査区遺構出土遺物とおおむね同時期となる。

井戸022（図36）

77は丸瓦である。表面は灰色を呈し、やや光沢をもつ焼し瓦である。凸面は縦方向のナデ調整である。凹面にはコビキBの痕跡を残す。78は陶器椀である。表面は褐色で、施釉である。わずかに湾曲する玉縁状の口縁をもつ。79は染付椀である。わずかに内湾する器形をもち、体部に草花文をもつ。18世紀代。

包含層出土遺物（図36）

80は須恵器質の摺鉢である。口縁端部を面取りし、内面は端部から下がったところに一条凹線が巡り、縦方向に櫛目が施される。

第6節 第5調査区

基本層序

第5調査区の現地表の高さはT.P.+56.5 m前後であり、20cm程の層厚の現代盛土の下に基盤となる砂礫層を確認した。先述したとおり旧地形が最も高くなっている箇所であり、旧鉄道の盛土は確認でなかつたが、第1調査区～第4調査区で確認された旧鉄道盛土の平坦面とおおむね同じ標高であることから、鉄道敷設の際に旧地形を部分的に平坦化していると考えられ、所々削平を受けている。こうしたことから当調査区は擾乱も多く、遺構の数は希薄であったが、南東部分に3基の土坑を検出した。

検出された遺構と遺物

土坑023（図38）

長軸1.3m以上、短軸0.9mの楕円形土坑である。深さは0.2m前後で褐色粗砂主体で暗褐色シルトブロック及び礫が混ざる埋土からは凹基無茎石鐘が一点出土した。

土坑024（図38）

径0.5m程度の不定形土坑である。埋土は礫混じり暗褐色細粒砂～シルトからなり、さらに焼土が混ざっていた。壁面には炭化物が付着しており、炭化物について放射性炭素年代測定をおこなったところ較正年代で3700-3632calBC(89.9%)の年代が得られた。これは縄文時代前期後葉から末葉の年代に比定できる。

第6節 第5調査区

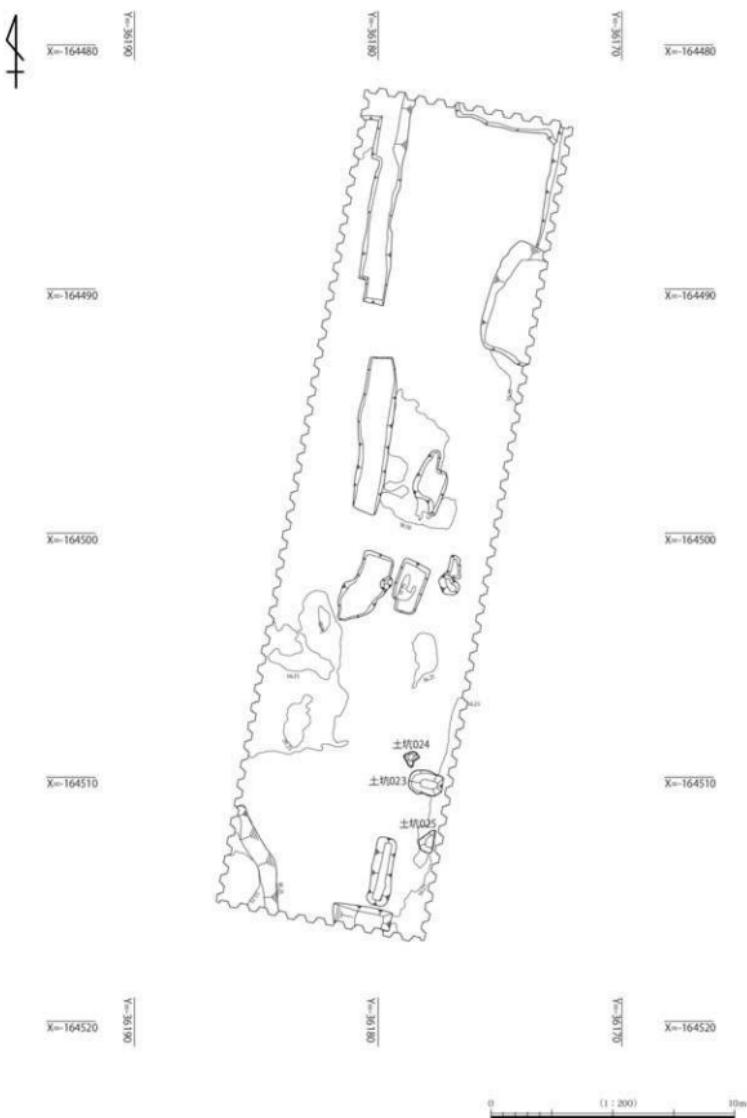
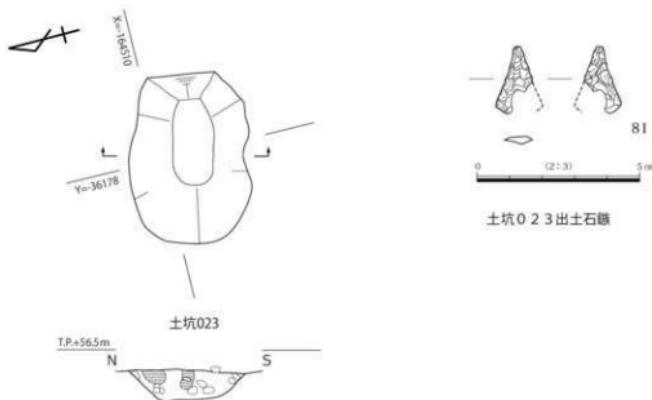
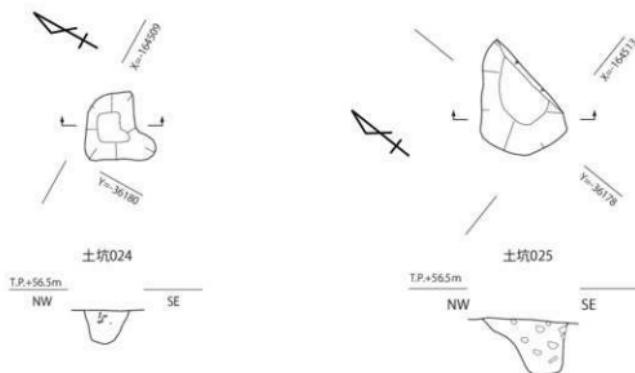


図37 第5調査区平面図



- 1 7.5YR4/6 褐色極粗粗砂～粗砂混シルト
礫、7.5R3/2 暗褐色シルトブロック混じる



- 1 7.5YR3/2 暗褐色細粒砂～シルト
礫、炭化物、焼土塊混じる

- 1 10YR4/3 にぶい黄橙色粘質シルトに細砂～礫
炭化物、焼石混じる



図38 第5調査区土坑023・024・025平・断面図及び土坑023出土遺物

土坑025(図38)

短軸0.8mほどの楕円形土坑と推測される。深さは0.4m。遺物については確認できなかったが、土坑024同様、埋土中に焼土が混ざっていた。

上述した様相から、これら土坑は縄文時代に形成したものと考えられるが、その性格詳細については不明である。

土坑023出土遺物(図38)

81はサヌカイト製の石鏃である。長さは2.0cmの凹基無茎石鏃で、片方の脚部を欠損している。縄文時代の所産である。土器が伴わないと正正確な時期はわからないが、土坑024において得られた年代値から縄文時代前期の所産である可能性がある。

第7節 第6調査区

基本層序(図39・40)

第6調査区の現地表の高さはT.P.+56.4～56.5m前後である。基本的な層序としては、現代盛土及び旧河陽鉄道盛土(層厚80cm)、鉄道盛土直前の耕作土層である第2層(層厚約10cm)があり、その下は第3層～第7層は近代・近世後期以降の耕作土及びその床土で、第3層は層厚約20cm、4層は3層の床土、第5層、第6層は層厚約15cm、第7層は6層の床土となっている。第8層は黄色粘質シルトからなり中世の耕作土であり、第9層はマンガン斑の沈着する黄色粘質シルトからなり基盤層上面に薄く堆積する。第15層は明黄褐色粘質シルト及び明黄褐色砂礫層からなり、自然流路等中世以前の遺構を検出した基盤層となる。第15層は北に向かって上がっており、調査区の南端から2.5m付近で砂礫層へと変化し、比高差1.3mほどの崖状の地形となっている。また調査区中央西側では、8層上面の遺構として北西・南東方向に走る柵列とそれに伴う畦畔を検出し、その西側には青灰色シルト～粘土からなる池底堆積と考えられる堆積層を確認した。これについても第1、第2、第3、第4調査区で確認したものと同様、旧栗ヶ池の堆積層と判断した。

検出された遺構**上層遺構(畔状遺構と池堆積)(図41・42)**

上層が近代以降の層であったため一部削削中に削平しているが、畔状遺構の上場の幅は60cm以下、高さも50cm程度と想定でき、堤というよりは畔として機能していたと考える方が妥当であろう。東側には、青灰色のシルト～粘土が堆積しており、その層相から旧栗ヶ池の堆積層であると判断した。この堆積層からは18世紀に比定される遺物を中心に出土している。また池の堆積の上層は礫が多く混ざる層となっているおり、部分的に埋め立てられていた可能性があり、この堆積のうち18世紀以降に耕作地が展開していたと考えられる。

自然流路020(図41・43)

調査区の南西から北東方向に向かう幅80cm、深さ20cm以上の自然流路である。基盤層の地形は南側が高くなり、調査区中央東側が最深となっているため、この方向に流れる流路と想定できる。流路内には褐灰色砂質シルトが堆積しており、わずかに水の流れがあったものと考えられる。流路上層は9層が覆っており、中世(14世紀)の段階には埋没していたものと考えられる。遺物については、ほとんど確認できなかったが弥生時代の石包丁1点を確認した。

瓦組遺構(図44)

旧栗ヶ池の堆積層除去後、東西方向の瓦組遺構を検出した。地形の落ち込みの境に位置し、丸瓦を組

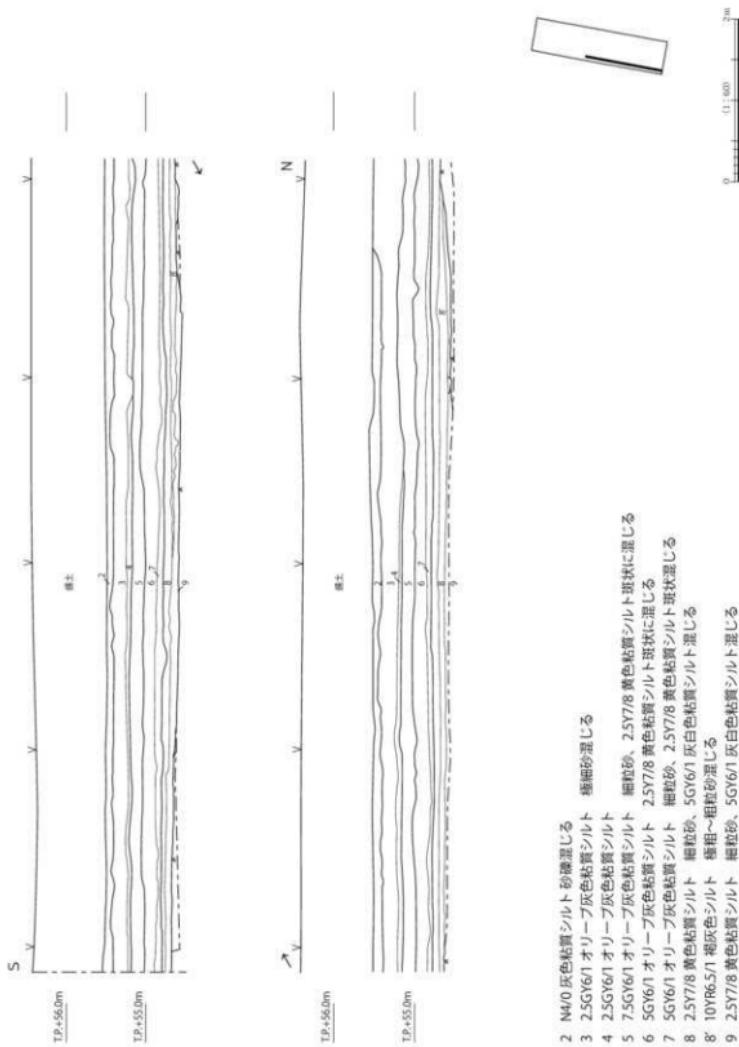


図39 第6調査区西壁断面図南半

- 2 N40°E 灰色粘質シルト砂礫混じる
- 3 2.5GY6/1 オリーブ灰色粘質シルト 極細砂混じる
- 4 2.5GY6/1 オリーブ灰色粘質シルト
- 5 2.5GY6/1 オリーブ灰色粘質シルト 極細砂、2.5Y7/8 黄色粘質シルト斑状に混じる
- 6 2.5GY6/1 オリーブ灰色粘質シルト 極細砂、2.5Y7/8 黄色粘質シルト斑状に混じる
- 7 2.5Y7/8 黄色粘質シルト 極細砂、2.5Y6/7 黄色粘質シルト混じる
- 8 2.5Y7/8 黄色粘質シルト 極細砂、2.5Y6/7 黄色粘質シルト混じる
- 8' 10YR6/5/1 暗灰色粘質シルト 極細砂～粗粒砂混じる
- 9 2.5Y7/8 黄色粘質シルト 極細砂、2.5G6/1 暗白色粘質シルト混じる

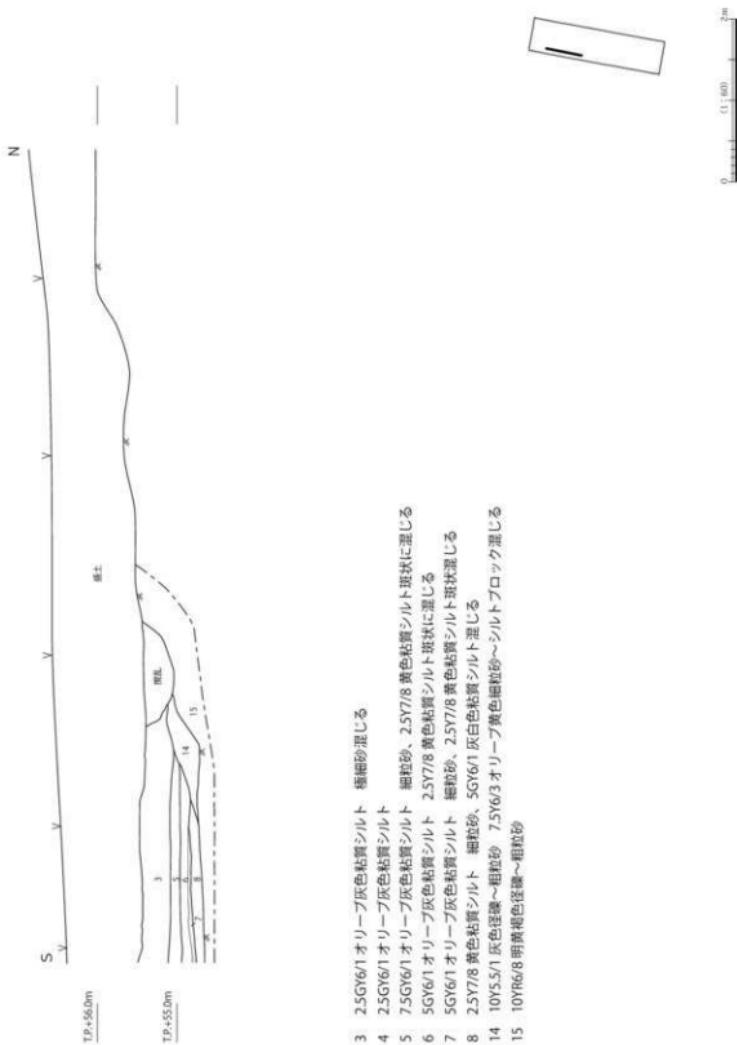


図40 第6調査区西壁断面図北半

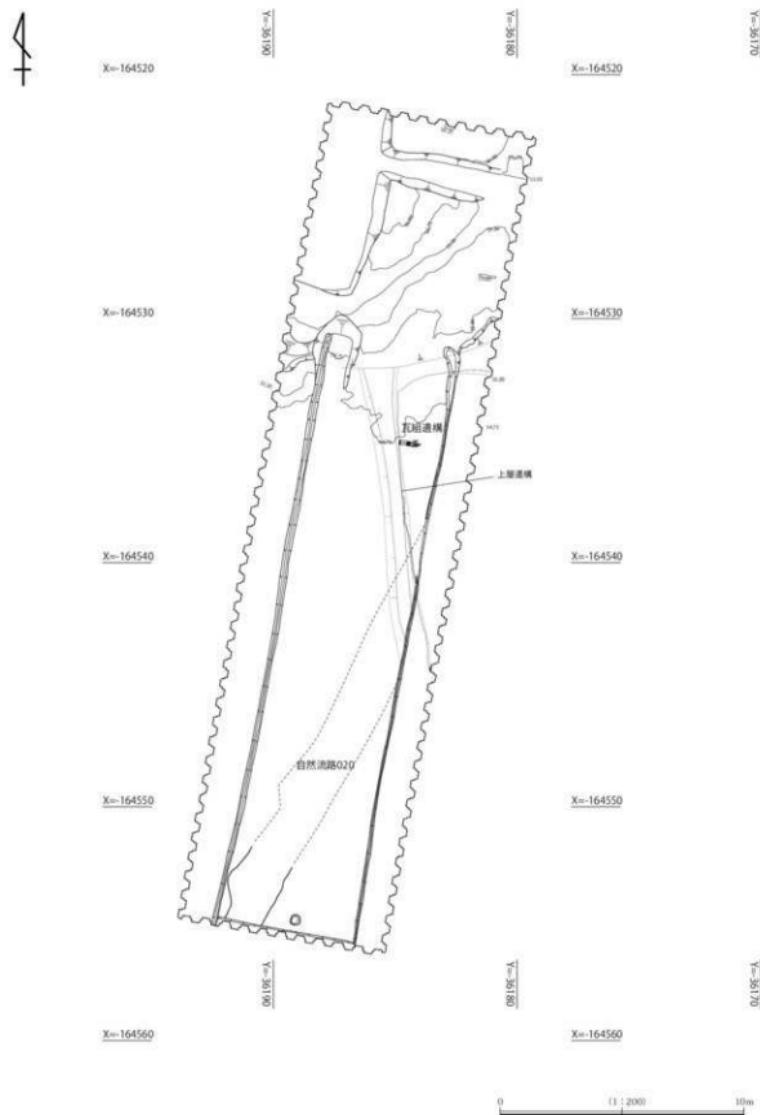


図 4.1 第6調査区平面図

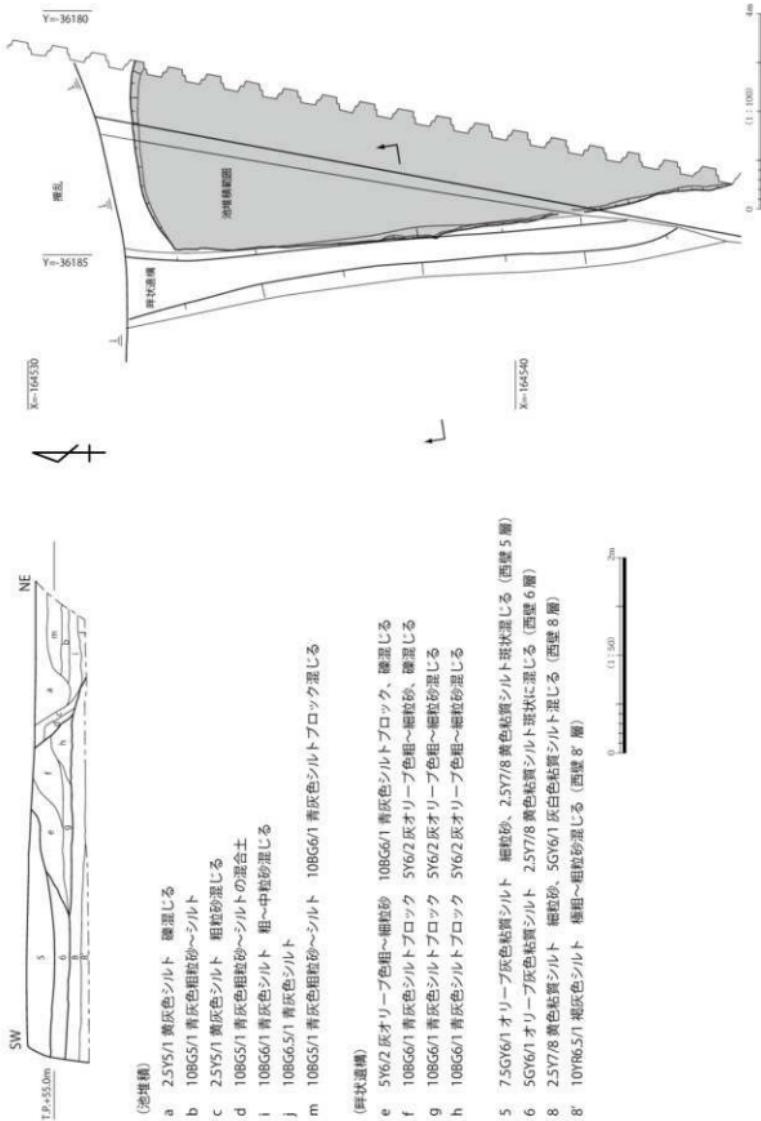


図4.2 第6調査区上層遺構構平・断面図

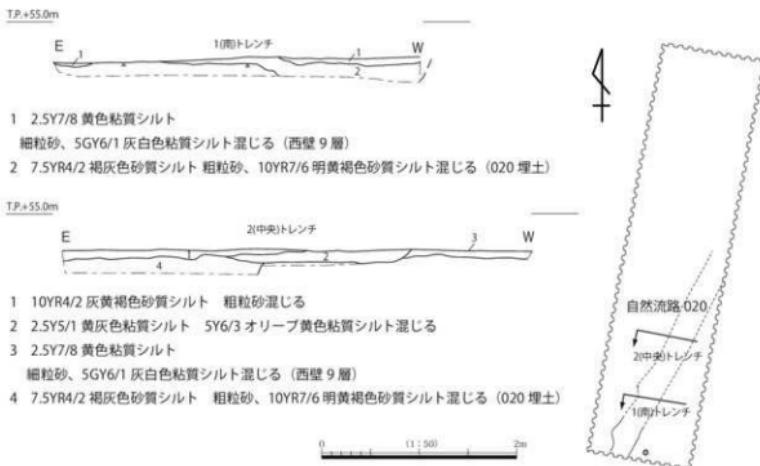


図 4-3 第6調査区流路 0-20 平・断面図

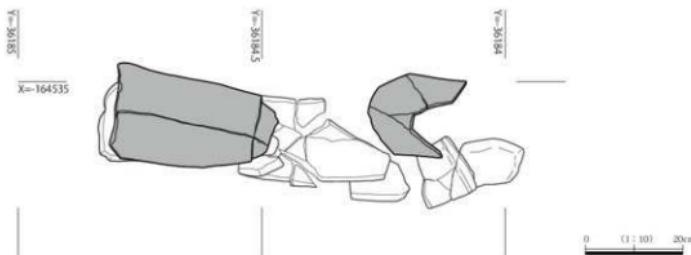


図 4-4 第6調査区瓦組遺構出土状況図

み合わせ地形の低い方へわずかに傾斜するよう組まれていることから、排水機能を持った遺構であると考えられる。上層の畔状遺構の形成以前に機能していたものと考えられる。

出土遺物

瓦組遺構出土瓦（図 45）

82～86は、瓦組遺構から出土した瓦で、いずれも瓦組遺構として出土したものである。82は有段式の玉縁（本瓦葺）丸瓦である。凸面は縦方向に縛目叩きが施される。凹面にはコビキ A の痕跡及び布目痕を残す。側面部は面取りが顕著である。83、84は無段式の行基瓦で、端部が広がる形となる。凸面には叩き目は見られず、凹面はナデ調整である。82に比べ、側面の面取は顕著ではない。85は形式は不明である。凸面には叩き目はみられない。凹面にはコビキ A の痕跡及び布目痕を残す。86は器形から無段式と考えられる。凸面には叩き目は見られない。

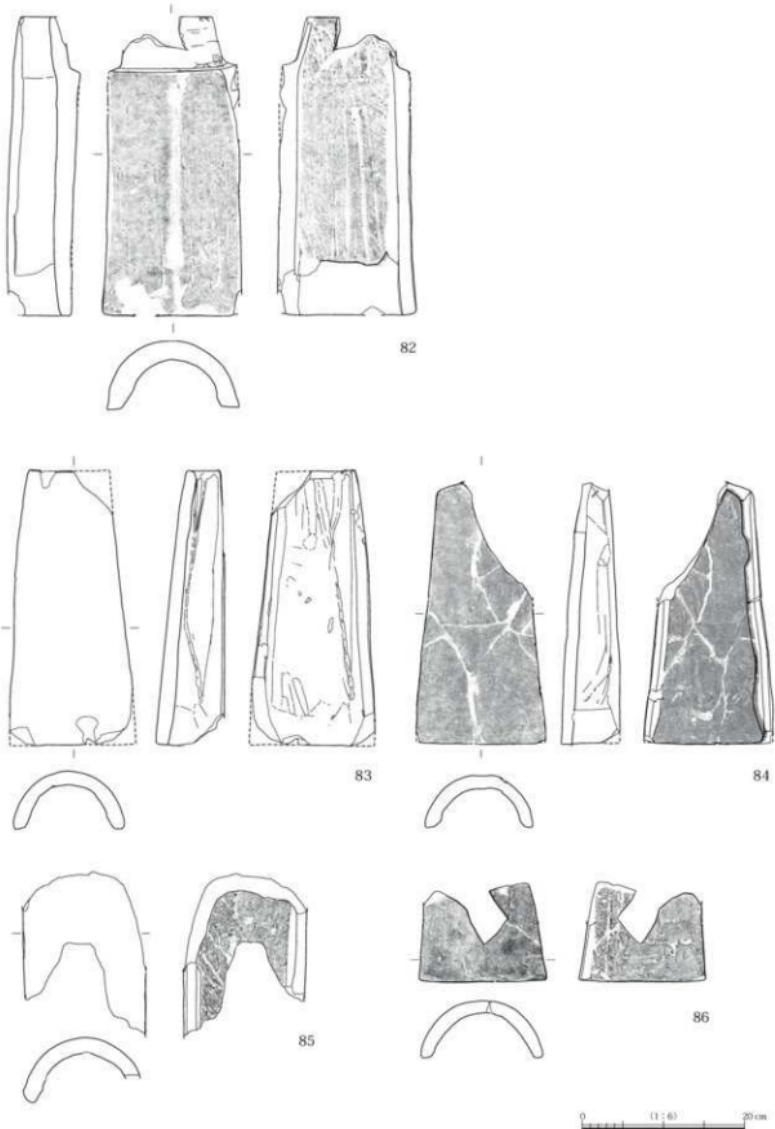


図45 第6調査区出土瓦

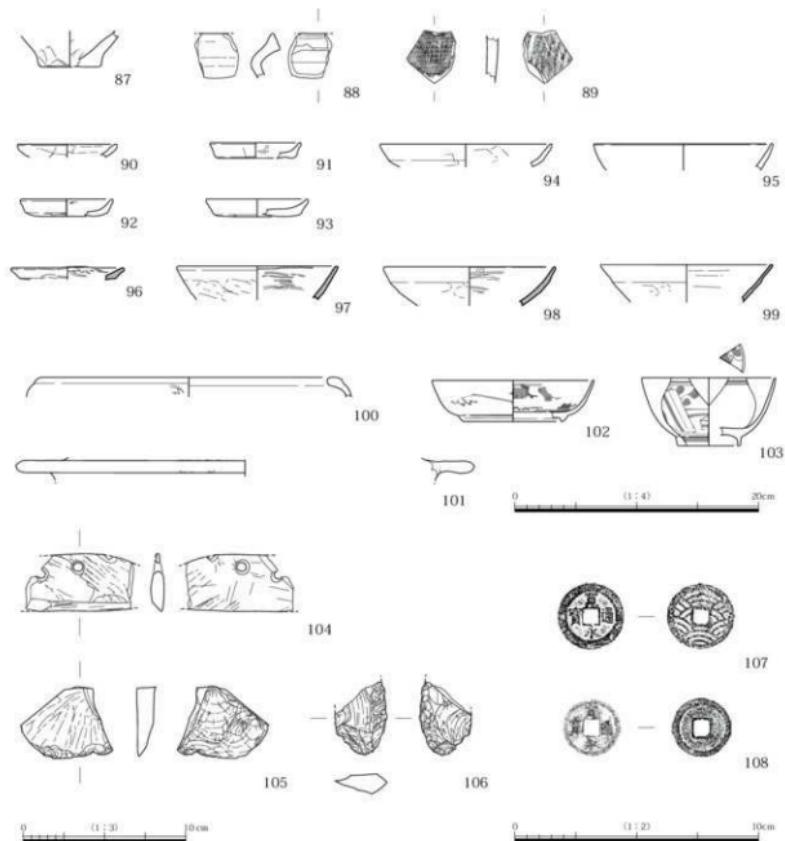


図4-6 第6調査区出土遺物

104(自然流路0.20)、それ以外は包含層

遺構及び包含層出土遺物(図46)

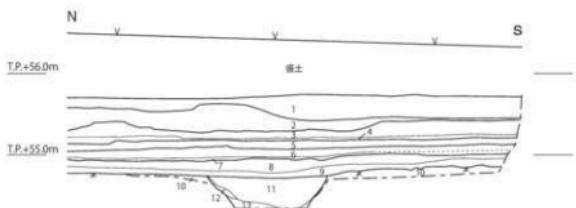
87は弥生土器底部である。内外面ともに工具によるナデ調整である。弥生時代後期。88は弥生土器甕の口縁部である。口縁部には2条の沈線が巡る。弥生時代後期。89は上師質甕の体部である。内面は刷毛目、外面は叩き目を残す。90～95は土師器皿である。90～93は、口径8cm前後の小型のもので、口縁部が体部から直線的に張り出るものである。口縁端部は面取りされず、丸くすぼまる。14世紀代。89は同様な器形で、やや大きい規格となる。95は深身でやや大きい規格となる。椀状の器形を呈する。96は瓦器皿である。口縁部が体部から直線的に張り出し、外側に開く器形となる。97～99は瓦器椀である。口縁部は内湾から直線的に開く器形で、横ナデによりわずかに外面が四線状を呈する和泉型の特徴をもつ。表面は摩滅が著しいが、外面にユビオサエを残し、内面のミガキは間隔が粗い。いずれも

14世紀代である。100・101は土師質の羽釜である。100は口縁部で、端部が肥厚している。外面はハケ目調整である。101は鉢部である。102は染付皿である。深皿であり、外面には唐草文が描かれる。18世紀代。103は染付椀である。口縁内面に二重線がめぐる。外面には直線的な文様が描かれ、明るい色合いとなっている。19世紀以降の所産であろう。104は弥生時代の石臼である。両端は欠損しているが、刃部をもち、紐通し穴と考えられる穿孔が2箇所に施される。自然流路O20から出土した。105はサヌカイト製石槍の未成品である。先端部は欠損している。弥生時代の所産であると考えられる。106はサヌカイトの剥片である。部分的に押圧剥離が認められる。この他にも同程度の大きさのサヌカイト剥片が本調査区で数点出土している。107・108は寛永通宝である。107は真鍮四文銭である。裏面には二十一波形が刻まれている。ともに18世紀後半に鋳造されたものと考えられる。108は鉄一文銭である。裏面は無文で、全体的に酸化した状態である。

第8節 第7調査区

基本層序(図47)

第7調査区の調査方法については、トレンチ調査に変更した。その経緯詳細については第1章で述べた通りである。第7調査区の現地表の高さはTP.+56.5m前後である。基本的な層序は1層から9層まで第6調査区と一致する。3層以下は第6調査区と比べやや層厚が薄い。基盤層となる第10層は明黄褐色粘質シルト層からなり、6層北側で確認した砂礫層は確認できなかった。この上面において東西方向に流れる自然流路O20を検出したが、遺物については確認できなかった。



- 1 河陽鐵道盛土
- 2 N4/0 灰色粘質シルト 砂礫混じる
- 3 2.5GY6/0 オリーブ灰色粘質シルト 細緻砂混じる
- 4 2.5GY6/1 オリーブ灰色粘質シルト
- 5 7.5GY6/1 オリーブ灰色粘質シルト 細粒砂、2.5Y7/8 黄色粘質シルト斑状に混じる
- 6 5GY6/1 オリーブ灰色粘質シルト 2.5Y7/8 黄色粘質シルト斑状に混じる
- 7 5GY6/1 オリーブ灰色粘質シルト 細粒砂、2.5Y7/8 黄色粘質シルト斑状混じる
- 8 2.5Y7/8 黄色粘質シルト 細粒砂、5GY6/1 灰白色粘質シルト混じる
- 9 2.5Y7/8 黄色粘質シルト 細粒砂、5GY6/1 灰白色粘質シルト混じる
- 10 2.5Y8/8 黄色粘質シルト
- 11 N2/0 黒色粘土ブロック、10層ブロック、10YR4/4 褐色砂質土ブロック混じる(O20埋土)
- 12 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト (O20埋土)
- 13 5Y6/1 灰色粗~細粒砂 (O20埋土)

図47 第7調査区壁断面図

検出した遺構

自然流路 020 (図 48)

自然流路は幅 130cm、深さは 40cm 以上となるが、湧水等のため最終的な深さは確認できなかった。位置関係から第 6 調査区で検出された自然流路 020 と一致するものと考えられる。そのほか旧河陽鉄道盛土内から近世以降の遺物が出土したが、包含層及び自然流路からは遺物が出土しなかった。



図 48 第7調査区平面図

第4章 自然科学分析

はじめに

中野北遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

試料と方法

測定試料の情報、調製データは表3のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

表3 測定試料

測定番号	測定データ	試料データ	前処理
PLD-41555	遺構：竪穴住居 005 カマド 試料 No.1	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：0.1 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-41556	遺構：竪穴住居 005 カマド 試料 No.2	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-41557	遺構：土坑 024 墓土（東側） 試料 No.3	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）

結果

表4に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ¹³C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、暦年較正結果を、図49に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.3（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、1σ暦年年代範囲はOxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年年代範囲であり、同様に2σ暦年年代範囲は95.4%信頼限界の暦年年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

考察

測定結果（以下の較正年代は2σの値）は、竪穴住居005カマドの試料No.1の¹⁴C年代が1510±20BP、較正年代が437-444 cal AD(0.9%)、473-486 cal AD(2.2%)、535-608 cal

表4 測定結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	樹年較正年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C 年代を曆年代に較正した年代範囲 1 σ 曆年代範囲	2 σ 曆年代範囲
PLD-41555 試料 No.1	-25.51 \pm 0.19	1509 \pm 18	1510 \pm 20	544-582 cal AD (68.2%)	437-444 cal AD (0.9%) 473-486 cal AD (2.2%) 535-608 cal AD (92.3%)
PLD-41556 試料 No.2	-26.13 \pm 0.16	1507 \pm 18	1505 \pm 20	545-582 cal AD (68.2%)	474-485 cal AD (1.5%) 536-610 cal AD (93.9%)
PLD-41557 試料 No.3	-30.60 \pm 0.59	4856 \pm 27	4855 \pm 25	3691-3687 cal BC (3.4%) 3662-3636 cal BC (64.8%)	3700-3632 cal BC (89.9%) 3554-3540 cal BC (5.5%)

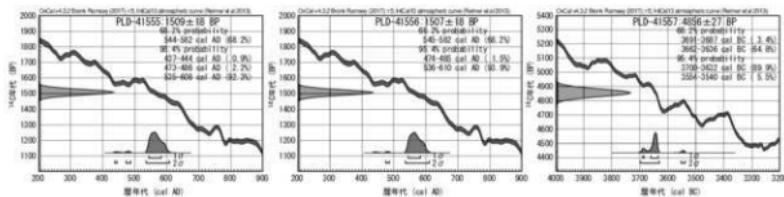


図4-9 較正年代結果

AD(92.3%)で紀元後5世紀前半～7世紀初頭、竪穴住居005カマドの試料No.2の¹⁴C年代が1505土20BP、較正年代が474-485 cal AD (1.5%)および536-610 cal AD (93.9%)で紀元後5世紀後半～7世紀前半の曆年代を示した。また、土坑024埋土の試料No.3は14C年代が4855土25BP、較正年代が3700-3632 cal BC (89.9%)および3554-3540 cal BC (5.5%)であった。

竪穴住居005カマドの試料No.1とNo.2の曆年代値については、岸本（2011）の古墳時代から飛鳥時代の土器型式および時期区分と曆年代の関係にもとづくと、古墳時代中期～飛鳥時代初頭ないし前半頃に対比される。土坑024埋土の試料No.3は、小林（2017）の縄文時代の土器型式および時期区分と曆年代の関係にもとづくと、縄文時代前期後葉～末葉に対比される。

引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- 岸本直文（2011）古墳編年と時期区分。一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編「古墳時代の考古学Ⅰ 古墳時代史の枠組み」：34-44。同成社。
- 小林謙一（2017）縄紋時代の一土器型式編年と炭素14年代一。263p。同成社。
- 中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」日本第四紀学会：3-20。
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Gullerson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

第5章 総括

今回の調査では、これまであまり調査が行われてこなかった粟ヶ池の西岸を南北約300mに渡って調査を行うことができた。隣接する粟ヶ池が中位段丘上の開析谷を堰き止めて築造されたことが想定されていることから（大阪府教育委員会 2011）、調査地は旧谷地形の縁辺部に沿った部分にあたり、東側に向かって急激に落ちる地形となり、南北方向にも起伏に富んだ地形となっていた。このような地形条件から各時代の土地利用が各調査区によって若干異なる様相を確認できた。古墳時代後期（6世紀後半）を中心に、縄文時代～近世の遺構・遺物を検出するとともに、中世以降の粟ヶ池の西岸の様相を確認することができた。ここでは今回調査地の通時的な様相を総括することに加え、古墳時代の様相及び中世以降の粟ヶ池の様相をまとめたい。

各時代の様相

縄文時代

基盤層の標高がT.P.+約56.5mと最も高くなる第5調査区において、2基の縄文時代と推測される土坑を確認した。出土遺物が非常に少ないため断定はできないが、土坑023からは石鏃が出土し、隣接する焼土ブロックを含む土坑024出土炭化材が縄文時代前期後葉の年代を示すことから、その時期にこの地において活動があった可能性は高い。調査地西側に隣接する宮町遺跡でも縄文土器等が出土しているが、縄文時代前期まで遡る活動痕跡が確認されたのは今回が初めてである。

弥生時代

基盤層の標高がT.P.+約54.6mと第5調査区より2m程度下がる第6調査区の南半では、弥生時代の土器・石器が出土している。基盤層を削り込む自然流路020より石包丁が出土しており、上層の包含層からは弥生時代後期の土器が出土している。弥生時代の明確な遺構はなかったものの、当調査区ではこのほかにもサヌカイト製の石器や剝片が比較的多く出土している。第6調査区の南西約300mの近鉄長野線に西接する場所において、富田林市教育委員会が2017年度に本調査をおこなっており、弥生時代後期の溝を検出している（富田林市教育委員会 2019）ことから、この近くに弥生時代の遺跡の中心があったことが想定される。

古墳時代

古墳時代の遺構としては、第1調査区では竪穴住居1基、土坑4基を検出し、第4調査区では落込み内に土器の集積を検出した。第1、第4調査区とともにそれぞれT.P.+約55.0m、T.P.+約54.5mと地形の低くなった箇所において遺構を検出しており、特に第4調査区は今回の全調査区の中の最深部であった。また遺構出土遺物は、須恵器はTK43型式、土師器もそれに併行する6世紀後半のもので一括性の高いものであった。隣接する宮町遺跡掘立柱建物周辺の出土遺物ともおおむね同時期となるが、集落の展開については周辺の調査成果を含め後述する。

中世以降

古墳時代以降は1点古代の遺物が確認できたのみで、それ以外は中世まで遺物は出土していない。第1、第2、第6、第7調査区の基盤層の直上に1～2層の中世の耕作土層を確認した。出土した瓦器椀及び土師皿等からおおむね14世紀に位置付けられ、一部15世紀前半の遺物が含まれる。これらの層は基盤層の標高が低くなる調査区で検出しており、それ以前の遺構はこれら耕作土層に大部分削平されている。一方、基盤層が高くなる第4調査区南半～第6調査区北半にかけて中世の耕作土層は確認

表5 栗ヶ池周辺の古墳時代後期～

飛鳥時代の遺構分布



図50 栗ヶ池周辺古墳時代後期遺跡の動向

されていない。

中世以降も耕作地が展開していたと考えられるが、中世後半から江戸前期の遺物はほとんど確認できていない。18世紀になると再び遺物の量が増加し、各調査区の耕作土層及び池の堆積層から染付等が出土している。特に第1、第3、第6調査区では池の堆積層と河陽鉄道盛土の間に1～2層の耕作土層があり、出土遺物から18世紀後半から19世紀末までにはこの部分では池が埋没し、耕作地が展開したものと考えられる。なお検出された畔状遺構や盛土遺構については後述する。

14世紀から近代にかけて当地は基本的に耕作土として利用されているが、1898年に河陽鉄道が開通しており、それ以後大部分は鉄道敷設による造成が行われ、現代にいたっている。

古墳時代の様相

前述したように今回の調査では、古墳時代後期(6世紀後半)の遺構を確認することができた。近年栗ヶ池周辺では、これまで調査が行われてこなかった栗ヶ池西側の宮町遺跡、北側の栗ヶ池遺跡(図50、表5)において新たな調査成果があり、今回の調査成果も含め栗ヶ池周辺の古墳時代後期から飛鳥時代にかけての動向を概観する。

栗ヶ池西側ではこれまで集落に関係する遺構は乏しかったが、宮町遺跡の調査における6世紀後半以降の掘立柱建物群及び今回調査における6世紀後半の堅穴住居および土坑等により栗ヶ池周辺の古墳時代後期の集落の様相の一端を明らかにすることができた。宮町遺跡では奈良時代、平安時代と集落が継続することから、6世紀後半で収束する今回調査地とはやや時期差がある。相対的に低い今回調査地から高い宮町遺跡へと集落が展開していった可能性がある。また北側の栗ヶ池遺跡では、6世紀後半と考えられる少数のピットが見つかっている。東側においては、中野北遺跡の範囲内で、古墳時代後半から飛鳥時代と考えられる小古墳、飛鳥時代の土坑墓が確認され、桜井遺跡においても、飛鳥時代の遺

構が検出されている。

一方粟ヶ池南側の中野北遺跡の範囲内においては現在のところ調査事例は乏しく、当該期の目立った遺構は見つかっていない。しかしながら、さらに南方の中野遺跡においては、6世紀末から7世紀中ごろの遺構が見つかっており、南西には新堂廃寺があることから飛鳥時代にかけて粟ヶ池南側でも集落が展開していったことが想定できる。

粟ヶ池周辺の調査は、依然として断片的なものであり確実なことは言えないが、6世紀後半には粟ヶ池の西側から北西にかけて遺構・遺物の分布の中心があり、飛鳥時代には宮町遺跡が依然として継続する一方で、桜井遺跡などの東側にも分布が広がり、粟ヶ池周辺一帯にその分布が拡大していく様相が見て取れる。また宮町遺跡と今回調査地との関係に見られるように、低いところから高いところへ集落が広がっていった可能性が指摘できる。

粟ヶ池の様相

今回調査では、第1調査区、第2調査区、第3調査区、第6調査区において過去の粟ヶ池の堆積層と考えられる青灰色のシルト～粘土層を確認した（図51）。2010年度の粟ヶ池東岸での調査において、中世から現代にかけての粟ヶ池堤体が検出されており、西岸においてもこれに対応する堤体が検出される可能性もあったが、やや違う様相を呈することが確認できた。

第3章より池堆積周辺の遺構の様相をまとめると、畔状遺構は第1、2、6調査区で確認した。いずれもブロック土によつて積み上げられておらず、遺構と耕作土層との境はあまりはっきりしない。それぞれ旧池の堆積層に沿うように基盤層の地形の変化点に築かれていることが想定される。いずれもかさ上げ・改修は2回にも満たず、上場の幅は30cm～50cm程度で狭く、高さも60cm以下と低いものである。

盛土遺構は第3～4調査区で検出した（図51）。残念ながら調査区の関係上横断面で確認できず、その幅については不明である。第3調査区では池と接岸する部分、第4調査区では地形の落ち込みを埋めている部分を確認できた。層厚は約50～60cm程度で、砂礫を多く含む層からな



図51 粟ヶ池西岸の様相

り、高さはT.P.+約55.5mとなる。

2010年度の粟ヶ池東岸の中野北遺跡における堤体の調査においては、堤1（平成）、堤2（昭和以前）、堤3（18世紀）、堤4（13世紀）の大別して四段階の時期にわたって堤が、同じ場所に大規模に改築されていることがわかつており、堤4は13世紀代に築堤されたと考えられ、3回のかさ上げを経て、堤の上場の標高値はT.P.+54.7mからT.P.+55.5mとなった。全体の高さとしては1m程度と考えられる。堤3は18世紀代に築堤され、2回のかさ上げを経て、堤の上場の標高地、T.P.+55.8mからT.P.+56.5mとなり、全体の高さは堤3のみでさらに1m積みあがったものであった。

第1、2、6調査区の畔状遺構は規模が小さく、堤体として考えるのは難しく、単純にこれまで水田として低いところまで利用されていた箇所が水位の上昇にともない、水没したと考えるのが妥当ではないだろうか。西側に急激に上がる地形を考慮すれば、東岸のようなある程度の規模の堤体は必要でなかつたことが考えられる。またこれら畦の築造時期については確実なことは言えないが、いずれも概ね14世紀前半と考えられる耕作土層の直上に造られており、堤4よりもやや時期が遅れる可能性がある。

第3、第4調査区で確認された盛土遺構は、盛土内より近世以降の遺物が出土しており、堤3の築堤に伴って造成が行われた可能性がある。第4調査区から、盛土の上層には近世後期～近代の耕作地が2面程度にわたって展開しており、段丘の縁辺を埋めて耕作地を造成したものと考えられる。また東岸における堤3は粘土によりしっかりと突き固められる工法が採られる一方で、第3、4調査区の盛土遺構は砂礫を多く含んでおり、その層相は大きく異なっている。それぞれの上場の標高地は1m以上の差があり、堤体の様相は東西で一致はしない。

以上のことまとめると、今回の調査では2010年度の調査と対応するような箇所に改築し積み上げられた堤体を確認できなかった。その理由としては、旧地形が西に向かって急激に上がる地形であり大規模な堤体が必要となかったため、また文献にみられるように南西側の埋め立てを行っていた可能性があるため、近代以降の鉄道の敷設による変更をうけていたためなど、東側とは改修の履歴が大きく異なっているからであると考えられる。特に堤1、2の改修時には西岸ではすでに鉄道が敷設されているため、これに対応する改修は今回調査地においては認められなかった。

また第2章で述べた「喜志村明細帳」の堤の記述と比較すると、具体的な箇所は明らかではないが、「同所西東南三方」の記述の規模とは一致しない。一方で、第1、3、6調査区では旧池堆積層の上に近世後期以降の耕作層が展開していること、また第4調査区では今回調査区の最深部を埋めて造成していることから、具体的な箇所や時期はわからないものの明細帳の「埋め立て」の記述と一致する可能性がある。

まとめ

今回の調査では、古墳時代後期の集落を検出するとともに、中世以降の粟ヶ池東岸における土地利用の様相を確認することができた。特筆すべき成果としては、宮町遺跡の調査において確認されていた古墳時代後期の集落域が、粟ヶ池側の低い土地にまで広がっていたことを確認した。また粟ヶ池東岸の土地利用については、中世以降多少の断続はあるものの、連續と耕作地が広がっていたが、西岸で確認されたものと同様な堤体は少なくとも粟ヶ池の北東では確認できなかった。粟ヶ池の築造の時期については、依然として不明な点が多く、やはりこれまで述べられてきたように粟ヶ池北側部分の調査が待たれる。

引用・参考文献

- 大阪府教育委員会 1985 『鍋島細井庵寺跡発掘調査概要』
- 大阪府教育委員会 2005 『中野北遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告 2004 - 6
- 大阪府教育委員会 2011 『中野北遺跡 II—主要地方道美原太子線道路整備工事に伴う発掘調査一』大阪府埋蔵文化財調査報告 2010 - 6
- 大阪府教育委員会 2019 『宮町遺跡—府道美原太子線整備事業に伴う発掘調査一』大阪府埋蔵文化財調査報告 2018 - 1
- 大阪府立近つ飛鳥博物館 2006 『年代のものさし—陶邑の須恵器』
- 佐藤 隆 2007 「6世紀における須恵器大型化の諸様相」『大阪歴史博物館 研究紀要第6号 pp25-48
- 中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 辻 美紀 1999 「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室 10周年記念論集一』大阪大学考古学研究室 pp351-365
- 富田林市遺跡調査会 1997 『中野北遺跡』富田林市遺跡調査会報告 5
- 富田林市遺跡調査会 1997 『中野北遺跡 II』富田林市遺跡調査会報告 8
- 富田林市遺跡調査会 1998 『桜井遺跡』富田林遺跡調査会報告 16
- 富田林市遺跡調査会 1998 『中野北遺跡 III』富田林市調査報告会 19
- 富田林市教育委員会 1995 『平成 6 年度富田林市内遺跡群発掘調査報告書』富田林埋蔵文化財調査報告 26
- 富田林市教育委員会 2012 『平成 23 年度富田林市内遺跡群発掘調査報告書』富田林文化財調査報告 51
- 富田林市教育委員会 2013 『平成 24 年度富田林市内遺跡群発掘調査報告書』富田林文化財調査報告 52
- 富田林市教育委員会 2014 『平成 25 年度富田林市内遺跡群発掘調査報告書』富田林文化財調査報告 53
- 富田林市教育委員会 2016 『平成 27 年度富田林市内遺跡群発掘調査報告書』富田林文化財調査報告 57
- 富田林市教育委員会 2017 『平成 28 年度富田林市内遺跡群発掘調査報告書』富田林文化財調査報告 59
- 富田林市教育委員会 2019 『中野北遺跡』富田林市文化財報告 64
- 富田林市史編集室編 1985 『富田林市史』第 1 卷
- 富田林市史編集室編 1998 『富田林市史』第 2 卷
- 富田林市史編集室編 1974 『富田林市域とその周辺の村様子細帳』富田林市史研究紀要第 4 号
- 中久保辰夫 2018 「土師器直口壺と古墳時代土器の特質」『待兼山考古学論集III—大阪大学考古学研究室 30 周年記念論集一』大阪大学考古学研究室編 pp315 - 326
- 中野 雄二 2000 「波佐見」「九州陶磁の編年」—九州近世陶磁学会 10 周年記念—『九州陶磁学会 pp254-289
- 中野 咲 2018 「日韓における移動式カマドの展開様相」『研究紀要』由良大和古代文化研究協会 pp177-188

【観察表】

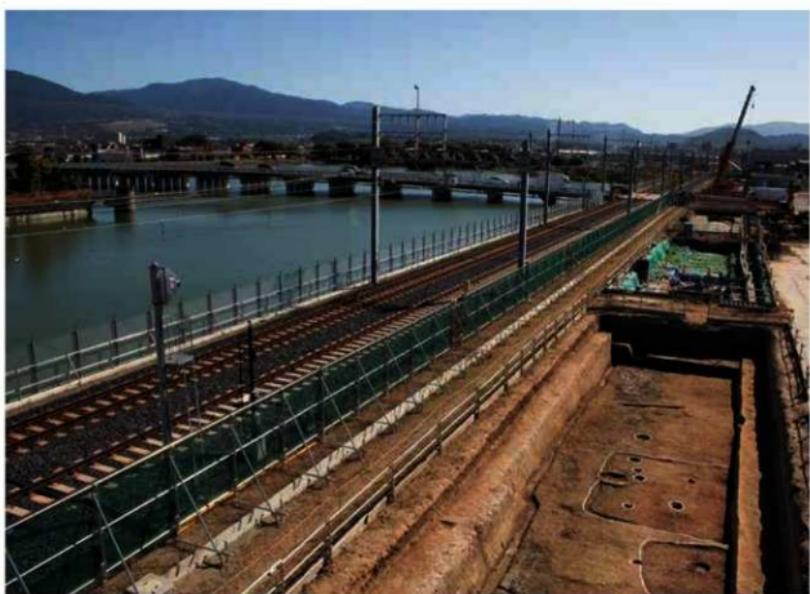
測定番号	地区	遺跡・層位	種類	器種	口径 (復元径)	器高	底面・ 高台径	色調	胎土	焼成/ 備考
1	1区	蟹穴遺跡 005	土師器	壺口壺	10.2	16.6	—	(内面)3YR5/4に赤い斑、10YR6/3に赤い 斑 (外面)3YR5/4に赤い斑、10YR6/3に赤い 斑	赤 (表面含む)	赤
2	1区	蟹穴遺跡 005	土師器	壺	9.10	残 4.5	—	(内面)3YR5/4に赤い斑、10YR6/3に赤い 斑 (外面)3YR5/4に赤い斑、10YR6/3に赤い 斑	赤 (表面含む)	赤
3	1区	蟹穴遺跡 005	土師器	壺	20.0	残 3.1	—	(内面)3YR5/4に赤い斑、10YR6/3に赤い 斑 (外面)3YR5/4に赤い斑、10YR6/3に赤い 斑	赤 (表面含む)	赤
4	1区	蟹穴遺跡 005	土師器	壺	19.0	残 2.4	—	(内面)3YR5/4に赤い斑、10YR6/3に赤い 斑 (外面)3YR5/4に赤い斑、10YR6/3に赤い 斑	赤 (表面含む)	赤
5	1区	蟹穴遺跡 005	土師器	壺	—	残 2.9	—	(内面)3YR5/6 明灰色 (外面)3YR5/6 明灰色 (底面)3YR6/6 明灰色	明灰色 (表面含む)	赤
6	1区	蟹穴遺跡 005	土師器	壺	13.0	残 4.0	—	(内面)3YR5/6 明灰色 (外面)3YR5/6 明灰色 (底面)3YR6/6 明灰色	明灰色 (表面含む)	赤
7	1区	蟹穴遺跡 005	土師器	壺	—	残 13.0	—	(内面)3YR5/6 明灰色 (外面)3YR5/6 明灰色 (底面)3YR6/6 明灰色	明灰色 (表面含む)	赤
8	1区	蟹穴遺跡 005	土師器	壺	17.0	残 3.8	—	(内面)3YR5/6 明灰色 (外面)3YR5/6 明灰色 (底面)3YR6/6 明灰色	明灰色 2mm以下赤斑、 2mm以上赤斑、 表面含む	赤
9	1区	蟹穴遺跡 005	土師器	罐	—	残 5.4	—	(内面)3YR5/6 明灰色 (外面)3YR5/6 明灰色 (底面)3YR6/6 明灰色	明灰色 2mm以下赤斑、 2mm以上赤斑、 表面含む	赤
10	1区	蟹穴遺跡 005	土師器	杯蓋	14.2	残 4.3	—	(内面)3YR5/0 黑 (外面)3YR5/0 黑 (底面)3YR5/0 黑	2mm以下 2mm以上	赤
11	1区	蟹穴遺跡 005	土師器	杯蓋	14.4	残 4.1	—	(内面)3YR5/0 黑 (外面)3YR5/0 黑 (底面)3YR5/0 黑	2mm以下 2mm以上	赤
12	1区	蟹穴遺跡 005	土師器	杯蓋	14.6	残 3.7	—	(内面)3YR5/0 黑 (外面)3YR5/0 黑 (底面)3YR5/0 黑	2mm以下 2mm以上	赤
13	1区	蟹穴遺跡 005	土師器	杯蓋	15.0	残 2.66	—	(内面)3YR5/0 黑 (外面)3YR5/0 黑 (底面)3YR5/0 黑	2mm以下 2mm以上	赤
14	1区	蟹穴遺跡 005	土師器	杯蓋	13.0	残 2.8	—	(内面)3YR5/0 黑 (外面)3YR5/0 黑 (底面)3YR5/0 黑	2mm以下 2mm以上	赤
15	1区	蟹穴遺跡 005	土師器	杯蓋	14.5	残 4.1	—	(内面)3YR5/0 黑 (外面)3YR5/0 黑 (底面)3YR5/0 黑	2mm以下 2mm以上	赤
16	1区	蟹穴遺跡 005	土師器	杯身	11.6	残 4.15	—	(内面)3YR5/0 黑 (外面)3YR5/0 黑 (底面)3YR5/0 黑	2mm以下 2mm以上	赤
17	1区	蟹穴遺跡 005	土師器	杯身	12.5	残 2.9	—	(内面)3YR5/0 黑 (外面)3YR5/0 黑 (底面)3YR5/0 黑	2mm以下 2mm以上	赤
18	1区	蟹穴遺跡 005	土師器	杯身	12.0	残 4.0	—	(内面)3YR5/0 黑 (外面)3YR5/0 黑 (底面)3YR5/0 黑	2mm以下 2mm以上	赤
19	1区	蟹穴遺跡 005	土師器	杯身	12.2	残 3.6	—	(内面)3YR5/0 黑 (外面)3YR5/0 黑 (底面)3YR5/0 黑	2mm以下 2mm以上	赤
20	1区	蟹穴遺跡 005	土師器	杯身	12.0	残 2.7	—	(内面)3YR5/0 黑 (外面)3YR5/0 黑 (底面)3YR5/0 黑	2mm以下 2mm以上	赤
21	1区	蟹穴遺跡 005	土師器	杯身	—	残 4.0	—	(内面)3YR5/0 黑 (外面)3YR5/0 黑 (底面)3YR5/0 黑	2mm以下 2mm以上	赤
22	1区	蟹穴遺跡 005	土師器	高环	—	残 1.7	—	(内面)3YR5/0 黑 (外面)3YR5/0 黑 (底面)3YR5/0 黑	2mm以下 2mm以上	良好耐熱
23	1区	蟹穴遺跡 005	土師器	高环	—	残 2.2	—	(内面)3YR5/0 黑 (外面)3YR5/0 黑 (底面)3YR5/0 黑	2mm以下 2mm以上	良好耐熱
24	1区	蟹穴遺跡 005	土師器	壺	—	—	—	(内面)3YR5/0 黑 (外面)3YR5/0 黑 (底面)3YR5/0 黑	2mm以下 2mm以上	良好耐熱
25	1区	蟹穴遺跡 005	土師器	壺	—	残 4.3	—	(内面)3YR5/0 黑 (外面)3YR5/0 黑 (底面)3YR5/0 黑	2mm以下 2mm以上	良好耐熱
26	1区	蟹穴遺跡 005	サヌカイト	碗	残 2.6	残 5.9	—	—	—	—
27	1区	土坑 004	土師器	把手付壺	11.9	6.7	—	(内面)10YR4/2 灰黃褐色 (外面)10YR4/2 灰黃褐色 (底面)10YR5/6 明灰色	灰 (表面含む)	赤
28	1区	土坑 004	土師器	壺	12.0	残 5.9	—	(内面)10YR4/1 灰褐色 (外面)10YR4/1 灰褐色 (底面)3YR5/6 に赤い斑、2.5Y3/1 黄褐色	灰 (表面含む)	赤
29	1区	土坑 004	土師器	高杯	—	残 1.5	—	(内面)3YR5/6 明灰色 (外面)3YR5/6 明灰色 (底面)3YR5/6 明灰色	赤 (表面含む)	赤

測量番号	地区	遺構・層位	種類	基準	口径 (厘米)	高さ	底径・ 高台径	色調	触土	造成/ 備考
30	1区	土坑004	箱型函	杯蓋	13.2	4.0	—	(内面)N5/0灰 (外側)N5/0灰、2.5YR6/1 黄灰 (表面)7.5YR4/3 灰、2.5Y5/1 黄灰	柔	良
31	1区	土坑004	箱型函	杯身	11.6	3.6	—	(内面)N5/0灰 (外側)N5/0灰 (表面)7.5YR4/3 灰 (表面)7.5YR5/2 黄灰	柔	良
32	1区	土坑004	箱型函	杯身	(11.8)	4.2	—	(内面)N5/0灰 (外側)N5/0灰、7.5Y5/1 黄 (表面)N5/0灰	半坚硬	良
33	1区	土坑010	箱型函	杯蓋	(15.0)	4.6	—	(内面)N5/0灰 (外側)7.5YR7/4 に近い相 (表面)7.5YR7/4 灰 (表面)7.5YR5/2 黄灰 (表面)7.5YR5/2 黄灰	柔	良
34	1区	第6層	土師函	盖	(15.0)	4.7	—	(内面)7.5YR7/4 に近い相 (外側)7.5YR7/4 に近い相 (表面)7.5YR7/4 灰 (表面)7.5YR6/1 灰 (表面)7.5YR6/1 灰	柔(1mm以下) 良好(2mm以上)	良
35	1区	第6層	土師函	盖	(34.0)	4.5	—	(内面)12.5YR6/1 灰 (外側)12.5YR6/1 灰 (表面)10YR5/2 黑灰	柔(1mm以下) 良好(2mm以上)	良
36	1区	第6層	土師函	杆	(15.0)	4.4	—	(内面)7.5YR5/6 黑 (外側)7.5YR5/6 黑 (表面)7.5YR5/6 黑 (表面)7.5YR5/6 黑	柔	良
37	1区	第1層-第6層	箱型函	杯蓋	(14.8)	4.6	—	(内面)10YR7/0 黑(外側)10YR7/0 黑(断面) (表面)10YR7/0 黑	柔	良
38	1区	第6層	箱型函	杯蓋	—	4.5	—	(内面)12.5YR6/2 黑 (外側)12.5YR6/2 黑 (表面)12.5YR6/2 黑	粗(3mm以下) 良好(2mm以上)	不良
39	1区	第18層	箱型函	杯蓋	(14.0)	4.2	—	(内面)N5/0灰 (外側)N5/0灰 (表面)N5/0灰 (表面)10R5/1 黑灰	柔(1mm以下) 良好(2mm以上)	良好(2mm以上)
40	1区	第6層	箱型函	杯蓋	(14.0)	4.0	—	(内面)N5/0灰(外側)N6/0灰(断面)N6/0 (表面)N6/0灰	柔(3mm以下) 良好(2mm以上)	良好(2mm以上)
41	1区	第6層	箱型函	杯蓋	(14.0)	3.6	—	(内面)N6/0灰 (外側)N6/0灰、NS/0 灰 (表面)N6/0灰	半坚硬(1mm以下) 良好(2mm以上)	良
42	1区	第6層	箱型函	杯身	—	4.5	—	(内面)N5/0灰 (外側)N5/0灰 (表面)5YR5/2 黄灰	半坚硬	良
43	1区	第6層	箱型函	杯身	(12.4)	3.0	—	(内面)N5/0灰 (外側)N5/0灰 (表面)7.5YR6/1 黄	柔	良
44	1区	第20層(日暦9 治水期)	箱型函	杯身	(28.0)	4.05	—	(内面)N6/0灰 (外側)N6/0灰 (表面)N7/0 黑	柔	良
45	1区	第6層	箱型函	高杯	—	4.2	—	(内面)N4/0 黑、5Y7/2 黑 (外側)7.5YR6/1 黄 (表面)10YR6/1 黑 (表面)10YR6/1 黑	柔(1mm以下) 良好(2mm以上)	良好(2mm以上)
46	1区	第6層	瓦片	瓦片	(35.0)	4.7	—	(内面)12.5YR6/2 黑 (外側)12.5YR6/2 黑 (表面)12.5YR6/2 黑 (表面)12.5YR6/2 黑	半坚硬(1mm以下) 良好(2mm以上)	不良
47	1区	第2層	陶器	急須	(9.0)	4.9	—	(内面)10YR4/2 黑 (外側)10YR4/2 黑 (表面)7.5YR5/4 に近い相	柔	良
48	2区	溝017	焼成土塊	浅鉢	—	—	—	(内面)7.5YR6/4 灰 (外側)10YR6/4 灰 (表面)7.5YR6/4 に近い相	粗(3mm以下) 良好(2mm以上)	良
49	2区	溝017	土師器7	高台部	—	4.95	—	(内面)7.5YR6/4 黑 (外側)7.5YR6/4 黑 (表面)7.5YR6/4 黑	半坚硬(1mm以下) 良好(2mm以上)	良
50	2区	第18層	箱型函	杯身	—	4.2	—	(内面)N5/0灰 (外側)N5/0灰 (表面)7.5YR6/1 黄	柔	良
51	2区	第18層	瓦片	瓦片	(10.7)	4.26	—	(内面)N4/0 黑 (外側)N4/0 黑 (表面)N5/0灰	柔	良
52	2区	第17層	土師函	小皿	(8.7)	4.5	—	(内面)12.5Y4/2 黑(断面) (内面)7.5Y7/3 黑 (内面)12.5Y4/3 に近い相	粗(3mm以下) 良好(2mm以上)	良
53	2区	第17層	箱型函	青鉢	—	4.5	—	(内面)10YR7/0 黑 (外側)10YR7/0 黑 (表面)5Y4/2 黑オーバーパイプ(自然 断面) (表面)10YR7/0 黑	柔	良好(2mm以上)
54	2区	第17層	土師函	羽釜	—	4.525	—	(内面)10YR6/6 灰 (外側)10YR6/6 灰 (表面)7.5YR6/4 に近い相	半坚硬(1mm以下) 良好(2mm以上)	良
55	2区	第17層	丸瓦	大長瓦	31.8	16.0	—	(内面)N4/0 黑 (外側)N4/0 黑 (表面)N4/0 黑	半坚硬(1mm以下) 良好(2mm以上)	良好(2mm以上)
56	3区	第1層-第11層 (下層部)	土師函	盖	(36.0)	4.6	—	(内面)10YR6/6 灰 (外側)10YR6/6 灰 (表面)10YR6/6 灰	半坚硬(1mm以下) 良好(2mm以上)	良
57	3区	第6層	土師函	小皿	(6.8)	1.35	—	(内面)10YR6/2 黑 (外側)10YR6/2 黑 (表面)7.5YR6/4 に近い相	半坚硬(1mm以下) 良好(2mm以上)	良
58	3区	第2層	罐	染付罐	(13.0)	4.2	—	(内面)10YR6/1 黑 (外側)10YR6/1 黑 (表面)10YR6/1 黑 (表面)10YR6/1 黑	柔	良
59	4区	落ち込み029	土師函	鉢	(13.4)	4.92	—	(内面)10YR6/6 灰 (外側)10YR6/6 灰 (表面)7.5YR7/2 黑 (表面)10YR6/1 黑 (表面)10YR6/1 黑	柔(1mm以下) 良好(2mm以上)	良
60	4区	落ち込み029	土師函	高杯	(16.0)	4.63	—	(内面)10YR6/6 灰 (外側)10YR6/6 灰 (表面)7.5YR6/4 黑	半坚硬	半不良

開削番号	地区	道標・層位	種類	西標	口径 (復元径)	掘高	底面・ 高台面	色調	地土	焼成/ 備考
61	4区	落ち込み 029	柱脚	高杯	—	残 4.5	—	(内面) 2.5Y3/1 黒場, 2.5Y2/1 黒 (前面) 10YR7/2 に近い黒相 (側面) 5Y5/2 黒底灰	黒 0mm 以下のチャート、高石をわずかに含む	真
62	4区	落ち込み 029	柱脚	羽茎	—	残 4.6	—	(内面) 2.5Y4/4 灰 (前面) 10YR7/2 黒相 (側面) 5Y3/2 黑場	黒 0mm 以下の基盤、チャートを多く含む	真
63	4区	落ち込み 029	柱脚	羽茎	—	残 3.2	—	(内面) 10YR7/2 灰黄褐 (前面) 10YR4/4 灰 (側面) 10YR7/3 に近い 黃褐	黒 0mm 以下の基盤、チャートを多く含む	真
64	4区	落ち込み 029	柱脚	杯身	(3.4)	残 3.1	—	(内面) 10YR7/2 黑場 (前面) 10YR7/2 黑相 (側面) 10YR7/3 黑	黒 0mm 以下の基盤、角石を多く含む	良好堅膜
65	4区	落ち込み 029	柱脚	杯身	(3.4)	2.9	—	(内面) 10YR7/2 黑场 (前面) 10YR7/2 黑相 (側面) 10YR7/2 黑	黒 0mm 以下の基盤、角石を含む	真
66	4区	落ち込み 029	柱脚	杯身	(3.0)	4.5	—	(内面) 10YR7/2 黑场 (前面) 10YR7/2 黑相 (側面) 10YR7/1 黄白, 3R8/0 黑白 (断面) 10YR7/1 黄白, 3R8/0 黑白	黒 0mm 以下の基盤、角石を含む	良好堅膜
67	4区	落ち込み 029	柱脚	杯身	(2.6)	4.15	—	(内面) 10YR7/2 黑场 (前面) 10YR7/2 黑, 2Y3/1 黑 (側面) 10YR7/2 黑	やや粗	真
68	4区	落ち込み 029	柱脚	杯身	(1.8)	残 3.2	—	(内面) 10YR7/1 黑 (前面) 10YR7/1 黑 (側面) 10YR7/1 黑	やや粗	真
69	4区	落ち込み 029	底盤相	杯身	(2.1)	残 4.5	—	(内面) 10YR7/1 黑场 (前面) 10YR7/1 黑, 5Y6/1 黑 (側面) 10YR7/1 黑	やや粗	真
70	4区	落ち込み 029	柱脚	杯身	(2.2)	4.05	—	(内面) 10YR7/1 黑场 (前面) 10YR7/1 黑, 5Y6/1 黑 (側面) 10YR7/1 黑	やや粗	真
71	4区	落ち込み 029	柱脚	杯身	—	残 2.35	—	(内面) 10YR7/0 黑 (前面) 10YR7/0 黑 (側面) 10YR7/0 黑	黒	良好堅膜
72	4区	落ち込み 029	柱脚	杯身	(2.2)	4.05	—	(内面) 10YR7/0 黑 (前面) 10YR7/0 黑, 5Y6/0 黑白 (側面) 10YR7/0 黑	黒	良好堅膜
73	4区	落ち込み 029	柱脚	高杯	12.2	8.0	底盤相 10.1	(内面) 10YR6/0 黑 (前面) 10YR6/0 黑 (側面) 10YR6/0 黑	黒 0mm 以下の長石含む	良好堅膜
74	4区	落ち込み 029	柱脚	小型模	—	残 15.3	—	(内面) 10YR6/0 黑 (前面) 10YR6/0 黑 (側面) 10YR6/0 黑	中や粗 (5mm 以下の長石含む)	良好堅膜
75	4区	落ち込み 029	柱脚	廣	15.0	28.0	—	(内面) 10YR6/0 黑 (前面) 10YR6/0 黑 (側面) 10YR6/0 黑	中や粗 (5mm 以下の長石含む)	良好堅膜
76	4区	落ち込み 029	土割場	廣	—	—	—	(内面) 2.5Y5/0 明歩場 (前面) 3.5Y3/0 明歩場 - 3YR6/4 に近い 灰 (側面) 3.5Y3/0 明歩場	黒 0mm 以下の長石、チャート、1mm 以下の直管状物を含む	真
77	4区	井戸 022	瓦	瓦	—	—	—	(内面) 10YR4/0 黑 (前面) 10YR4/0 黑 (側面) 10YR4/0 黑	黒	真
78	4区	井戸 022	胸用	輪	(8.0)	残 2.1	—	(内面) 10YR3/4 黑相, 10YR5/3 に近い 黄 (前面) 10YR3/4 黑相, 10YR5/3 に近い 黄 (側面) 10YR6/6 に近い 黄	黒	真
79	4区	井戸 022	突付け	輪	—	—	—	(内面) 10YR6/0 黑 (前面) 10YR6/0 黑 (側面) 10YR6/0 黑	黒	真
80	4区	第 1 ~ 6 層	柱脚	錐体	—	残 4.2	—	(内面) 10YR6/0 黑 (前面) 10YR6/0 黑 (側面) 10YR6/0 黑	やや粗	良好堅膜
81	5区	土坑 023	サフカイト	石墨	12.05	0.95	—	—	—	—
82	6区	瓦組造構	丸瓦	本瓦群丸瓦	最大長 32.7	最大幅 17.2	—	(内面) 10YR6/0 黑 (前面) 10YR6/0 黑, 10YR7/0 黑 (側面) 10YR6/0 黑	やや粗 2mm 以下長石、 雲母含む	真 (中や軟質)
83	6区	瓦組造構	丸瓦	行基群丸瓦	最大長 33.9	最大幅 15.2	—	(内面) 10YR6/0 黑, NS/0 黑 (前面) 10YR6/0 黑, NS/0 黑 (側面) 10YR6/0 黑	やや粗 2mm 以下長石、 2mm 以下長石含む	真
84	6区	瓦組造構	丸瓦	行基群丸瓦	最大長 32.3	最大幅 16.0	—	(内面) 10YR6/0 黑 (前面) 10YR6/0 黑 (側面) 10YR6/0 黑	粗 (長石含む)	真 (軟質)
85	6区	瓦組造構	丸瓦	不明	最大長 19.9	最大幅 15.2	—	(内面) 10YR6/0 黑, NS/0 黑 (前面) 10YR6/0 黑, NS/0 黑 (側面) 10YR6/0 黑	粗 0mm 以下 黑、褐色 細粒、長石含む	真
86	6区	瓦組造構	丸瓦	行基群丸瓦	最大長 12.4	最大幅 9.5	—	(内面) 10YR6/0 黑, 5YR7/0 黑白 (前面) 10YR6/0 黑, 5YR7/0 黑白 (側面) 10YR6/0 黑白	粗 0mm 以下 長石含む	やや不均
87	6区	第 5 ~ 6 層	胸用	輪	—	残 3.0	底盤相 10.0	(内面) 10YR5/2 黑黄褐 (前面) 10YR5/2 黑黄褐 (側面) 10YR5/2 黑黄褐	粗 0mm 以下長石、石英、角石含む	真
88	6区	旧葉・活葉相構	胸用	輪	—	残 3.7	—	(内面) 10YR5/2 黑白 (前面) 10YR5/2 活葉相 (側面) 10YR5/2 黑白, 2.5Y5/1 黄褐	黒 (ササノリ、薄母含む)	真
89	6区	第 8 ~ 9 層	胸用	胸用	—	—	—	(内面) 10YR4/0 黑 (前面) 10YR4/0 黑 (側面) 10YR4/0 黑	やや粗 0mm 以下長石含む	真
90	6区	第 8 ~ 9 层	柱脚	圓	8.08	残 1.1	—	(内面) 10YR6/2 黑白 (前面) 10YR6/2 黑白 (側面) 10YR6/2 黑白	黒 (ササノリ、薄母含む)	真
91	6区	第 8 ~ 9 层	柱脚	圓	9.74	1.25	底盤相 6.65	(内面) 10YR6/2 黑白 (前面) 10YR6/2 黑白, 10YR6/2 に近い 黑相 (側面) 10YR6/2 黑白	やや粗 (ササノリ含む)	真

用繩番号	地区	遺構・層位	種類	器種	口径 (厘米)	基高	底径・ 高台径	色調	胎土	焼成/ 備考
92	6区	第9層	土師器	罐	(7.4)	1.4	—	(内面)10YR5/2灰黄褐、2.5YR1/8(白) (外面)10YR5/2灰黄褐、2.5YR1/8(白) (内面)5YR8/4土黄、2.5YR1/8(白)	赤(1mm以下長石、ケ サリ(鐵青石))	
93	6区	第8・9層	土師器	罐	(8.2)	1.45	—	(内面)10YR7/6灰 (外面)10YR7/6灰 (内面)17.5YR7/3灰 (外面)17.5YR7/3灰	褐(2mm以下クサリ鐵 青(2mm))	良
94	6区	第9層	土師器	罐	(14.0)	残1.85	—	(内面)17.5YR7/3灰 (外面)17.5YR7/3灰 (内面)17.5YR7/3灰 (外面)17.5YR7/3灰	赤(0.5mm以下長石、 ケサリ鐵、雲母含む)	良
95	6区	第8・9層	土師器	罐	(15.0)	残2.2	—	(内面)17.5YR7/3灰 (外面)17.5YR7/3灰 (内面)17.5YR7/3灰 (外面)17.5YR7/3灰	赤	良
96	6区	第9層	瓦器	皿	(9.0)	残1.6	—	(内面)10YR3/0褐色 (外面)10YR3/0褐色 (内面)10YR3/0褐色 (外面)10YR3/0褐色	青	良
97	6区	第8・9層	瓦器	皿	(14.0)	残3.2	—	(内面)10YR3/0褐色 (外面)10YR3/0褐色 (内面)15YR7/7灰	赤(0.5mm以下長石 含む)	良
98	6区	第8・9層	瓦器	皿	(13.0)	残2.8	—	(内面)10YR3/0褐色 (外面)10YR3/0褐色 (内面)2.5YR7/3浅黃 (外面)2.5YR7/3浅黃	赤(0.5mm以下長石 含む)	不良
99	6区	第9層	瓦器	皿	(14.0)	残3.1	—	(内面)10YR3/0褐色 (外面)10YR3/0褐色 (内面)2.5YR7/1灰 (外面)2.5YR7/1灰	赤(0.5mm以下長石、 雲母含む)	不良
100	6区	第8・9層	土師器	鉢	(7.0)	残1.65	—	(内面)17.5YR7/3灰 (外面)17.5YR7/3灰 (内面)10YR8/2西蕃紅 (外面)12.5YR8/2西蕃紅	赤(1mm以下灰斑、 雲母含む)	
101	6区	第8・9層	土師器	鉢	—	残1.4	—	(内面)17.5YR7/3灰 (外面)17.5YR7/3灰 (内面)2.5YR7/3灰赤	褐(2mm以下長石含む)	良
102	6区	田園・治癒施設	塗付け	碗	(13.2)	3.4	高台部径 (8.0)	(内面)10YR5/1褐色、青、褐(鐵動) (外面)10YR5/1褐色、青、褐(鐵動)	赤	良
103	6区	第3層	塗付け	碗	(10.0)	5.6	高台部径 (5.0)	(内面)10YR5/1褐色、青、褐(鐵動)白 (外面)10YR5/1褐色、青、褐(鐵動)白 (内面)10YR5/1褐色	赤	良
104	6区	自然掩埋020	石製品	石削丁	残長 3.55	残幅 6.65	—	—	—	—
105	6区	時代遺構	サメカイド	二次加工のあ る洞穴	残長 4.45	残幅 5.65	—	—	—	—
106	6区	第9層	サメカイド	幼の未製品	残長 4.55	残幅 3.25	—	—	—	—
107	6区	第3層	鉢	窓水道宝	直径2.8	—	—	—	—	—
108	6区	田園・治癒施設	鉢	窓水道宝	直径2.4	—	—	—	—	—

図 版



1区から栗ヶ池を望む(北から)



7区から調査地を望む(南から)



竪穴住居〇〇五



竪穴住居〇〇五カマド 直口壺出土状況

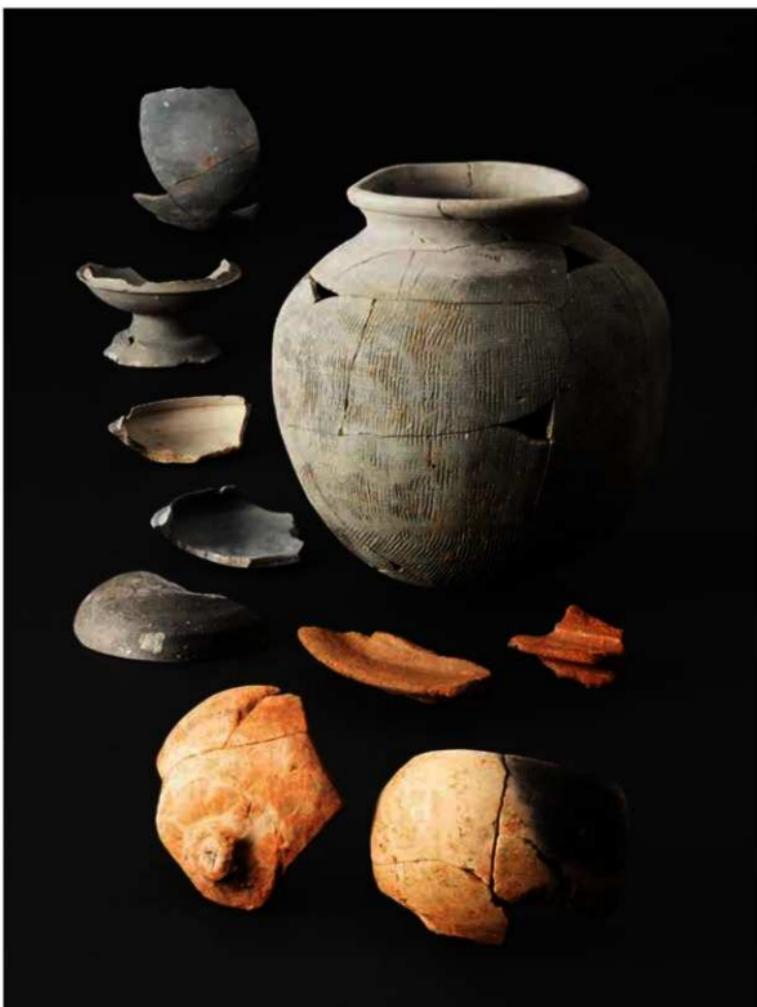
原色図版三 第一調査区出土遺物及び第四調査区出土遺物



第1調査区 穂穴住居005 出土遺物集合



第4調査区 落ち込み029出土移動式カマド



第4調査区 落ち込み029出土遺物集合



a. 第1調査区全景
(北から)



b. 第1調査区中央部の遺構
(北から)



c. 穴住居005
(北から)

図版一
第一調査区(二)



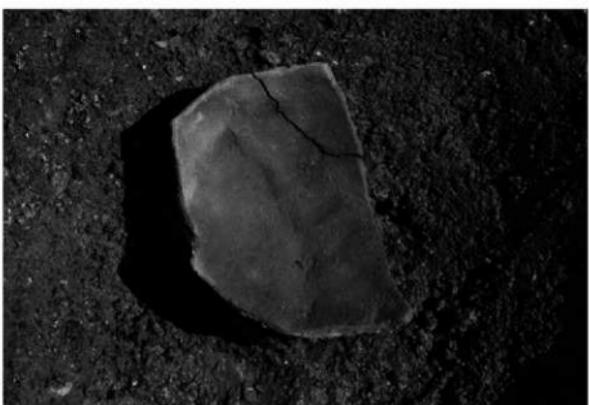
a. 積穴住居005全景
(西から)



b. 積穴住居005カマド
遺物出土状況(西から)



c. 積穴住居005カマド
断ち割り断面(南から)



a. 穂穴住居005内ピット
遺物出土状況(西から)



b. 土坑004
(西から)

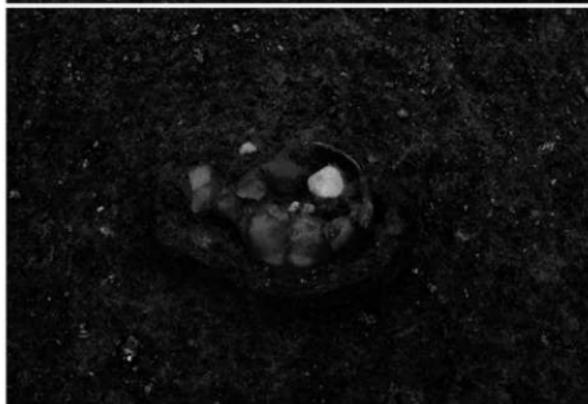


c. 土坑009・010
(南西から)

図版四
第一調査区（四）



a. 土坑004遺物出土
状況（北から）



b. 土坑004遺物出土
状況（北から）



c. 土坑004遺物出土
状況（西から）

図版五 第一調査区(五) 及び第二調査区(一)



a. 第1調査区東壁断面
(西から)



b. 第2調査区全景
(北から)



c. 第2調査区南半
(南から)

図版六 第二調査区(二)



a. 第2調査区北壁断面
(南から)



b. 第2調査区西壁断面
(東から)



c. 第2調査区溝017
(東から)



a. 第3調査区全景
(北から)



b. 第3調査区盛土遺構
(北から)



c. 第3調査区南壁断面
(北から)



a. 第4調査区全景
(南から)



b. 第4調査区北壁断面
(南東から)



c. 第4調査区東壁断面
(南西から)



a. 落ち込み029
(北西から)



b. 落ち込み029遺物
出土状況（西から）



c. 落ち込み029遺物
出土状況（西から）

図版一〇 第四調査区(三) 及び第五調査区(二)



a. 井戸021
(東から)



b. 第5調査区全景
(南から)



c. 第5調査区の遺構
(北から)

図版一一 第五調査区(二) 及び第六調査区(一)



a. 土坑023
(西から)



b. 土坑024
(南から)



c. 第6調査区全景
(南から)



a. 第6調査区北半
(南から)



b. 第6調査区西壁断面
(東から)



c. 畦畔状遺構
(北から)



a. 畦畔状遺構
(北東から)



b. 第6調査区遺構検出
(南から)



c. 自然流路020断面
(北から)

図版一四 第六調査区(四) 及び第七調査区





1



5



15



24



10



16

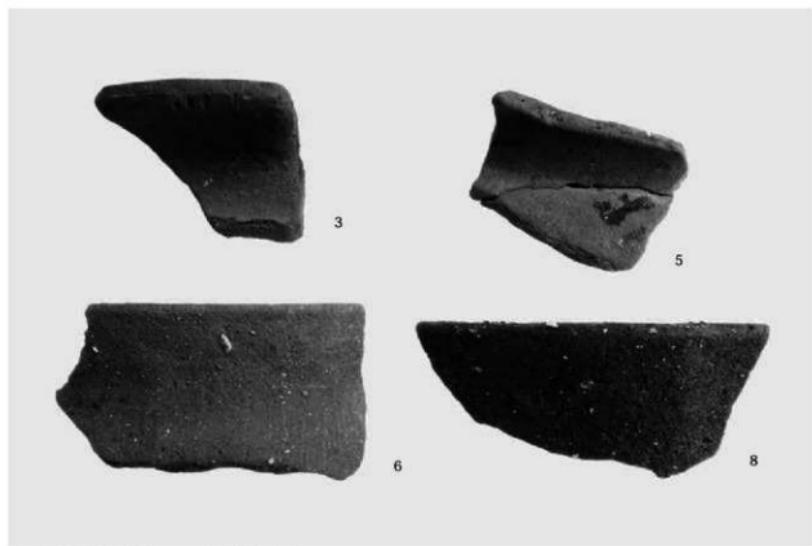


18

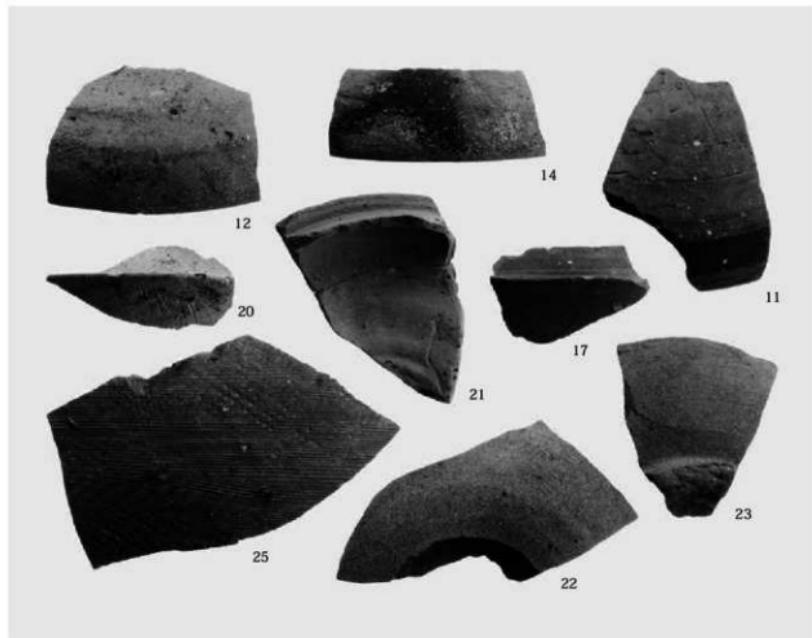


19

第1調査区堅穴住居005出土遺物（1）

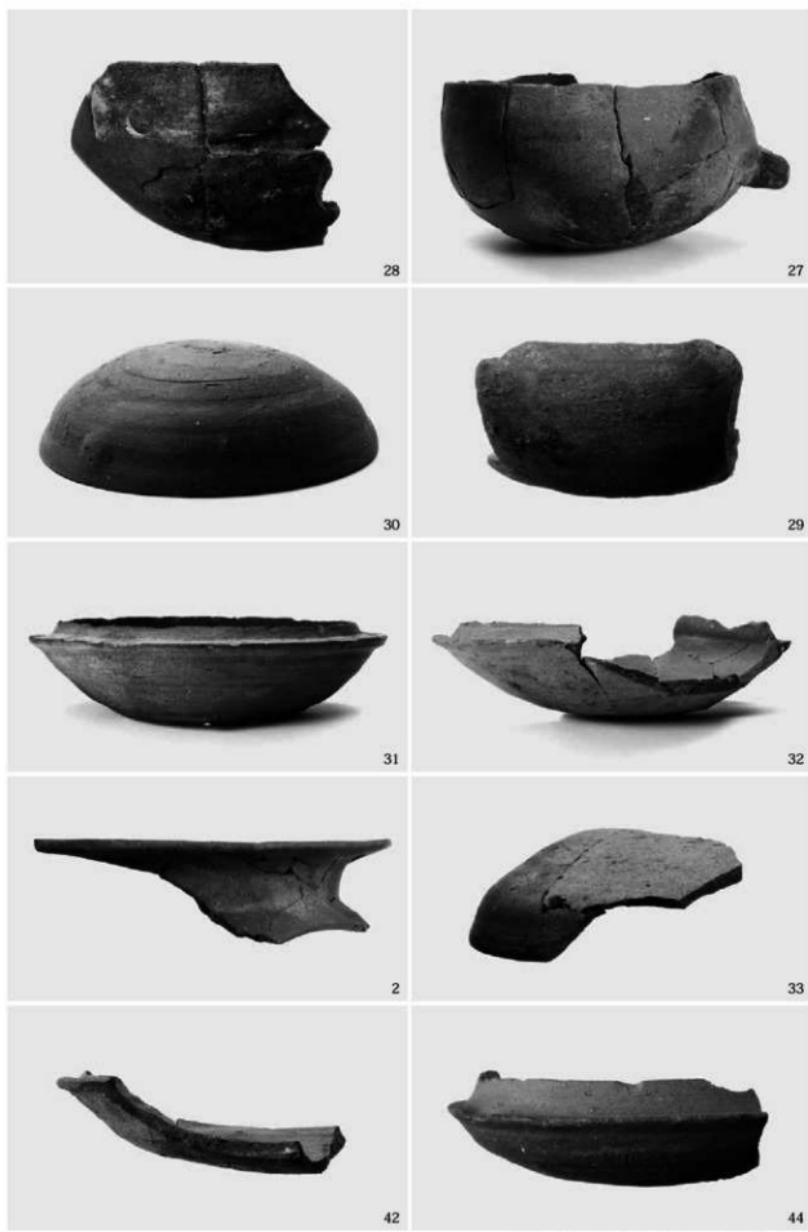


第1調査区竪穴住居005出土遺物（2）



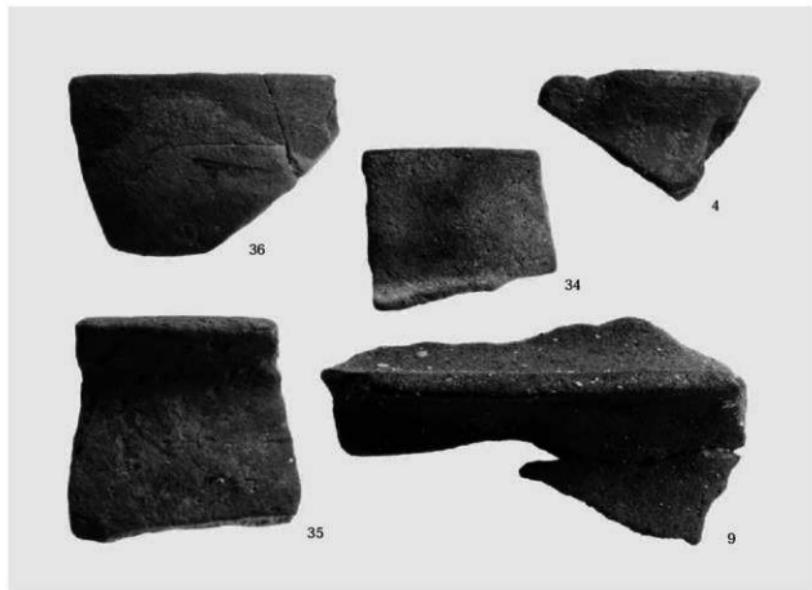
第1調査区竪穴住居005出土遺物（3）

図版一七 第一調査区出土遺物（三）

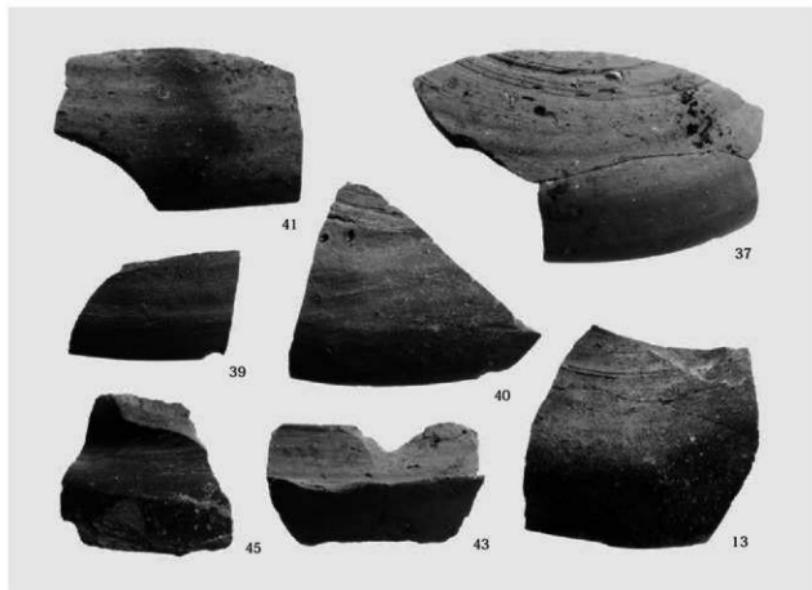


第1調査区遺構及び包含層出土遺物（1）

図版一八 第一調査区出土遺物（四）



第1調査区遺構及び包含層出土遺物（2）

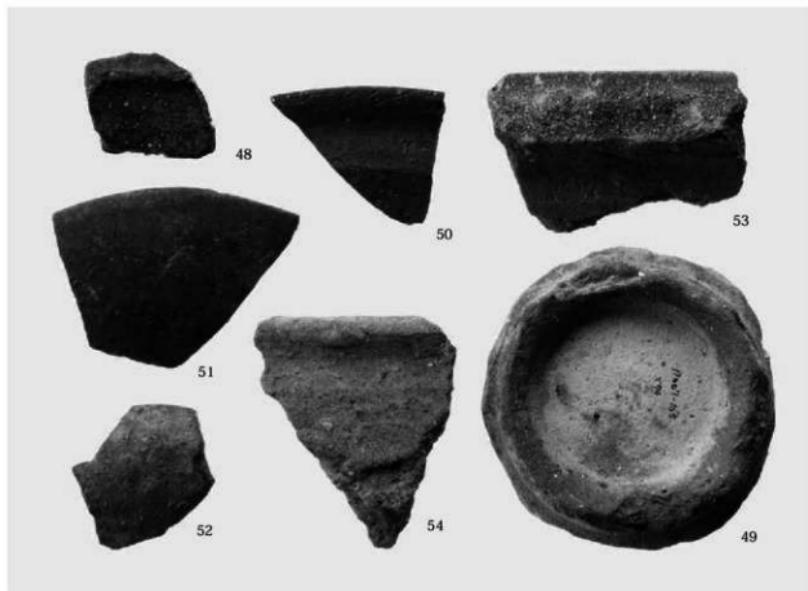


第1調査区遺構及び包含層出土遺物（3）

図版一九 第一調査区出土遺物（五）及び第二調査区出土遺物（一）

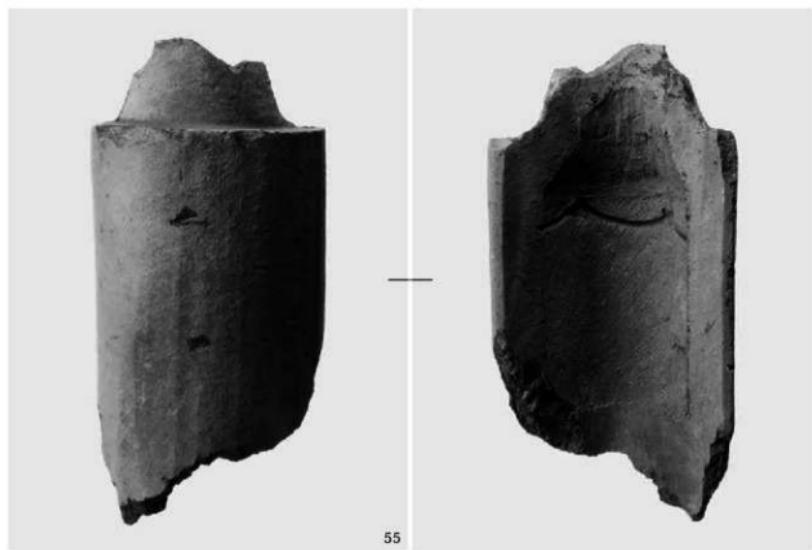


第1調査区遺構及び包含層出土遺物（4）

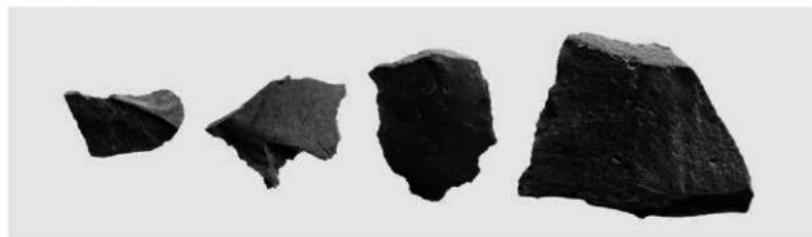


第2調査区遺構及び包含層出土遺物

図版二〇 第二調査区出土遺物(二) 及び第三調査区出土遺物



第2調査区出土瓦



第2調査区出土石器



第3調査区包含層出土遺物

図版二 第四調査区出土遺物（一）



75



74



66



73



67



70



69

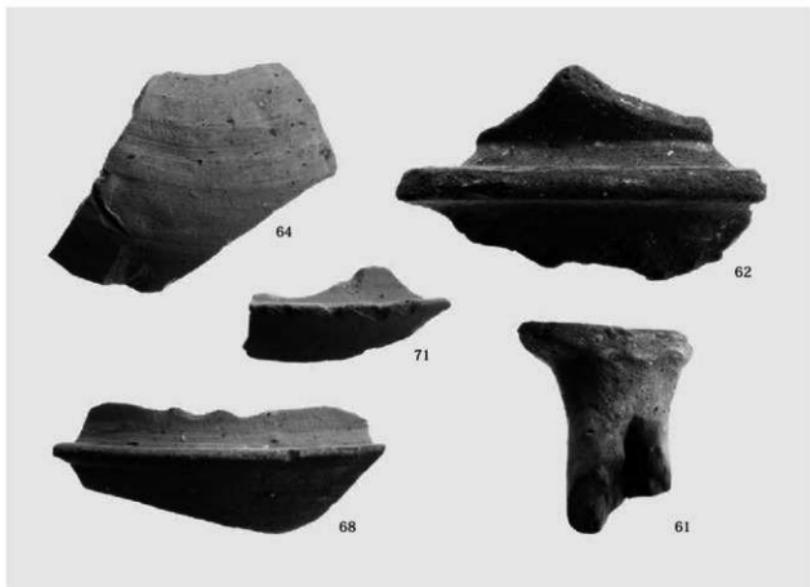


72

第4調査区落ち込み029出土遺物（1）

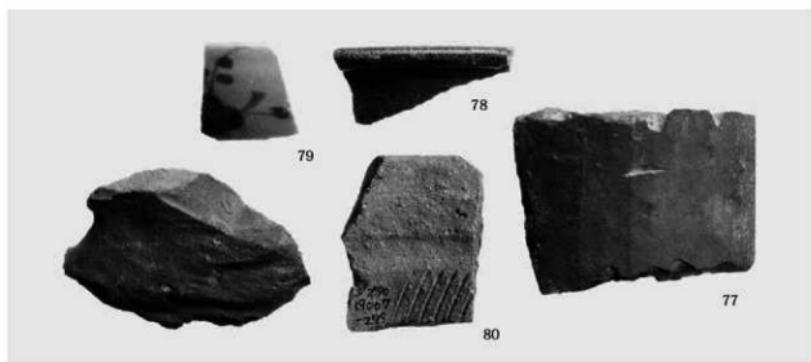


第4調査区落ち込み029出土遺物(2)



第4調査区落ち込み029出土遺物(3)

図版一三 第四調査区出土遺物（三）及び第五調査区出土遺物及び第六調査区出土遺物（二）



第4調査区遺構及び包含層出土遺物



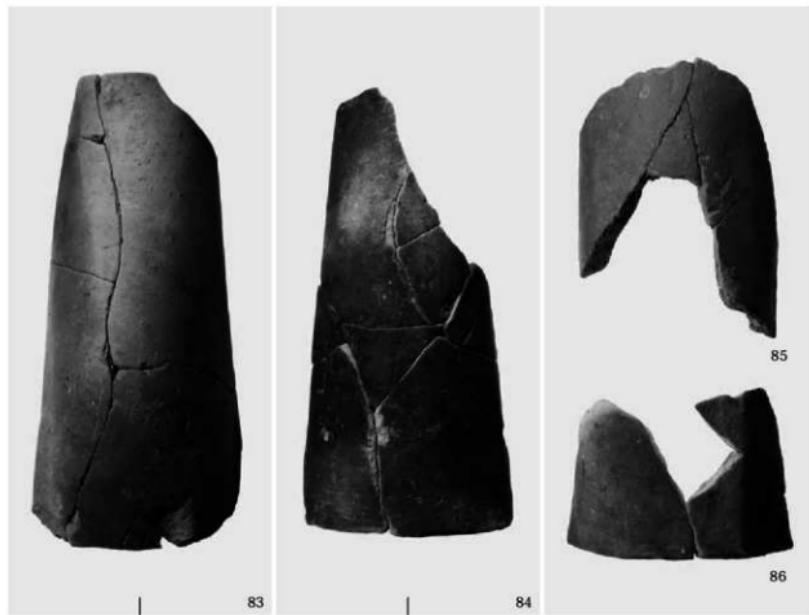
第5調査区土坑023出土石鐵

第6調査区出土石包丁



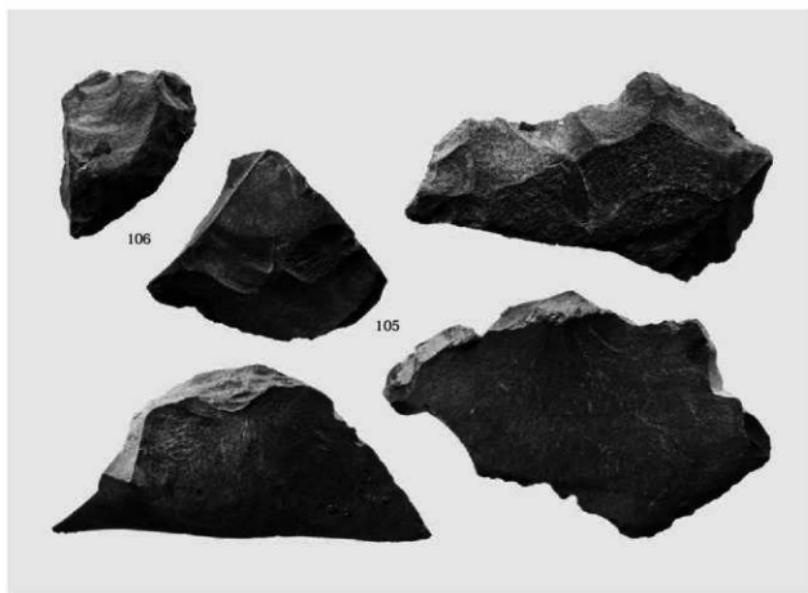
第6調査区出土瓦（1）

図版二四 第六調査区出土遺物（一）

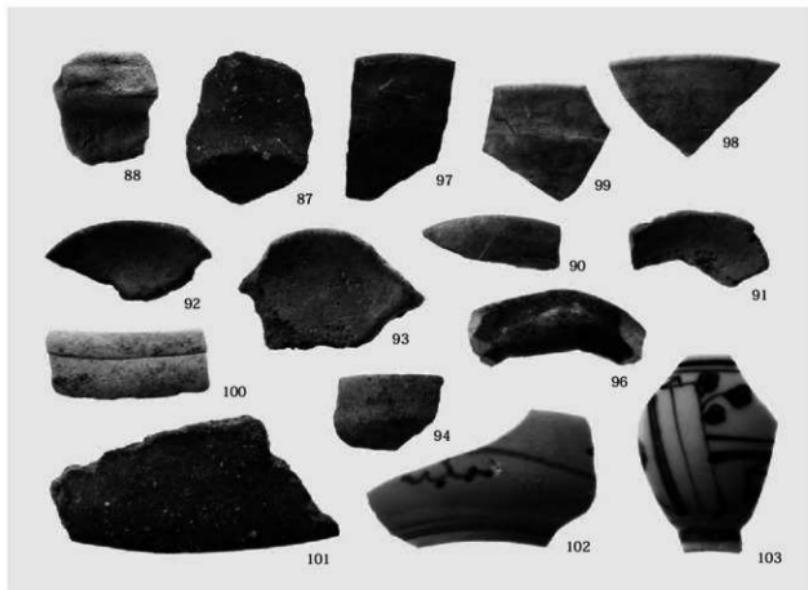


第6調査区出土瓦（2）

図版二五 第六調査区出土遺物(II)



第6調査区出土石器



第6調査区包含層出土遺物

報告書抄録

大阪府埋蔵文化財調査報告2020-3

中野北遺跡

—近鉄長野線単独立体交差事業に伴う発掘調査—

発行 大阪府教育委員会

〒540-8571 大阪市中央区大手前二丁目
TEL 06-6941-0351(代表)

発行日 令和3年3月31日

印刷 株式会社 近畿印刷センター

〒582-0001 柏原市本郷5丁目6番25号